

大和田建樹編
謡曲通解 第三卷

次目總解通曲謠

第壹卷 首卷●總論○歌舞の起原○猿樂の起原○能の大成○能の作者○明和の改正○能の組織○能の興味○
 ●高砂●田村●東北●道成寺●鶴岡●真盛●蒲野●卒郎婆小町●羽衣●竹生島●景清●好女●小袖會我●右近
 船●那那●千手●遊行柳●室君●張良●朝長●野宮●仲光●土蜘蛛●小腰●小督●大原御幸●百萬●船辨夏●岩

第二卷 ●老松●八島●江口●望月●紅葉狩●萬城●知草●玉葛●鞍馬天狗●海士●大蛇●夜討會我●三山
 ●熊坂●安達原●成陽宮●忠茂●隅田川●鉢木●藤榮●吳服●花月●花笠●蜀山●七騎落●金山
 羅生門●氷室●正保●宮土太鼓●鐵輪●唐船●四王母●巴●杜若●藤戸●山姥●嵐山

第三卷 ●白樂天●繁●楊貴妃●俊寛●壇風●難波●放下僧●松風●安宅●攝待●雨月●經政●求麻●天鼓●
 ●松虫●殺生石●草子洗●木賊●雷電●加茂●水曾●胡蝶●祇王●須磨源氏●大社●枕草子●井筒●伏
 見●花車●四行樓●調伏會我●融●第六天●鮎●夕願●錦木●阿清●大瓶狸

第四卷 ●三輪●生田●致盛●芭蕉●通小町●松山彌●放生川●春榮●牛蒡●姥捨●絃上●項羽●歌占●六浦
 ●一角仙人●野守●白髮●禪師會我●柏崎●自然居士●萬城天狗●大會●豐原與一●源氏供養●高
 野物狂●烏帽子折●水無瀬●東方朔●梅●龍太鼓●谷行●御養溜●初雪●飛鳥川●宮麻●合甫

第五卷 ●龍田●兼平●香願寺●葵上●藤原●登船●通登●浮舟●鶴尾小町●土車●飛雲●江の島●大佛供
 ●後成忠度●鏡破●加茂物狂●東岸目土●玉の井●現在七面●住百詣●二人醉●小鏡治

第六卷 ●和布刈●橋辨度●定家●國柄●輪藏●淡路●慶久●櫻川●椿垣●綿戸●吉野天人●藤海●要金山
 ●切派會我●草薙●隱形●舍利●佛原●神知島●藍染川●源大夫●雪●戀重荷●身延●嵯澄●羅漢
 ●久世戸●雲林院●女郎花●松山天狗●代主●蟻通●繪馬●龍王●狸

本書出版ノ目次ハ右ノ豫定ニ御座候得共每卷ノ紙數二百頁ト定メ候間紙數有限ノ
 爲メ目次ノ番數悉皆掲載難致分モ有之候得共右ハ本書七卷發行ノ後更ニ卷數ヲ増
 シ出版完成ノ心得ニ付陸續御愛顧ノ程奉願上候也

謠曲通解第三卷目次

白樂天	一
熊	七
楊妃	十三
假	二十
壇	二十七
難	三十四
放	四十
林	四十九
安	五十八
宅	六十一
攝	六十八
雨	七十三
經	八十一
政	九十三
塚	百四



天鼓	百十二丁
羅生門	百二十丁
氷室	百二十五丁
正尊	百三十二丁
富士太鼓	百三十九丁
鐵輪	百四十六丁
唐船	百五十二丁
西王母	百六十丁
巴	百六十四丁
杜若	百七十丁
藤戸	百七十八丁
山姥	百八十五丁
嵐山	百九十四丁

諸曲通解 第三卷

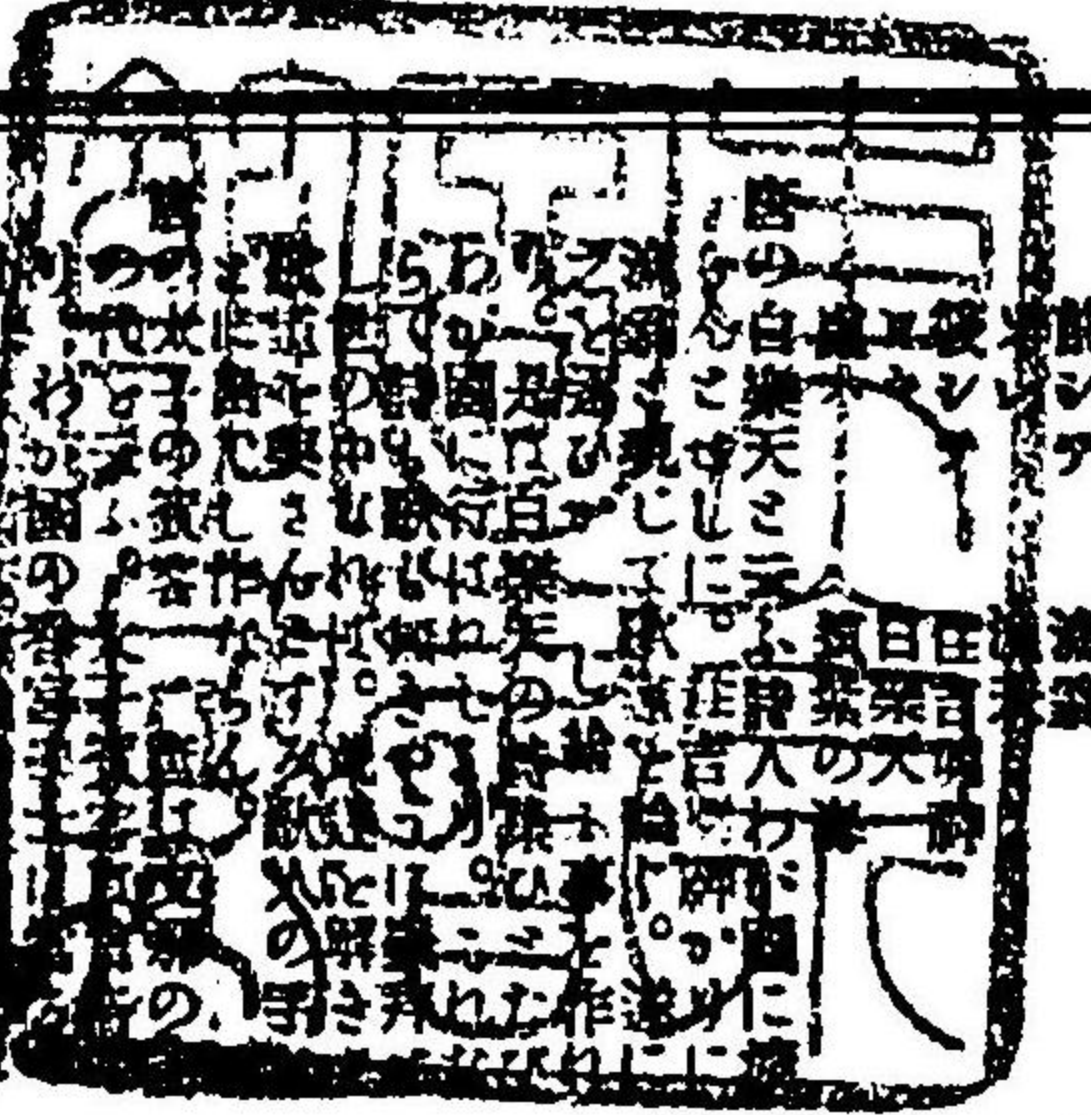
大和田建樹 編

白樂天

はくらくてん

元清作

白樂天は唐の太子の賓客。白樂天とは我事なり。扱も是より東に當つて國あり。名を日本と名づく。急ぎ彼土に渡り。日本の智慧を計れとの宣旨に任せ。唯今海路に趣き候ふ。次第「舟漕ぎ出で、日本の本の。其方の國を尋ねん。道行「東海の。波路遙し行く舟の。跡に入日の影残る。雲の旗手の天つ空。月また出づる其方より。山見えうめて程もなく。日本の地も着きにけり。詞「海路を経て急ぎ候ふ程よ。是ははや日本の地に着きて候ふ。暫く此所「碇をせろ。日本のやうを詠めばやと存



旗手。旗のやうに翻引く。雲と云ふ。入日の空のけしきなり。雲に引取らるる。前の「日の木の」の案内。日を受けて。雲。方角の月。再び。東の空に知らする。しらのひの。雲家の旗。月のみ。夜は明けはてたる。に。月のみ。天の間に。雲。大。巨水。青波が空まで。雲。此古事舟舞。松浦の海。甲の舟も乙の舟も。海は其方か唐土の。わが故郷の。月も程なき。月。海路の程なきと。程なきと。程なきと。程なきと。

と候ふ。
シテツレ一疊「しらぬひの。筑紫の海の朝ぼらけ。月のみ残るけい
さかな。シテサシ「巨水漫々として碧浪天を浸し。二人「越を辭せ
一范蠡が。扁舟に掉を移すなる。五湖の煙の波の上。かくやと
思ひ知られたり。あられもいろの海上やな。歌「松浦瀉。西に山
なき有明の。月の入る。雲も浮ぶや沖つ舟。互よかくる朝まだ
き。海は其方か唐土の。船路の旅も遠からで。一夜泊と聞か
らに。月も程なき名残かな。
ワキ詞「我萬里の波濤を凌ぎ。日本の地よも着きぬ。是に小船一
艘浮べり。見れば漁翁なり。如何よ何れなるは日本の者か。シテ
「さん候ふ是は日本の漁翁にて候ふ。御身は唐の白樂天よてま
ますな。ワキ「不思議やな始めて此土よ渡りたるを。白樂天と見
る事は。何の故よであるやらん。ツレ「其身は漢土の人なれども。

心づくしに。心と書いて待つ事
と筑紫に。心と書いて待つ事

空目 見送に同す。
むつしや。かゝる同答も面
なりとの意。目さへくとも
ふ。百葉のさへつるやうに聞え
て通らばこそ。唐の筑紫に。聞
きも知らばこそ。聞き知る事
も出来たしの意。

天然の盛文なり。階層尾と云ふ。楚
語の經文なり。

名は先立つて日本に聞てゆ。隠れなければ申すなり。ワキ「たど
ひ其名は聞てゆるとも。うれすとやがて見知る事。あるべき事
とも思はれず。二人「日本の智慧を計らんとて。樂天來り給ふべ
きとの。聞てえは昔き日の本よ。西を詠めて沖の方より。船だ
に見ゆれば人毎よ。すはやそれごと心づくしよ。地「今やくと
松浦舟。沖より見えて隠れなき。唐土船の唐人を。樂天と見る
事は。何か空目なるべき。むつかしやことさやぐ。唐人なれば
御詞をも。とても聞きも知らばこそ。あらよなや釣竿の。暇
をいや釣垂れん。
ワキ詞「なほく尋ねべき事あり舟を近付け候へ。如何に漁翁。
扱此頃日本には何事を翫ぶぞ。シテ詞「扱唐土には何事を翫ひ給
ひ候ふぞ。ワキ「唐よは詩を作つて遊ぶよ。シテ詞「日本にハ歌をよ
みて人の心を慰め候ふ。ワキ「うも歌とは如何よ。シテ「夫れ天然の

あひて歌ふゆを聞して。全く
念ずるは難きの意。人間は常に
入問右為の轉運。人間は常に
生死の海。八島に云へり。

夢の直路。夢の直路の意。路の
字を受けて歸らん云云。

嵐の梅。生田神社の中門外西の
方にあり云云。

追手。城門に追手を頼手の二つ
あり。追手は敵と追ひ拂ひ。頼
手は敵を討ちつゝ追ひ拂ひ。追
つゝ。生田は一谷の城の追手な
り。
梶原平三景時。頼朝に從ひて其
軍監たり。
同下き源太景季。景時の長子に
て同一軍中にあり。景時の追
手にあり。失をさして曾孫ふ道
具。

笠印。景季なりと知らせん爲め
に。梅をさして笠印とせしむ
る。始めは笠に笠々の印を附
たるより起れる詞。
氣色あらはに。誰か見ても景季
と知らるべし云云。
八幡の神木。八幡は源氏の祖神
なれば云云。

生田川の身を捨てて。今川
津の國の女「すみわびて我身
なげり。國の牛田の川は名
のみにあり。大和物語にあるに
て。弓矢の名。八島に云へり。
播磨の室山。源平二年源行家平
備中水島に。同年源義仲平家と
戦ひし處。

あら定めなの身命やな。人問有爲の轉運は。眼子の中一顯は
れて。閻浮に歸る妄執の。其生死の海なれや。生田の川の幾世
まで。夢の巻に迷ふらん。まゝとて身も行かへ。定めありと
ても終は。夢の直路に歸らん。

ワキ詞「如何に申すべき事の候ふ。是なる梅は名木にて候ふか。

シテ「さん候ふ是は笹の梅と申候ふ。あられもろや笹の
梅とは。いつの代よりの名木にて候ふぞ。いや名木程の事

は候はねども。唯私に申しならばはれたる異名にて候ふ。よ

く私一名付けたる異名なりとも。委しく御物語り候へ。

シテ「そもく此生田の森は。平家十万余騎の追手なり。源氏
の方に梶原平三景時。同じき源太景季。色ことなる梅花の有り

き。一枝折つてに笹さす。此花すなはち笠印となりて。氣色

あらはに著く。功名人なれば勝れりかは。景季かへつて此花を禮

すなはち八幡の神木と敬せしより以來。名將の古跡の花なれば
とて。笹の梅とは申すなり。實にや名將の古跡と云ひ名木
と云ひ。名残盡きせぬ年々に。降るは程なき春雨の。古
き歸る名を聞けば。其景季の盛りなり。若木の花
のあらま弓。笹の梅の。今までも。地名を留めし。主
は花の景季の。末の世かけて生田川の。身を捨てしこころ名は久
しけれ。武士のやたけ心の花に引く。弓矢の名こころ妙なれや。
地「さる程に平家は去年播磨の室山。備中の水島二箇度の合
戦より勝ちつて。山陽道南海道合はせて十四箇國の兵。都合十萬
余騎津の國一の谷より籠りける。東は生田の森。西は一
の谷を限つて。其間三里が程は満ちたり。浦々に數千
艘の船を浮べ。陸は赤旗いくらも立てなれば。春風は靡き天
は翻る有様。猛火雲を焼くかと思えたり。總じて此城の前

よりかくより。あちからも
云ひかけたる門は海門の意なり。

須磨の若木の櫻。唐皮に云へ
薄雲。小雲と云ふ程の意。
生田の木のつから。生田の小野
さには木葉などにより。故に
云ひかけたなり。大集經に一華開
一花開けては。天下春さある句を用ふ。

魚鱗鶴翼。軍法の名。
後の山松に云々。源氏の白旗と
雲や見立てし云ふ。義経は
鶴越より攻め寄せたり。

漁火の船影。平家の軍勢一
の谷に満ちくたれば。其赤旗
のたひたしきと火に見立てし
云ふ。
流火。是はちと無理の言方
なれど。流火として焚く火の意
なり。
かげろふ。嵐にあひて火勢の減
じて暗くなる意。源氏を嵐に譬
へたり。
天の鳥船。古事記に。「鳥之石
推那またの名は天鳥船」と云ふ。

は海後は山。地「左は須磨右は明石の。どよりかくより行きか
ふ舟の。共音の千鳥も聲々なり。クセ」時一も二月上旬の空の事
なれば。須磨の若木の櫻も。また咲きかぬる薄雪の。さえかへ
る波こよともよ。生田のれのづから盛りを得て。かつ色見する
梅が枝。一花開けては天下の春よと。軍の門出を祝ふ。心の花
も先かけぬ。さる程に味方の勢。六万余騎を二手に分けて。範
頼義経の追手搦手の。海山かけて須磨の浦。四方を圍みて押し
寄する。シテ「魚鱗鶴翼もかくばかり。地「後の山松にむれぬるは。
残りの雪の白妙よ。ねぐらを立たん真鶴の。翅を連ぬる其氣色。
雲にたぐへて夥多し。浦には海人様々の。漁父の船影數見えて。
漁たく火もかけろふや。嵐も波も須磨の浦。野も山にも漕ぎ
寄する。兵船はさながら。天の鳥船もかくやらん。
ロンギ地「はや夕ぼえの梅の花。月もちり行く假枕。一夜の宿を

さあり。これ舟の神なれば後に
はた舟の事と云ふ。鳥の文
字に就きて早き意に用ひしな
り。
夕ぼえ。夕日に照されて色のま
さる事。
花の主。船の梅の持主の意。
夕月の。今の木には夕草のさ
り。それにては影さかぬ。
細く。又草の名も聞きなれず。
故に改正本に月とあるを用ふ。

鶯宿梅 東北に云へり。

うば玉の 夜の枕詞。
夜の衣を返しつ。古今集なる
小野小町の歌に「いさめて戀
てしき時うば玉の夜の衣を返し
てぞ寐る」とある句を用ふ。衣
の夢に見ゆると云ふ。戀しき人
よりてなり。これも夢に長季の
幽霊を見んとすの意。
魂は云々。實盛朝長などに云へ
執心却來。殘る執念が此世に歸
り來るの意。合戦に心残りす
る事。
去つて生田の名にしはへり。安
執の去つて往くこと云ひかけて上
文と受け。生田川と名に似て下
文と起す。

借し給へ。シテ「我は宿りも白雲の。花の主と思し召さば。下臥
し待ち給へ。地「花の主と思へとは。御身如何なる人やらん。シテ
「今は何をか包むべき。我は此世に亡き影の。地「跡訪はれんと夕
月の。シテ「其景季が幽霊なり。地「御身他生の縁ありて。一樹の陰
の花の縁に。鶯宿梅の木の本よ。宿らせ給へ我は又。世を鶯の
ねぐらは。此花よとて失せにけり。此花よとてぞ失せにける。
ソキ歌「うば玉の。夜の衣を返しつ。更け行くまよ生田川。
水音も澄む夜もすがら。花の木陰に臥しにけり。
後シテ「魂は陽に歸り魄は陰に残る。執心却來の修羅の妄執。去
つて生田の名にしはへり。地「血は涿鹿の河となり。シテ「紅波橋
を流しつ。地「白刃骨を碎く苦しみ。月をも日をも手に取る影
かや。長夜のやみくと眼もくらみ。心も亂るく修羅道の苦
み御覽せよ。

血は源氏の河となり。源氏の多
 くの太古に源氏と云ふ。源氏は支那
 江波流し流し。血の流は紅色と
 意。源氏流し流し。源氏流し流し。
 月と日と。白刃のひらめく
 長夜のやみく。眠や心のく
 らむと暗夜の。やみくくは
 若武者。景季此時二十二歳。
 法味。これらも。但しこころには
 天地と。大地轉倒するは
 紅煙の旗。平家の赤旗とむら
 らしたる形容。

石室。花と雲にさす事。こゝ
 は源にさしたる梅の見立。

「不思議やな其さまいまだ若武者の。胡蝶に梅花の枝をさし。
 さも花やかに見え給ふは。如何なる人にてまゝますぞ。今
 は何をか包むべき。是は源太景季。他生の縁の一樹の陰に。夢
 中の對面向顔をなす。御身貴き人なれば。法味を得んと魂靈の
 魂は移りて來りたり。跡訪ひ給へといはんとすれば。又嘆悲の
 敵の攻め。あれ御覽ぜよ御聖。實にく見れば恐ろしや。
 劔は雨と降りかゝつて。天地をかへす如くにて。山も
 震動。海も鳴り。雷火も亂れ。惡風の。紅煙の
 旗を靡かす。閻浮に歸る生田河の。波を立て水を返す。山里
 海川も。皆修羅道の巷となりぬ。こは如何にあさましや。
 「暫く心を靜めて見れば。心を靜めて見れば。所は生田な
 りけり。時も昔の春の。梅の花盛りなり。一枝花折りて簾にさ
 せば。元來窈窕たる若武者よ。相逢ふ若木の花。懸くれば簾

大わらは。さばけ髪をかぶりた
 はる。まはれ。落ちて頭のみら
 拜み打ち。車切。蜘蛛手
 十文字。鶴翼。飛行。何れも
 法兵法の手の名。

の花も源太も。我先かけん先かけんどの。心の花も梅も。散
 りかゝつてれもいろや。敵の兵之を見て。あつばれ敵も逃がす
 などで。八騎が中に取り籠めらるれば。胃も打ち落とされ
 て。大わらはの姿となつて。耶等三騎に後を合はせ。
 「向ふ者をば。拜み打ち。又廻り合へば。車切。蜘蛛手
 蜘蛛手かく繩十文字。鶴翼飛行の秘術を盡すと見えつる内よ。夢
 覺めて。いらくと夜も明くれば。是までなりや旅人よ。暇申
 して花は根よ。鳥は古巢に歸る夢の。鳥は古巢に歸るなり。よ
 くく吊ひて給ひ給へ。

楊貴妃

やうきひ

氏信作

唐の玄宗皇帝に寵姫あり。名を楊
 貴妃と云ふ。死後皇后は御魂き
 のあまりに魂の行方を尋はしめ
 る。方士とて此物に造りし給
 ふ。本を仙界に造りし給
 集の長恨歌とて。此物に造りし給
 ば。まづ本文を讀み置きて。其
 字句の由。長恨歌の時に見

ソキ次第「我まだ知らぬ東雲の。道は何處と尋ねん。是は唐土
 玄宗皇帝に仕へ申す方士よて候ふ。扱も我君政正くまゝ

皇... 色を重んじ... 楊家の娘... 馬嵬が原... 魂魄のありか... 蓬萊官... 波路を分けて... 急ぎ候ふ程に... 蓬萊官に到着... 官殿盤々... 長生驪山のありさま... 是は更になづらふ

十四

中。色を重んじと艶を専と給ふにより。容色無雙の美人を得たまふ。楊家の娘たるよよつて其名を楊貴妃と號す。然れどもさる子細あつて。馬嵬が原にて失ひ申して候ふ。餘りに帝歎かせ給ひ。急ぎ魂魄のありかを尋ねて參れとの宜旨に任せ。上碧落下黄泉まで尋ね申せども。更に魂魄のありかを知らず候ふ。爰にいまだ蓬萊官に至らず候ふ程に。此度蓬萊官よと急ぎ候ふ。道行尋ね行く。幻もがなつてよても。魂のありかは其處とよも。波路を分けて行く舟の。ほのかに見えし島山の。草の假寐の枕ゆふ。常世の國に着きにけり。急ぎ候ふ程に。蓬萊官に到着して候ふ。此所にて委しく尋ねばやと存じ候ふ。ソキ「有りし教に随つて。蓬萊官に來て見れば。官殿盤々として更に邊際もなく。莊嚴翹々としてさながら七寶をちりばめたり。漢宮萬里の粧ひ。長生驪山のありさまも。是は更になづらふ

十四

皇... 色を重んじ... 楊家の娘... 馬嵬が原... 魂魄のありか... 蓬萊官... 波路を分けて... 急ぎ候ふ程に... 蓬萊官に到着... 官殿盤々... 長生驪山のありさま... 是は更になづらふ

べからず。あら美一の所やな。又教の如く官中を見れば。太眞殿と額のうたれたる官あり。まづ此所に徘徊し事の由をもうか。はばやと存じ候ふ。シテ「昔は驪山の春の園。共に詠めし花の色。移れば變はるならひとて。今は蓬萊の秋の洞に。ひとり詠むる月影も。濡る顔なる袂かな。あら戀のいよゝやな。ソキ「唐の天子の勅の使。方士是まで参りたり。玉妃は内よまますか。シテ「何唐帝の使とは。何に爰よ來れるぞと。九華の帳を押しかけて。玉の簾をか上げつ。ソキ「立ち出で給ふ御姿。シテ「雲の鬢づら。ソキ「花の顔ほせ。二人「寂寞たる御眼の内。涙を浮べさせ給へば。地「梨花一枝。雨を帯びたる粧ひの。太液の芙蓉の紅。未央の柳の綠も。是にはいかで優るべき。實にや六官の粉黛の。顔色の無きも理や。

十五

限て直に申す。原文を引用して...
わがまた知らぬ東宮の...
東宮の御命も危く見えさせ給ひて候ふ。然れば宣旨...
御政は怠り給ひぬ。いはんやかくなるらせ給ひて後。唯ひたすら...
の御歎きに。今は御命も危く見えさせ給ひて候ふ。然れば宣旨...
に任せはまで尋ね参り。御姿を見奉る事。唯是れ君の御志。浅...
からざりし故と思へば。いまく御痛はあうこう候へ。シテ「賈...
に。汝が申す如く。今はかひあき身の露の。有るよもあらぬ...
魂のありかを。是まで尋ね給ふ事。御情は似たれども。訪ふ...
につらさのまさり草。枯やならば中々の。便の風は恨めしや。
又今更の戀慕の涙。舊里を思ふ魂を消す。
「扱も有るべき事ならねば。急ぎ歸りて奏聞せん。さりな...
から御形見の物を給ひ給へ。シテ「是こそありし形見よとて。玉の...
釵とり出で。方士と與へ給ひければ。「いやとよ是は世の...
中よ。たぐひ有るべき物なれば。いかでか信と給ふべき。御身

常世の國 神界または仙界と云...
世界の意。丸く廻りて家の立ちたる...
遊歴もなく 廣くはてもなき...
七寶 高き文に依りては、はりあ...
阿彌陀佛 赤珠。珊瑚。琥珀。玳瑁。...
水鏡。明鏡。明月。明月。明月。明月。...
長生。長生。長生。長生。長生。長生。...
太真殿。太真殿。太真殿。太真殿。太真殿。太真殿。...
香の山。香の山。香の山。香の山。香の山。香の山。...
春の園。春の園。春の園。春の園。春の園。春の園。...
玉のすだれ。玉のすだれ。玉のすだれ。玉のすだれ。玉のすだれ。玉のすだれ。...
哀哀たる御眼の内。哀哀たる御眼の内。哀哀たる御眼の内。哀哀たる御眼の内。哀哀たる御眼の内。哀哀たる御眼の内。...
梨花一枝。梨花一枝。梨花一枝。梨花一枝。梨花一枝。梨花一枝。...

と君と人知れず。契り給ひ一言の葉あらば。うれをいする。申すべし。シテ「賈もく是も理なり。思ひ出すづる我も又。其初秋の七日の夜。二星は誓ひ一言の葉にも。地天は在らば願はくは。比翼の鳥と爲らん。地に在らば願はくは。連理の枝と爲らんと。誓ひし言を密に傳へよや。私語なれども。今洩れ初むる涙かな。地「されども世の中の。流轉生死のならひとて。其身は馬鹿に留まり。魂は仙宮に至りつ。比翼も友を戀ひ。獨翹をかたしき。連理も枝朽ちて。忽ち色を變ずとも。同じ心の行くへならば。終の逢ふ瀬を頼むと語り給へや。ロンギツキ「さらばといひて出舟の。伴ひ申し歸るさど。思ははれ。猶如何ならん其心。シテ「我は又。なよ中々よ三重の帯。廻り逢はんも知らぬ身よ。よ。さらば暫し待て。有りし夜遊をなすべし。地「賈にや驪山の宮の内。月の夜遊の羽衣の曲。

と君と人知れず。契り給ひ一言の葉あらば。うれをいする。申すべし。シテ「賈もく是も理なり。思ひ出すづる我も又。其初秋の七日の夜。二星は誓ひ一言の葉にも。地天は在らば願はくは。比翼の鳥と爲らん。地に在らば願はくは。連理の枝と爲らんと。誓ひし言を密に傳へよや。私語なれども。今洩れ初むる涙かな。地「されども世の中の。流轉生死のならひとて。其身は馬鹿に留まり。魂は仙宮に至りつ。比翼も友を戀ひ。獨翹をかたしき。連理も枝朽ちて。忽ち色を變ずとも。同じ心の行くへならば。終の逢ふ瀬を頼むと語り給へや。ロンギツキ「さらばといひて出舟の。伴ひ申し歸るさど。思ははれ。猶如何ならん其心。シテ「我は又。なよ中々よ三重の帯。廻り逢はんも知らぬ身よ。よ。さらば暫し待て。有りし夜遊をなすべし。地「賈にや驪山の宮の内。月の夜遊の羽衣の曲。

大液の芙蓉の雲々。大液は禁中
 の御殿の名。芙蓉は蓮の花。未
 はの御殿の名。芙蓉は蓮の花。未
 六宮の粉黛の唐土のさかたに。
 皇太后は正統の唐土のさかたに。
 之と併はせて六宮の唐土のさか
 附ける事なり。唐土のさかたに
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。
 朝政は取り給ひて無しとの意。

シテ「其かぎりにて舞ひいとて。地「又取りかぎし。シテ「さす袖の。
 地「そよや霞裳羽衣の曲。うしろに濡るゝ袂かな。シテ「何事も夢
 幻のたはむれや。地「あはれ胡蝶の舞ならん。
 シテ「夫れ過去遠々の昔を思へば。いつを衆生の始めと知ら
 ず。地「未来永々の流轉。更に生死の終りもなし。シテ「然る
 に二十五有の内。何れか生者必滅の理に洩れん。地「先天上の五
 衰より。須彌の四州のさまぐに。北州の千年つひに朽ちぬ。
 シテ「いはんや老少不定の境。地「歎きの中の歎きとかや。シテ「我
 も其かみは。上界の諸仙たるが。往昔のちなみありて。假し人
 界に生れ来て。楊家の深窓に養はれ。いまだ知る人なかりし。
 君聞あし召されつく。急ぎ召し出たし。后宮に定め置き給ひ。
 借者同穴のかたらしも。縁盡きぬれば徒し。又此島にたゞ獨。
 歸り來りて澄む水の。あはれはかなき身の露の。たまさかよあ

ていかに一つづつと持
 りて相違ひなく二本の
 木が相違ひなく二本の
 枝。共に夫婦の離れざるに
 私語。他人に知らせぬ密話と云
 今流れ初むる。密話の流るゝと
 流す生れの留るゝと。人間は生
 死の定期なるを云ふ。楊貴妃の
 其身は馬嵬に留まり。楊貴妃の
 死せし土地の名。原詩に「馬嵬
 城のほとけに死せし玉顔と見
 是なり。
 比翼も友と戀ひ。天にあらば比
 翼も枝朽ちて別れたらば。今一人
 運も枝朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人
 同折れ朽ちて別れたらば。今一人

ひ見たり。靜に語れ憂きむかふ。シテ「さるよても。思ひ出づれ
 ば恨ある。地「其文月の七日の夜。君とかはせし睦言の。比翼連
 理の言の葉も。枯々よなる私語の。篠の一夜の契りたし。名残
 は思ふならひなるよ。まゝてや年月。馴れて程経る世の中よ。
 さらに別れのなかりせば。千代も人よは添ひてまゝ。よゝうれ
 どももののがれ得ぬ。會者定離すと聞く時ハ。逢ふおそ別れなり
 けれ。
 地「羽衣の曲。シテ「羽衣の曲。稀よ返す少女子が。地「袖うち振
 れる心くるや。シテ「戀しき昔の物語。地「戀しき昔の物語。盡
 さば月日も移り舞の。ゝるゝの釵又賜はりて。暇申してさらば
 とて。勅使を都に歸りければ。シテ「さるよても。地「君には
 此世逢ひ見ん事も。蓬が島つ鳥。浮世なれども戀しや昔。はか
 なや別れの。常世の臺に。伏し沈みてぞ留まりける。

論山通解 第三卷 十八 古文新編 十九

ふや... 羽衣の曲... 雲の二字と... 夢の聲なり...

胡蝶... 二十五... 羽衣... 北河... 天の死... 羽衣... 仙人... 仙見...

後見... 同... 俊寛... 丹波... 平判... 成經... 相國... 中宮... 御産... 非常... 丹波... 鬼界... 平判... 熊野... 願も... 成經... 願も... 九州... 丹波... 平判... 熊野... 願も... 成經... 願も... 九州... 丹波... 平判... 熊野... 願も... 成經... 願も...

俊寛 しゅんくわん 一名 鬼界島 元清作

ソキ詞「是は相國に仕へ申す者よて候ふ。扱も此度中宮御産の御...

祈りの爲めは。非常の大赦行なはるゝより。國々の流人赦免あ... 二人赦免の御使をば。某承つて候ふ間。唯今鬼界が島へと急ぐ候ふ。

成經康頼「神を疏黄が島なれば。願ひも三つの山ならん。是は九州薩摩湯。鬼界が島の流人の内。成經「丹波の少將成經。康頼「平判官入道康頼。二人二人が果して候ふなり。われら都よりあり。一時。熊野参詣三十三度の。歩みをなさんと立願せし。其半にも敷足らで。かゝる遠流の身となれば。所願も空しく早なりぬ。せめての事の餘りや。此島に三熊野を勸請申し。都より道の中の。九十九處の王子まで。歌「ことごとく順禮の。神路に幣を捧げつゝ。ことごとくも。同じ官居と三熊野の。浦の濱木綿ひとへなる。麻衣のさるるを。只其まゝの白衣よて。眞砂を取

成經の二人は熊野を侍せし... 相國。大政大臣の異名。清盛と... 中宮。高倉天皇の御后を指す。... 御産。安徳天皇御誕生あるべき... 非常の事。時の大赦と云... 丹波の少將成經。新大納言成親の... 鬼界が島。薩摩の沖にある十二... 平判官入道康頼。俊非運使討たりし... 故に判官と云ふ。判官は討つ異... 神を疏黄が島なれば。いはふは... 願も三つの山ならん。三つの山... 熊野参詣三十三度。熊野に三十... 山の内。熊野に観音を侍りたれ... 此度は三社とも伊弉冉尊。熊野の... 三熊野は三社とも伊弉冉尊。熊野の... 本は美禰の駒なる。近古以來

勸請の三山の意に用ふ。九十九歳に於て...

白木綿花の御秘... 神の御座候ふ。...

白木綿花の御秘... 神の御座候ふ。...

りて散米。白木綿花の御秘して。神に歩みをはこぶなり。シテ一塵「後の世を。待たて鬼界が島守と。」

底も白衣の。ぬれてはす。山路の菊の露のまよ。我も千年をふる心地する。配所はさてもいつまでぞ。春す夏たけて又。秋暮れ冬の來るをも。草木の色が知らするや。

山通解 第三卷 康頼 二十三 傳文官裁取

道徳 神託して儲る人と祝ひ
 迎ふる事。伊勢宮に酒迎せて
 するに同じ。
 竹葉 酒の異名。
 雁 九月九日を云ふ。神皇
 正統記に「其年七百餘歳し
 て色壯にして十七八歳の如し」と
 あり。
 白衣の 知らずと云ひかけて。
 赤衣にても青衣にてもさし
 つねては山路の菊の露の間に
 ついでに仙家の菊を分け入る人
 集の歌。仙家の菊を分け入る人
 乾すほどの間と思ひしに。ちよ
 千年を經たるならんとの意。水
 雲は仙界にて年月の早く立つ
 心地する意に用ふ。
 配所 配所の流されたる土地。
 草木の色ぞ 春秋の季候と草木
 法成寺 愛宕郡岡崎村にあり。
 法成寺 近衛の北。京極の東に
 あり。法成寺と音近き故に並べ
 た。喜見城の心地して。法成寺
 法成寺の花とも快樂になかめた
 五葉 草木の色はりて秀み美
 ぶると云ふ。

ある所なり。シテ「何とて俊寛をば讀み落と給ふぞ。康頼御名
 はあらばこそ。赦免狀の面を御覽候へ。シテ「さては筆者のあや
 まりか。ワキ「いや某都にて承り候ふも。康頼成經二人は御供申
 せ。俊寛一人をば此島に残し申せとの御事にて候ふ。
 シテ「こはいかに罪も同じ罪。配所も同じ配所。非常も同じ大赦
 なるに。一人誓ひの網ももれて。沈みはてなん事はいか。此
 ほどは三人一處ありつるだ。さも恐ろしく冷まき。荒磯
 島よた一人。離れて海士の捨草の。波の藻屑のよるべもなく
 て。あられん物かあさまや。歎くにかひも渚の千鳥。泣くほ
 かりなるありさまかな。地「時を感じては花も涙をうとぞ。
 別れを恨みては。鳥も心を動かせり。もとよりも此島は。鬼界
 が島と聞くなれば。鬼ある所にて。今生よりの冥途なり。たと
 ひ如何なる鬼なりと。此あはれなどか知らざらん。天地を動か

落つる水の葉の盛 落葉と盛と
 飲む酒は谷水の 酒はすなはち
 なり。又涙川云々 古今集
 思ふ時の我身なりけり」より來
 敬狀 長門本平家物語に敬免
 狀の文句をあげて曰く。常中
 宮御座方。萬葉集。人前少將藤
 原朝臣成經。並平朝臣康頼。法師可
 依。到。由。御氣色所。候也
 誓ひの網 佛の慈悲と云ふ。期
 法師と見へし。こは恩免の
 波の藻屑のよるべもなくて。波
 雲。藻屑の如くたよりなきと
 結の千鳥 泣くばかりの聲。
 結の千鳥 泣くばかりの聲。
 杜丘全集の詩。其時節に感ずる
 事。あはれ。花を見て涙と。こは
 し。人の別離と恨む時。こは
 の鳴くを聞きて。我心を驚かし
 鬼なりと。鬼なりとの意。
 天地を動かす 鬼神も感と。古今
 集。天竺の句と用ふ。本文は
 集。天竺の句と用ふ。本文は
 集。天竺の句と用ふ。本文は
 集。天竺の句と用ふ。本文は

鬼神も感をなすなるも。人のあはれなる物を。此島の鳥獸も。
 亡くは我を吊ふやらん。シテ「せめて思ひの餘りにや。地「とき
 讀みたる巻物を。又引き開き同じとぞ。くりかへくりかへ
 見れどもくた。成經康頼と。書きたる其名ばかりなり。
 もとも禮紙もやあるらんと。巻きかへて見れども。僧都ども
 俊寛ども。書ける文字の更にな。こは夢か扱も夢ならば。さめ
 よくと現無き。俊寛が有様を。見るころあはれなりけれ。
 ワキ「時刻うつりてかなふまじ。成經康頼二人ははや。御船に召
 され候へとよ。成經康頼「かくてあるべき事ならねば。よろの歎き
 をふりすて。二人を船にのらんとす。シテ「僧都も船に乗らん
 とて。康頼の袂にとりつけば。ワキ「僧都は船にかなふまじと。
 さも荒けなく云ひければ。シテ「うたてやな公の私といふ事にあ
 れば。せめては向ひの地までなりとも。情に乗せて給ひ給へ。

もし紙にや 本式の書状と
 紙の白紙に書きたる紙の上を
 紙の白紙に書きたる紙の上を
 紙の白紙に書きたる紙の上を
 紙の白紙に書きたる紙の上を
 紙の白紙に書きたる紙の上を
 紙の白紙に書きたる紙の上を

申し直しつゝ 清盛に然るべく
 歸洛を待てよとの。呼はる聲も幽なる。頼みは松陰。音を
 泣きごとへ聞きわたり。三人「聞くやいかよと夕波の。皆聲々
 俊寛を。シテ「申しなほさばほどもなく。三人「かならず歸洛ある
 べーや。シテ「うれば誠か。三人「なか〜。シテ「頼むがよ頼も

ワキ「情も知らぬ舟子ども。櫓をふりあげ打たんとす。シテ「こ
 すが命のかな〜さ。又立ち歸り出船の。船ともづな〜取りつ
 き引きどむる。ワキ「舟人ともづな押切切つて。船を深み〜押
 出だす。ワキ「せん方波にゆられながら。た〜手を合はせて船よ
 のう。ワキ「船よとい〜と乗せされば。シテ「力及ばず俊寛は。地
 「もとの渚ひれふ〜て。松浦佐用姫も。我身よはよも増さじと。
 聲も惜〜まず泣き居たり。
 三人「ロンギ「いたは〜の御事や。我等都〜上りなほ。よきやう〜申
 一直〜つ〜。やがて歸洛はあるべ〜。御心づよく待ち給〜。シテ
 「歸洛を待てよとの。呼はる聲も幽なる。頼みは松陰。音を
 泣きごとへ聞きわたり。三人「聞くやいかよと夕波の。皆聲々
 俊寛を。シテ「申しなほさばほどもなく。三人「かならず歸洛ある
 べーや。シテ「うれば誠か。三人「なか〜。シテ「頼むがよ頼も

泣き〜して 泣き〜しての意。
 「聞くや如何にうはの空なる風
 は「〜と云ふ歌もあれば。心丈夫
 音信あらん。と。全首の意を初句
 六文字に含めたるなり。

前シテ
 不勤明王
 師阿闍梨
 本問三郎

元弘の亂れ 北條の家來と云ふ。
 御家人 北條の家來と云ふ。
 元弘の亂れ 北條の家來と云ふ。
 御家人 北條の家來と云ふ。
 元弘の亂れ 北條の家來と云ふ。
 御家人 北條の家來と云ふ。

〜くて、地「待てよ〜といふ聲も委も。次第〜遠さかる沖つ波
 の。かすかなる聲絶えて。船影も人影も。消えて見えすなり〜
 けり。あと消えて見えすなり〜けり。

壇風

だんふう

元清作

本問詞「かやう〜候ふ者は。佐渡の島の御家人本間の三郎何某〜
 て候ふ。扱も此度元弘の亂れ〜公家うち負け給ひて候ふ。中〜
 も壬生の大納言資朝の卿は。囚人となり此島へ流され給ひて候
 ふを。某預かり申〜候ふ處よ。昨日都より飛脚立つて。大事
 の囚人〜御坐候ふ程よ。誅〜申せどの御事〜候ふ間。此由
 を資朝の卿へ申さばやと存じ候ふ。如何〜誰か有る。狂言「御前
 候ふ。本問「昨日都より飛脚立つて。資朝の卿を急ぎ誅〜申せ
 どの御事〜候ふ間。明日濱の上野〜誅〜申すべし。今夜はか

備と始め。其主謀たる後正資朝
 などと召し捕りしより本起り
 て。遂に笠置に行幸あるに至り
 し。藤原の云ふ。是れ實に元弘元
 年なり。
 壬生の大納言。日野大納言の事。
 當時に近き物語ゆゑ。殊更に呼ひ
 置へたるものなり。
 越路の旅。越前より乗船する路
 ならは云ふ。越前より乗船する路
 今時野。京都にあり。紀伊の熊
 野と移したる社。
 客僧。山伏の事。
 梅若子。女正本には太平記に依
 りて阿蘇(クマノカ)に作る。こ
 れも殊更に作り替へたるなるべ
 し。

白眞弓。越の海と始めて知るこ
 云ひ。けて。並と呼び出たす。
 教賀の津。越前の國教賀郡にあ
 り。佐渡に渡海する乗船所。

囚人奉行。囚人の係り役人を云
 ふ。

りの事なれば。如何にも番を堅く申し付け候へ。又囚人の由縁
 は對面は禁制にて有るぞ。其分心得候へ。狂言「畏つて候ふ。
 ワキ子次第「親の行くへを尋ね行く。越路の旅はるけき。ワキ詞
 「是は都今熊野郡の木の坊。帥の阿闍梨と申す客僧にて候ふ。
 又是は渡り候ふ幼き人は。壬生の大納言資朝の卿の御子息。梅
 若子と申し候ふ。資朝の卿は遠流の身となり給ひ。佐渡の島に
 御座候ふを。今一度御對面有りたき由仰せられ候ふ間。頼まれ
 申し都を忍び出で。唯今御供申し。佐渡の島へと急ぎ候ふ。
 道行「名残ある。都の空は遠ざかり。未は遙の越の海。今が始め
 て白眞弓。教賀の津より舟出。波路遙の旅衣。浦々泊り重
 なりて。行けば沖にも里見ゆる。佐渡の島にも着きにけり。
 ワキ詞「急ぎ候ふ程に。佐渡の島に着きて候ふ。此所にて囚人奉
 行をば本間とやらん申し候ふ。先々案内を申さうするよて候ふ。

此方へ御入り候へ。 梅若子云ふ

此方へ御入り候へ。如何に案内申し候ふ。狂言「誰にて渡り候ふぞ。
 ワキ「囚人奉行本間殿とは此御館にて候ふか。狂言「さん候ふ本間
 殿の館にて候ふ。何の御用よて候ふぞ。ワキ「是は都今熊野郡の
 木の坊。帥の阿闍梨と申す山伏にて候ふ。又是は渡り候ふ。
 幼き人は。壬生の大納言資朝の卿の御子息。御名をば梅若子と
 申し候ふ。父御。今一度御對面ありたきとて。遙々是まで御下
 向候ふ。此由本間殿へ御申し有つて。資朝の卿へ對面させ申さ
 れて賜はり候へ。狂言「委細承り候ふ。總じて囚人のゆかりなど
 の御尋ね候は。申し次ぐまじき由定め置かれ候へども。幼き
 御方の遙々都より御下向候ふ程に。某が心得よてそと本間殿へ
 申し候ふへ。暫くうれに御待ち候へ。ワキ「心得申し候ふ。
 狂言「如何に申し上ぐべき事の候ふ。本間詞「何事ぞ。狂言「御門に
 案内を申し候ふまかり出で候ふ所。客僧の一人十二三ばかり

なる幼き人を御供あつて。是は都今熊野郷の木の坊に。帥の阿
 關梨と申す山伏にて候ふが。此幼き人は壬生の大納言殿の御子
 にて御座候ふが。父御に今一度御對面ありたきとて遙々是まで
 御下向の由申され候ふ程。惣じて囚人のゆかりなどは堅く御
 禁制の由申し候へども。ひらうと申し入れてくれよと餘り
 御歎き候ふ程に。扱御披露申し候ふ。本問「汝が申す如く。囚人
 のゆかりなどの事は。叶ふまじきとの大法なれども。幼き人の
 はるく御下り候ふ事。あまり痛はく候ふ間。うと出で
 彼山伏見參申さうする由を申し候へ。狂言「畏つて候ふ。如何
 客僧の御坐候ふか。ワキ「承り候ふ。狂言「仰の通りを申し入れ
 て候へば。幼き御方の遙々御下向候ふ事。あまり痛はく
 候ふ程。うと御目よかふるべき由を仰せられ候ふ。直委
 く御申し候へ。ワキ「近頃祝着申して候ふ。

本問詞「都よりの客僧は何處に渡り候ふぞ。ワキ詞「さん候ふ是
 候ふ。本問「これは何の爲めの御下向にて候ふぞ。ワキ「唯今申
 入れ候ふ如く。是は都今熊野郷の木の坊。帥の阿關梨と申す
 山伏にて候ふ。又こゝに渡り候ふ幼き人は。資朝の卿の御子息
 御名をば梅若子と申し候ふ。資朝の卿は流人となり。此島に御
 坐候ふ由聞こゝめ及ばれ。今一度御對面ありたき由にて愚僧
 を御頼み候ふ程。遙々是まで御供申して候ふ。然るべきやう
 に御申し候ひて。引き合はせ申されて賜はり候へ。本問「扱は資
 朝の卿の御子息にて御座候ふか。是まで遙々の御出神妙に存じ
 候ふ。總じて囚人のゆかりなどに對面ハ堅く禁制にて候へども。
 はるく是まで御下向にて候ふ程に。其由資朝の卿へ申。對
 面させ申さうするにて候ふ。暫くうれし御待ち候へ。ワキ「心得
 申し候ふ。さらば是に待ち申し候ふべし。

科なうして、御所の月と見る事
 中納言藤原頼基は、御所の月と見
 なくして見れば、常に云はれし
 事。御車子に見ゆ。後一條天皇
 の時の人なり。後一條天皇
 住みはつまき世の中に、遂に
 は死ねば、疾く斬られ
 ばや。

「籠鳥は雲を戀ひ。歸雁は友を忍ぶ心。うれば鳥類にこ
 う聞きしに。人間に於いて我ほど物思ふ者はよもあらじ。實に
 や科なうして配所の月を見る事。古人の望む所なれども。住み
 はつまき世の中に。明暮物を思はんより。天晴とう斬られ候
 はばや。」

本間詞「あら痛はーや何事やらん獨言を仰せ候ふよ。如何に申
 候ふ。本間が参りて候ふ。本間殿と仰せ候ふか此方へ御
 出で候へ。本間「唯今参る事餘の儀に非ず。昨日都より飛脚立つ
 て。急ぎ誅し申せとの御事にて候ふ程に。明日濱の上野に御供申
 し。御痛はーながら誅し申候ふべし。御最期の御用意あらう
 ずるにて候ふ。只今も獨言に申し候ふ如く。かくてながら
 諸人に面をさらさんより。とく誅せられたきと申し候ふ事。扱
 は叶ひて候ふよ。本間「又歎きの中の御悦びの候ふ。都今熊野柵

難なる

本間なるに同じ。

の木坊に。帥の阿闍梨と申す山伏の。十二三ばかりなる幼き人
 を伴ひ申され。是は資朝の卿の御子息梅若子よて御座候ふが。今
 一度御對面ありたきとて。遙々御下向候ふ。うと御對面候へ。
 「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。日頃事のついでに申
 つる如く。某は總じて子を持たぬ者よて候ふ。定めて門九がひよ
 て候ふべし。急いで追つ歸され候へ。何と御子は持たれぬと
 仰せ候ふか。中々の事。扱は聊爾なる事を申す者よて候
 ふ。やがて追つ歸候ふべし。さりながら。都より遙々來りたる心
 中あまり不便候ふ程。物越ようと御覽候へ。げに
 都の者はゆかしく候ふ程に。さらばうと見うざるよて候ふ。本間
 「あれく御覽候へ。さればこころ思ひもよらず。一向よいら
 ぬ者よて候ふ。急いで追つ歸され候へ。あら不思議や。御子
 息よてはなき由仰せられ候ふか。何とて御落涙候ふぞ。御

不審尤よて候ふ。彼者の親も我等如きの流人よて候はんが。親の配所を尋ねかね。幼き者の遙々來りたる志。不便よ存じ覺えず落涙仕りて候ふ。本問「さては御子息にては御座なく候ふか。シテ

「中々の事某が子よてはなく候ふ。急いで追つ歸して賜はり候へ。本問」心得申して候ふ。やがて追つ歸し申さうするよて候ふ。

本問詞「最前の客僧は何處に渡り候ふぞ。ソキ詞「これよ候ふ。本問

「仰せの通りを資朝の卿へ申して候へば。御子息よては御座なき由仰せられ候ふ。何とて聊爾なる事をば承り候ふぞ。ソキ」の

う御思案あつても御覽候へ。御子にてもなき人の遙々これまで下り給ふべきか。天晴客僧が申す通りを資朝の卿へ御申し候は

ば。やはか左様には仰せられ候ふまじ。本問「扱は資朝の卿へ申さぬと思し召し候ふか。ソキ」左様に存じ候ふ。本問「言語道斷。か

弓矢八幡氏の神も 武士の神明に對して遠近ならぬと誓ふ詞。

かる口惜しき事を承り候ふ物かな。弓矢八幡氏の神も照覽候へ。

御子息の御座なき上は候ふ。御子息なければ來るべき由なしの意。

あら笑止や 困却の詞。仲光に云へり。

かたし貝 貝のかたくあると云ふ。故に合はぬと擬はたり。

一世と兼ねたる 兼れてより一世の縁と定まれるの意。

後の世の契りもさぞな 未來の縁はさぞ薄からんとの意。みえぬ 見もせず見られもせぬの意。

立ち添ひながら 置座の立つと親に子の立ち添ふことと擬は

懇し申して候へども。資朝の卿よ御子息の御座なき上は候ふ。聊爾なる事を承り候ふ物かな。此上は某は一向に存ずまじく候ふ。ソキ「のうく暫く。あら笑止や。はや御内へ御入り候ふは如何に。梅若殿は何と仕り候ふべき。子「悲しやな遙々尋ね來りたる。かひも渚のかたし貝。あはぬ思ひを如何よせん。シテ「我も戀しく思ひ子を。最期に見たくは思へども。我子と名のらば敵とて。もーや命を失はれんと。思へば他人と云ひつるころ。中々思ふ心なれ。子「一世と兼ねたる此世にだに。添ひもはてざる親子の中。シテ「まゝてやいはん後の世の。二人「契りもさぞな逢ふ事も。泣くや涙よかきくもり。地「姿みくえぬ親と子の。へだての雲霞。立ち添ひながらも實よ。逢はぬ事を悲しき。ソキ「今日御最期に定まれば。痛はしなから力なく。武士興よ乘せ申し。濱の上野よ急ぎけり。ソテ「かねて期したる事なれば。

御首の座敷 首を斬るべき場所。
上になほらせ 居直り座に就く

十念 念佛十返する事。

惜しき命にあらねども。さずが最期の道なれば。心すできけし
きかな。ソキ子「梅若父の御最期と。聞くより目くれ氣も消え。
起きつまろひつ泣く。御興の跡につきて行く。御興を早
め行く程に。濱の上野も近くなる。シテ「波路たゞよふ磯千鳥。
ソキ子「沖の鷗も音をそへて。阿はれさや増さるらん。地「御首の
座敷これなりと。興よりれろし申せば。シテ「資朝敷皮の。地「上
まなほらせ給へば。武士太刀を抜き持ち。御後よ立ちまはり。
御十念と勧めけり。
子詞「あら悲しや我をも連れて御入り候へ。シテ「如何に客僧。先
この幼き者をうなたへ召され候へ。ソキ「畏つて候ふ。シテ「如何
に本間殿へ申すべき事の候ふ。本間「何事にて候ふぞ。シテ「近頃
面目もなき申し事よて候へども。誠は某が子よて候ふ。彼者の
事はいまだ幼き者の事にて候ふ程よ。御心得を以て助けて賜は

あへなく はかなくに候ふ。

り候へか。本間「かゝる痛はしき事こう候はね。我等も始めよ
り左様は見申して候へども。深く御隠し候ふ程に申さず候ふ。
御心安く思し召され候へ。梅若殿の御事は。明けなほ早船を拵
へ都へ送り付け申し候ふべし。御心安く思し召され候へ。シテ
「是は誠よて候ふか。本間「中々の事。弓矢八幡も御照覽あれ。
都へ送り付け申さうするにて候ふ。シテ「あら有り難や候ふ。扱
は此世よ思ひ置く事もなく候ふ。はやく首を打ち給へど。地
「西よ向ひて手を合はせ。南無阿彌陀佛と高らかに。稱へ給へば
あへなく。御首は前よ落ちにげり。
子詞「あら悲しや我をも連れて御入り候へ。ソキ「言語道断かゝる
あへなき事こう候はね。さりながら御存生の中に御對面候ふ事。
返すくも御本望よて候ふ。本間「如何に客僧へ申し候ふ。資朝
の卿の御事は。囚人にて御坐候ふ間力なき事にて候ふ。梅若子

の御事は御遺言の如く。明日御舟を申し付け都へ送り申し候ふべし。今夜は某が館へ御出であつて。御心安く御休み候へ。ウキ「懇に承り有り難う候ふ。明日都へ御送り頼み申し候ふ。又御死骸を賜はり孝養申したく候ふ。本間「中々の事御心静に御孝養候へ。我等は私宅に歸り候ふべし。やがて御出あらうするまで候ふ。ウキ「承り候ふ。やがて御館へ参り候ふべし。本間「如何に面々聞き候へ。此間の番よさぐれたひれ候ふらん。皆々私宅よ歸り休み候へ。某も臥しど入つて心静に夜を明かさうするまであるぞ。其分心得候へ。狂言「畏つて候ふ。ウキ詞「如何に梅若子へ申し候ふ。是は本間殿の館にて候ふ。今夜は御心静に御休み候へ。明けなば舟を仕立て送り申すべき由申され候ふ。御心安く思ひ召され候へ。子詞「如何に申すべき事の候ふ。ウキ「何事にて候ふぞ。子「本間を討つて賜はり候へ。ウキ

「あゝ暫く候ふ。かゝる聊爾なる事を承り候ふ物かな。彼本間と申すは。一旦囚人を預かりたるよて候へ。御身の親の敵は相模の守高時ころ誠の親の敵よて御座候へ。うれば都へ御上り候ひて。自然の時節を御待ち候へ。子「いや目の前よて父を討ちたるころ。親の敵にて候へ討たては叶ひ候ふまじ。ウキ「實は實は仰せは尤よて候へどもさりながら。此島國よて人を討つては。切御命をば何と召され候ふべき。唯思ひ召し御止まり候へ。子「たどひ命は失ふとも討たては叶ひ候ふまじ。ウキ「たどひ命は失ふともうたては叶ふまじきと仰せ候ふか。子「中々の事討つて賜はり候へ。ウキ「かゝるけなげなる事を仰せ候ふ物かな。此上は討つて参らせ候ふべし。いかも彼者申し候ふは。内の者どもも此程の番よくたひれてぞあるらん。先々私宅に歸れ。其身も臥しど入つて夜を明かさうする由申し候ひし程に。討つべき

夜には日本一の夜にて候ふ。御本望まで候ふ程に。一の刀をば梅若子あろばされ候へ。二の刀をば此客僧仕るべし。もゝ又彼者たちあひ。討ち損ずる物ならば。人手はかゝるまじ。梅若子とさしちがへ申さうするまで候ふ。子「心得申し候ふ。ッキ」こなたへ御入り候へ。あら笑止や。いまだ火が消えず候ふは如何し。思ひ出だしたる事の候ふ。何の爲めよか夏虫の。身を焦がすべき火を取らんと。子「明り障子は飛び付きたり。ッキ」是こそ消すべき便りなれと。障子を細目に明けければ。子「虫はよろこび内に入り。ッキ」すは火はほつと消えたるは。地「燈どもに敵の命。いまころ消えて失すべけれ。ひろかにねらひより。守り刀を抜き持つて。本間の三郎が。胸の間より乗りかゝり。三刀まで刺しとほし。椽を飛びぬけり逃げれば。追手は聲や。とめよくと追つかくる。

夏虫 蟻と云ふ虫。
明り障子 昔は襦袢紙の障子
子と云ひたれば。紙一重障子
る今の障子と差別して明り障子
と稱ふ。

抜群に 船程の意に用ふ。

柱を立て 帆柱を立てて帆に出
船しつけたると云ふ。

舟とだにも忘るは 舟の神
と取りに歸る船も無き意。
この風は東より吹く風。
向うて西に爲さうぞい。向風
の四風に吹かすして見せんの意。
はいは力を入れて添へたる意。

船頭詞「此程風を待ち候ふ所に。日本一の追手が吹き候ふ程よ。舟を出ださばやと存じ候ふ。
ワキ詞「はや抜群に來りて候ふ。又あれに舟の見候ふ。此舟に便船を乞ひ候ふべし。のうくあれなる舟に便船申さうのう。
船頭詞「御覽候へ此舟は。柱を立て帆を引くばかりの船まで候ふ程に。未だ出でぬ舟は仰せ候へ。ッキ」陸にて人を討つて跡より追手のかゝる者にて候へば。ひらにのせて賜はり候へ。船頭「いやいや左様の科人ならば猶此舟の叶ひ候ふまじ。ッキ」よる科人は此客僧。客僧をば乗せずとも。此見ひとり乗せて給へ。船頭「いや兒も法師も知らぬとて。なほ此舟を押して行く。ッキ」其船よせずは悔やゝき事の有らうするぞ。船頭「何の悔やゝく有るべきぞ。舟棹だにも忘るゝは。風は出舟の習ひなり。ッキ」扱此風は。舟ッシ「こちらの風。ッキ」向うて西よ爲さうぞえい。船頭「あら

難波 元清作

難波の浦に於て。色異なる梅花を御覽じて。...

めてたけれ。

難波

なには

元清作

ソキ次第「山も霞みて浦の春。波風静かなりけり。...

新千載集にも「吹上の浦の... 紀州の入口にある...

静に照らす日の本の。影ゆたかなる時とかや。...

つなり。漢文の序には後歌有六
 六段云々云々云々。其六種の歌に
 一は。うへうた。大鷲鷲の帝と
 へ。うへうた。大鷲鷲の帝と
 の花冬ごもり。今春へは吹くや
 あり。うへうた。大鷲鷲の帝と
 らは。うへうた。大鷲鷲の帝と
 りて。うへうた。大鷲鷲の帝と
 の花冬ごもり。今春へは吹くや
 あり。うへうた。大鷲鷲の帝と
 らは。うへうた。大鷲鷲の帝と
 りて。うへうた。大鷲鷲の帝と

花の春を。けてよめる。「冬ごも
 り」春へ。と。横け用ひたる。云
 難波の御子 仁徳天皇の御事。

ツレ「御代も開けー榮花といひ。シテ「普き花の嘉例と云ひ。二人
 「どにもかくも津の國の。此や都路の難波津よ。名を得て咲
 くやこの花を。名木かどの御尋ねは。事あたらき御説かな。
 ヲキ「實にく難波の梅の事。名木やらんと尋ねーは。愚かなり
 ける問事かな。然れば歌よも難波津よ。咲くやこの花冬ごもり。
 今は春へと咲くやこの。花の春冬かけてよめる。歌の心は如何
 なるぞ。シテ「うれこそ帝をうへ歌の。心詞は顯はれたれ。難
 波の御子は皇子ながら。未だ位に即き給はねば。冬咲く梅の花
 の如く。ヲキ「御即位ありて難波の君の。位に備はり給ひ一時は。
 シテ「今こそ時の花の如く。ヲキ「天下の春を知ろーめせば。
 「今は春へと咲くやこの。ヲキ「花の盛は大鷲鷲の。シテ「帝を花
 ようへ歌の。ヲキ「風も治まり。シテ「立つ波も。地「難波津に。咲
 くやこの花冬ごもり。今は春へに匂ひ來て。吹けども梅の風。

浪の御歌り 古今集の序に「
 り。とあり。是は帝の御事と
 れる。始めそと云ふ。海に見るへ
 浪の御歌り 古今集の序に「
 り。とあり。是は帝の御事と
 れる。始めそと云ふ。海に見るへ
 浪の御歌り 古今集の序に「
 り。とあり。是は帝の御事と
 れる。始めそと云ふ。海に見るへ
 浪の御歌り 古今集の序に「
 り。とあり。是は帝の御事と
 れる。始めそと云ふ。海に見るへ

枝を鳴らさぬ御代とかや。實にや津の國の。何はの事に至るまで。
 豊かなる世のためこそ。實に道廣き治めなれ。
 地「抑難波津の歌は帝の御始め。又淺香山の詞は。采女の土
 器どりぐなり。シテ「昔唐國の堯舜の御代にも越えつべ。
 地「萬機の政れたやかにして。慈悲の波四海に普く。治めざるよ
 平かなり。シテ「君君たれば臣も又。地「水よく船を浮ぶとかや。シ
 「高き屋に登りて見れば煙立つ。民のかまごは賑ひにけりど。
 叙慮よかけまくも。かたむけなく聞こえける。然れば此君の。
 代々にためーを引く事も。實に有り難き詔。國々に普く。三年
 の御調ゆるされ。其年月も極まれば。濱の眞砂の數積りて。
 雪は豊年の御調物。ゆるす故よ中々。いやまー運ぶ御寶の。
 千秋萬歳の。千箱の玉を奉る。シテ「然れば普き御心の。地「いつ
 くーみ深うして。八洲の外まで波もなく。廣き御惠。筑波山の

波の聲。地「入江の松風。シテ」村蘆の葉音。地「いづれ
 を聞くも悦びの。諫鼓苔む難波の鳥も。驚かぬ御代なり。有
 り難や。
 ロンギ地「あられも志々の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯
 轉の樂をば。シテ」春風と諸共。花を散らしてどうと打つ。
 地「秋風樂は如何や。シテ」秋の風もろ共。波を響かしてどうと
 打つ。地「萬歲樂は。シテ」よろづ打つ。地「青海波とは青海の。シテ
 「波立て打つは採桑老。地「抜頭の曲は。シテ」かへり打つ。地「入
 日を招き歸す手に。今の太鼓は波なれば。よりはては打ち歸りて
 は打ち。此音楽は引かれつ。聖人御代にまた出で。天下を守
 り治むる。萬歲樂がめでたき。

放下僧

はうかう

氏信作

牧野小次郎の事。利根の信俊と申す者と口論。念なう討たれて
 候ふ。親の敵にて候ふ程に。討たばやとは存じ候へども。敵は
 猛勢我等は唯一人にて候ふ間。思ふよかひなく月日を送り候ふ。
 又兄にて候ふ者は。幼少より出家仕り。あたり近き會下に候ふ。
 あまり便もなく候ふ間。立ちこえ此事を談合せばやと存じ候
 ふ。いかに案内申候ふ。シテ「誰よて渡り候ふ。ツレ」某が
 参りて候ふ。ツレ「や。此方へ渡り候へ。さて唯今は何の爲めに
 來り給ひて候ふ。ツレ」さん候ふ只今参る事餘の儀はあらず。
 我等が親の敵の事。討たばやとは存じ候へども。敵は猛勢我等
 は唯一人にて候ふ程に。思ふよかひなく月日を送り候ふ。あは
 れ諸共思召御立ち候へか。シテ「仰せは尤よて候へども。

波の聲。地「入江の松風。シテ」村蘆の葉音。地「いづれ
 を聞くも悦びの。諫鼓苔む難波の鳥も。驚かぬ御代なり。有
 り難や。
 ロンギ地「あられも志々の音楽や。時の調子にかたどりて。春鶯
 轉の樂をば。シテ」春風と諸共。花を散らしてどうと打つ。
 地「秋風樂は如何や。シテ」秋の風もろ共。波を響かしてどうと
 打つ。地「萬歲樂は。シテ」よろづ打つ。地「青海波とは青海の。シテ
 「波立て打つは採桑老。地「抜頭の曲は。シテ」かへり打つ。地「入
 日を招き歸す手に。今の太鼓は波なれば。よりはては打ち歸りて
 は打ち。此音楽は引かれつ。聖人御代にまた出で。天下を守
 り治むる。萬歲樂がめでたき。

討たんの意。 勇のよみ
力に云ふ。 勇のよみ
参事と云ふ。 勇のよみ
金澤の三島。 武蔵の國久良岐郡
其接舞を隠家と云ふ。 勇のよみ
知らずとも知らず。 勇のよみ
落花の香を知らず云々。 勇のよみ
唯白雲の青山に。 勇のよみ
水山の上の秋にして云々。 勇のよみ
古川の。 勇のよみ
うた。 勇のよみ
人。 勇のよみ
浮世。 勇のよみ
狂言。 勇のよみ
御名。 勇のよみ

我等が事は幼少より出家の身にて候ふ程。 今更いかゞ候
ふ。 ツレ「御意はさる事にて候へども。 親の敵を討たぬ者は不孝
の由を申し候ふ。 シテ」さて親の敵を討つて孝を備はりたる事の
候ふか。 ツレ「中々の事。 唐土の事も有りけん。 母を惡虎に取
られ。 其敵をとらんとて。 百日虎伏す野邊に出でくねらふ。 あ
る夕暮。 尾上の松の木陰に。 虎に似たる大石のありしを敵虎
と思ひ。 つがへる矢なればよつひいて放つ。 此矢すなはち巖に
立ち。 たちまち血流れけるとなり。 是も孝の心深きより。 堅
き石にも矢の立つと申し候へば。 只思ひ召し御立ち候へ。 シテ
「是は面白き事を引いて承り候ふ物かな。 此上は諸共に思ひ立
たうするにて候ふ。 ツレ」然るべう候ふ。 シテ「さて彼者よは何と
して近づき候ふべき。 ツレ」某急度案じ出だしたる事の候ふ。 此
頃人の翫ひ候ふは放下にて候ふ程に。 某は放下より候ふべし。

十沙門の。 勇のよみ
非力。 勇のよみ
四。 勇のよみ
七。 勇のよみ
と。 勇のよみ
あり。 勇のよみ
柱。 勇のよみ
國。 勇のよみ
明。 勇のよみ
法。 勇のよみ
風。 勇のよみ
れ。 勇のよみ
本。 勇のよみ
神。 勇のよみ
愛。 勇のよみ

御身は放下僧に御なり候へ。 彼者禪心は好きたる由申し候ふ程
に。 禪法を仰せられうするにて候ふ。 シテ「げに是は面白き了簡
にて候ふ。 さらばやがて思ひ立たうするにて候ふ。 ツレ」尤にて
候ふ。 シテ「いさくさらばと思ひつ。 行脚の姿に身をやつせ
ば。 ツレ」我もうれしく思ひつ。 放下の姿に出で立ちて。 シテ
「ごもすてくと。 ツレ」立ち出づる。 故郷の。 名残もさうな
有明の。 つれなきながらならふる。 命が限り兄弟は。 我心を
や頼むらん。
ソキ次第「歩みを運ぶ神垣や。 隔てぬ誓ひ頼まん。 詞「是は相模の
國の住人。 利根の信俊と申す者にて候ふ。 我此間打ちつ。 き夢
見あしく候ふ程。 瀬戸の三島へ参らばやと存じ候ふ。
後シテ「面白の我等がありさまやな。 僧俗二つの道を離れ。 委言
葉も人よ似ぬ。 ツレ」其振舞を隠家と。 思ひ捨つれば安き身を。

る云ふ。神道して靈覺と摩伏
方便の矢とつゝあつて。方便は
方徳の手に持つて。雲霧の意
四葉の葉に天子の意。四に死
引・葉の葉に天子の意。四に死
便なれば。雲霧の意。五
放的なれば。雲霧の意。五
の意。雲霧の意。五
知らず。雲霧の意。五
る。雲霧の意。五

シテ「知らでなどかは迷ふらん。二人一聲「落花一様の春を知らず。
白雲青山にれほふと。ツレ「流水山上の秋よいて。二人「紅葉を
あろうふ謂あり。地「朝の嵐ゆふへの雨。今日又明日の昔ぞと。
ゆふへの露の村時雨。定めなき世古川の。水のうたかた我い
かに。人をあたや思ふらん。
狂言「いかし申し候ふ。かたぐいの名は何と申し候ふぞ。ツレ同「浮
雲流水と申し候ふ。狂言「又あれなる人の名をば何と申し候ふぞ。
ツレ同「浮雲流水と申し候ふ。狂言「シカく。ツレ「いや某は浮雲。
あれなる者は流水よて候ふ。狂言「シカく。ツレ「又あれなる御
方の御名字をば何と申し候ふぞ。狂言「シカく。ツレ「いや苦
からず候ふ。唯放下が参りたると御申し候へ。狂言「シカく。
ツレ同「いかし面々に不審申したき事の候ふ。ツレ「承り候ふ。ツレ同
「れよろ沙門の形と謂つば。十力の戯珠を手に纏ひ。忍辱二

の宗派は何れに属するぞと
教外別傳。宗旨の立方と云ふ。
拘はらさず。人々の心に見せし
官句に出だせしむる云ふ。神宗は
立文字にて。文字に書きて。神
教と立つる事とせむ法なれば云
座禪。心の悟を得る爲めに修す
公案。佛の機嫌を公案と曰ふ。
公案の底。悟の外邊と云ふ。動
機とす。心とす。正しとす。
三昧の門。三昧とは思と專にし
入る門。口。三昧と云ふ。之に
自身自佛。即身即佛と云ふ。
佛は他に非ず。其身佛れば即ち
白雲深處。空寂。雲霧に出でた
る。何れに見る。雲霧に在る。其
生死に住せば。輪廻の苦。生死の
六道をめぐりめぐる苦しみある
生死を離れば。臨見の科。ありと
ば。餘り。臨見の科。ありとす。
と立つる事。見は果斷して見
向上の一路。禪法の最高と點と
切つて三段と爲す。一刀兩斷と

諦の衣を着。罪障懺悔の袈裟を掛けてこころ信どい申すべけれ。
異形のいでたち心得ず候ふ。又見申せば。杖杖に團扇を添へて持
たれたり。團扇の一句承りたく候ふ。ツレ「夫れ團扇と申すは。
動く時には清風とぞ。靜なる時は明月を見す。明月清風唯
同性の内であれば。諸法を心が所作として。心實修行の便よて。
我等が持つは道理なり。とがめ給ふづれろかなる。ツレ「團扇
の一句れもろて候ふ。今一人は弓矢を帯給ふ。弓も御僧の
道具さふか。ツレ「夫れ弓と申すは本末に。烏兔の姿を像り。日
月を爰と顯はし。淨穢不二の秘法を表す。されば愛染明王も。
神通の弓を張り。方便の矢を瓜よつて。四魔の軍を破り給ふ。
地「されば我等も之を持ちて。引かぬ弓はなさぬ矢よて射る時
は。當らずいかもはづさりけりぞ。かやうよよむ歌もあり。
知らずな物なのたまひう。

云ふ程の意。わが心には非を判
つて含む。こゝにて小次郎弓に矢
つひて敵に迫らんぞす。

信の同事を止めて云ふ。
何とたや中々に云々。敵と闘つ
事はまた口にも色にも出ださず
の意。隠は色に出で、映く故
に映けたりの。夫木葉に「問へど
此衣手に「問の岩つゝ紅そめり
我衣手に「問の岩つゝ紅そめり
大小の根機を嫌はず。何事も分
持戒破戒の戒律を守らぬ事。
有無の二に落つる事なく。其佛
法には有無の二の相あり。其佛
心は故に「新なる。故に「新
高僧の「佛道に入る。これより高
高僧の「佛道に入る。これより高
谷の戸出づる。春になりて鶯が
氷れる。里に「出づると云ふ。内
昔は来にけり。鶯の水れる。裏に
や群より来にけり。鶯の水れる。裏に
うたふたり。鶯の歌と云ひかけた
あひやどり。鶯と蛙と同居する
鶯水に住む。鶯と蛙と同居する
いつも歌よみ。なまに用ひら

聞かぬ。心のあるものと。心
どめは心の意。わが心には非を判
つて含む。こゝにて小次郎弓に矢
つひて敵に迫らんぞす。
信の同事を止めて云ふ。
何とたや中々に云々。敵と闘つ
事はまた口にも色にも出ださず
の意。隠は色に出で、映く故
に映けたりの。夫木葉に「問へど
此衣手に「問の岩つゝ紅そめり
我衣手に「問の岩つゝ紅そめり
大小の根機を嫌はず。何事も分
持戒破戒の戒律を守らぬ事。
有無の二に落つる事なく。其佛
法には有無の二の相あり。其佛
心は故に「新なる。故に「新
高僧の「佛道に入る。これより高
高僧の「佛道に入る。これより高
谷の戸出づる。春になりて鶯が
氷れる。里に「出づると云ふ。内
昔は来にけり。鶯の水れる。裏に
や群より来にけり。鶯の水れる。裏に
うたふたり。鶯の歌と云ひかけた
あひやどり。鶯と蛙と同居する
鶯水に住む。鶯と蛙と同居する
いつも歌よみ。なまに用ひら

ワキ詞「さて放下僧はいづれの祖師禪法を御傳へ候ふぞ。面々の
宗体が承りたく候ふ。シテ詞「我等が宗体と申すは。教外別傳よ
じて。云ふも云はれず説くも説かれず。言句よ出だせば教へに
落ち。文字を立つれば宗体よ背く。たゞ一葉の飄る。風の行方
を御覽せよ。ワキ「げよく面白う候ふ。さて座禪の公案何と心
得候ふべき。ワキ「入つては幽玄の底に動し。出でよは三昧の門
に遊ぶ。ワキ「自身自佛は扱いかた。シテ「白雲深き所金龍躍る。
ワキ「生死よ住せば。シテ「輪廻の苦。ワキ「生死を離れば。シテ「斷
見の科。ワキ「さて向上の一路は如何。ワキ「切つて三段と爲す。
シテ「暫く。切つて三段と爲すとは。禪法の言葉なるを。御さわ
さあるこそ愚かなれ。地「何とたや中々。磐手の山の岩躑躅。
色よは出でじ。南無三寶。をかゝの人の心や。
シテ「サシ「されば大小の根機を嫌はず。持戒破戒を撰はず。地「有

無の二偏に落つる事なく。皆成佛するためあり。シテ「かるが
故に草木も發心の姿を顯はし。地「柳は緑花は紅なる。其色々を
顯はせり。ワキ「青陽の春の朝には。谷の戸出づる鶯の。氷れる
涙とけろえて。雪消の水のうたかた。あひやどりする蛙の聲。
聞けば心のある物を。目に見ぬ秋を風よ聞き。荻の葉そよく
故郷の。田面に落つる雁鳴きて。稻葉の雲の夕時雨。妻戀ひか
ぬる小男鹿の。たゞすむ月を山に見て。指を忘るし思ひあり。
シテ「浦の湊の釣舟は。地「魚を得て笠を捨つ。此を見彼を聞く時
は。嶺の嵐や谷の聲。夕の煙朝霞。皆是れ三界唯心の。ことわ
りなりと思へり。心を悟り給へや。シテ「月の爲めには浮き雲
の。地「種と心や爲りぬらん。
シテ「れもろろの花の都や。地「筆に書くとも及ばじ。東には祇園
清水。落ちくる瀧の音羽の嵐に。地主の櫻はちりぐ。西は法

おもしるの... 輪嵯峨の御寺... 廻らば廻れ水車の輪の... 柳は水もまるく... 都の牛は車にもまるく... 茶臼は挽木にもまるく... けまこと忘れたり... こきりては放下もまるく... こきりての二つの竹の... 世々を重ねて... うち治まりなる御代かな... テンレ「さのみは何と包むべきと... 兄弟どもに抜きつれて... 思ふ歌い走り寄り... 地「此年月の限みの末... 今こそ通れ願ひのまゝ... 歌を討つたりける... かくて兄弟念力の... 其期の有りて忽ち親の歌を討つ事も... 孝行深き故により... 名を末代に留めけり...
おもしろの... 輪嵯峨の御寺... 廻らば廻れ水車の輪の... 柳は水もまるく... 都の牛は車にもまるく... 茶臼は挽木にもまるく... けまこと忘れたり... こきりては放下もまるく... こきりての二つの竹の... 世々を重ねて... うち治まりなる御代かな... テンレ「さのみは何と包むべきと... 兄弟どもに抜きつれて... 思ふ歌い走り寄り... 地「此年月の限みの末... 今こそ通れ願ひのまゝ... 歌を討つたりける... かくて兄弟念力の... 其期の有りて忽ち親の歌を討つ事も... 孝行深き故により... 名を末代に留めけり...

行平の... 松風... 清次作

松風

まつかぜ 古名 松風村雨 清次作

行平の... 松風... 清次作

「是は諸國一見の僧よて候ふ。我いまだ西國を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち西國行脚と心さして候ふ。あらうれーや急さ候ふ程に。是ははや津の國須磨の浦とかや申し候ふ。又是なる磯邊を見れば。様ありげなる松の候ふ。如何さま謂のなき事は候ふまじ。此あたりの人よ尋ねばやと思ひ候ふ。
ワキ「扱は此松は。いよーへ松風村雨とて。二人の海士の舊跡かや。痛そーや其身は土中埋もれぬれども。名は残る世のーるーとて。變はらぬ色の松一木。緑の秋を残す事のあはれさよ。
詞「かやうに經念佛へて吊らひ候へば。實に秋の日のあらひとて程なう暮れて候ふ。あの山本の里までは程遠く候ふ程。是なる海士の鹽屋に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候ふ。」

なるに。竹ありぬる短し。わたしたして石の橋松の住むるうなる物か。

の松の候ふを。人に尋ねて候へば。松風村雨二人の海士の舊跡とかや申し候ふ程に。逆縁ながら吊らひてこつ通り候ひつれ。あら不思議や。松風村雨の事を申して候へば。二人共に御愁傷候ふ。是は何と申したる事にて候ふぞ。

は知りて居ながら。こりもせす昔の下。土中に埋もれたるの意。

靈是まで来りたり。扱も行平三年が程。御つれぐの御船遊び。月一は須磨の浦。夜汐を運ぶ海士少女。れどむひ撰ばれ参らせづく。折にふれたる名なれやとて。松風村雨と召されいより。月にも馴るゝ須磨の海士の。

己草の日の... 三月上旬の己の日... 六年五月... 六十五

水に邊に由りて... 形見もよあるいと... 伏し沈む事ぞ悲まき...

見とて。御立烏帽子狩衣を。残り置き給へども。之を見る度に。彌益の思ひ草。葉末よ結ぶ露の間も。忘らればこそあぢきなや。形見こそ今はあたなれはなくは。忘るゝひまも有りなんと。よみも理や。なほ思ひころは深けれ。シテ「零々に。ぬきて我寝る狩衣。地」かけてぞ頼む同じ世よ。住むかひあらはころ。忘れ形見もよあるいと。捨てとも置かれず。取れば面影に立ち増さり。起臥わかで枕より。跡より戀の攻め來れば。せんかた涙よ。伏し沈む事ぞ悲まき。シテ「三瀬河。絶えぬ涙の憂き瀬よも。亂るゝ戀の淵はありけり。あらうれーやあれに行平の御立有るが。松風と召されさむらふがやいで参らう。ツレ「あさましや其御心故にこそ。執心の罪よも沈み給へ。娑婆よての妄執を。なほ忘れ給はぬや。あれは松にてころ候へ行平は御入りもさむらはぬ物を。シテ「うたて

の意。川の流に掛り懸の深きと... 立ち歸りこん。松風よ立つと云...

の人のいひごとや。あの松ころは行平よ。たどひ暫しは別るゝども。松と聞かば歸りこんど。連ね給ひ一言の葉は如何に。ツレ「實にのう忘れてさむらふや。たどひ暫しは別るゝども。待たば來んどの言の葉を。シテ「こなたは忘れず松風の。立ち歸りこん御音信。ツレ「終にも聞かば村雨の。袖よはるころぬるゝども。シテ「待つよ變はらで歸りこば。ツレ「あら頼もりの。シテ「御歌や。地「立ち別れ。シテ「いなほの山の峯に生ふる。松と聞かば今歸り來ん。それはいなほの遠山松。地「是はなつかし君こゝに。須磨の浦回の松の行平。立ち歸りこば我も木陰よ。いさ立ち寄りて磯馴松の。なつかしや。地「松よ吹き來る風も狂じて。須磨の高波はげき夜すがら。妄執の夢に見みゆるなり。我跡吊ひて給ひ給へ。暇申して歸る波の音の。須磨の浦かけて。吹くや後の山れろ。關路の鳥も聲

村雨と聞きし。夜中には雨の音も聞えぬ。朝になりて見れば、松風の音より外には何れもなほなかり。幽霊の姿は消へて、たゞ面影のみかすかに残る心地するな云ふ。

安宅

信光作

武藏坊辨慶 判官殿十二人の作り山伏 頼朝義経御中不和の事より。判官殿十二人の作り山伏と爲つて。奥へ御下向の由頼朝きこゝめ及ばれ。國々に新聞を立てし。山伏をかたく撰ひ申せとの御事にて候ふ。さる間此所をば某承つて山伏を留め申候ふ。今日も堅く申付けばやと存じ候ふ。如何に誰かある。狂言「御前」候ふ。ツキ「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申候へ。狂言「畏つて候ふ。山伏次第「旅の衣は篠懸の。露けき袖やゝをるらん。ツキ「鴻門橋破れ都の外の旅衣。日も遙々の越路の末。れもひやるこゝろ遙な

ツキ詞「かやうに候ふ者は。加賀の國富樫の何某にて候ふ。扱も頼朝義経御中不和の事より。判官殿十二人の作り山伏と爲つて。奥へ御下向の由頼朝きこゝめ及ばれ。國々に新聞を立てし。山伏をかたく撰ひ申せとの御事にて候ふ。さる間此所をば某承つて山伏を留め申候ふ。今日も堅く申付けばやと存じ候ふ。如何に誰かある。狂言「御前」候ふ。ツキ「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申候へ。狂言「畏つて候ふ。山伏次第「旅の衣は篠懸の。露けき袖やゝをるらん。ツキ「鴻門橋破れ都の外の旅衣。日も遙々の越路の末。れもひやるこゝろ遙な

鴻門の地に會せし時。項莊と云ふもの攻めたり。此事と保羅と保羅と云ふ事を用ひし。高祖と保羅と保羅と云ふ事を用ひし。水と池と云ふ事を用ひし。越路の春と急ぐなり。歌「時一も頃は二月の。十日の夜。月の都を立ち出でし。是やこの行くも歸るも別れては。知るも知らぬも逢坂の。山隠す。霞が春は恨めしき。波路遙に行く舟の。海津の浦に着きにけり。東雲はやく明け行けば。浅茅色づく有乳山。氣比の海。官居久しき神垣や。松の木芽山。なほ行くさきに見えたるは。杣山人の板取。河瀬の水の浅洲津や。末は三國の湊なる。蘆の篠原波よせて。靡く嵐の烈しきは。花の安宅に着きにけり。シテ詞「御急ぎ候ふ程に。是は早安宅の湊に御着きよて候ふ。暫く此所に御休みあらうするよて候ふ。判官詞「如何に辨慶。シテ

鴻門の地に會せし時。項莊と云ふもの攻めたり。此事と保羅と保羅と云ふ事を用ひし。高祖と保羅と保羅と云ふ事を用ひし。水と池と云ふ事を用ひし。越路の春と急ぐなり。歌「時一も頃は二月の。十日の夜。月の都を立ち出でし。是やこの行くも歸るも別れては。知るも知らぬも逢坂の。山隠す。霞が春は恨めしき。波路遙に行く舟の。海津の浦に着きにけり。東雲はやく明け行けば。浅茅色づく有乳山。氣比の海。官居久しき神垣や。松の木芽山。なほ行くさきに見えたるは。杣山人の板取。河瀬の水の浅洲津や。末は三國の湊なる。蘆の篠原波よせて。靡く嵐の烈しきは。花の安宅に着きにけり。シテ詞「御急ぎ候ふ程に。是は早安宅の湊に御着きよて候ふ。暫く此所に御休みあらうするよて候ふ。判官詞「如何に辨慶。シテ

綾管笠 山伏の持つ杖。

南都東大寺 治承四年平重衡の
兵火に焼けて再建したれば
客僧 東大寺に修行の爲り來て
居る僧と云ふ。

勤め 勤運に同じ。寄附を乞ふ
事。

奥秀衡 應永秀衡九代の孫にて
陸奥守に任じ關守府將軍と號
す。

判官「綾管笠にて顔をかくし。山伏「金剛杖にすがり。判官「足痛け
なる強力にて。地「よろしくとて歩み給ふ。御ありさまが痛は
しき。シテ詞「我等より跡に引きさがつて御出あらうするにて候
ふ。さらば皆々御通り候へ。山伏「承り候ふ。

狂言「如何に申し候ふ。山伏達の大勢御通り候ふ。ウキ詞「何と山
伏の御通りあると申すか心得てゐる。のうく客僧達は是は關に
て候ふ。ウキ「承り候ふ。是は南都東大寺建立の爲に。國々へ客
僧を遣はされ候ふ。北陸道をは此客僧承つてまかり通り候ふ。

先勤めに御入り候へ。ウキ「近頃殊勝に候ふ。勤めよは参らうず
るにて候ふ去りながら。是は山伏達に限つて留め申す關にて候
ふ。シテ「扱其謂は候ふ。ウキ「さん候ふ頼朝義經御中不和よなら
せ給ふよより。判官殿は奥秀衡を頼み給ひ。十二人の作り山伏
となつて。御下向の由其聞こえ候ふ間、國々に新關を立て、山

尋常に たさなしくの瀬。

役優婆塞 名は小角。俗体にて
佛道を修する人。優婆塞と云
ふ。大和の國葛上郡赤原村の人
にて。葛城山の麓に住むこと
三十餘年。葛城山に衣を脱ぎ
食をす。鬼神と交遊して給仕さ
す。文武天皇の大寶年中入道し
て終に神皇正統記に記せりと云ふ。

伏をかたぐ撰び申せとの御事にて候ふ。さる間此所をば某承つ
て山伏を留め申し候ふ。殊よ是は大勢御座候ふ間。一人も通
申すまじく候ふ。シテ「委細承り候ふ。うれば作り山伏をこら留
めよと仰せ出だされ候ひつらめ。よも誠の山伏を留めよとは仰
せられ候ふまじ。狂言「いや昨日も山伏を三人まで切つたる上は。
シテ「扱其切つたる山伏は判官殿か。ウキ「あらむつかや問答は
無益。一人も通し申すまじい上は候ふ。シテ「扱は我等をも是に
て誅せられ候はんずるな。ウキ「中々の事。シテ「言語道斷。か
る不祥ぬる所へ來かゝつて候ふものかな。此上は力及ばぬ事。
さらば最期の勤めを始めて。尋常に誅せられうするにて候ふ。
皆々近う渡り候へ。

シテ「いで、最期の勤めを始めん。夫れ山伏といつば。役の優
婆塞の行義を受け。ウキ「其身は不動明王の尊容をかたどり。シテ

て仁安二年入唐し。久六六年東
大寺にて寂せり。東鑑に曰く
二月乙卯三月七日東大寺
修造の事。殊に丹波と抽つべきの
由。武衛の御書と南都の東徒中
はされ。又事加物と大勳連重
聖人に送られ。陀金一十兩。上箱
八千一萬石。沙金一十兩。上箱
一紙半の御財の數は。少々た
り。さも存給して。東大寺に寄附す
此世にては云々。現在にては無
上の安樂を得られ。未來にては
種淨土に生まると得べしと
なり。
一。命と佛に歸するの意。
一。一期の浮沈。生涯中の大事の
落居の間。眞偽の分るまでの
一期の思出。生涯なるまじき
立さよの意。時刻が早からばの
日高くば。時刻が早からばの

や安に目懸け給ふは。ソキの
氣色に注目して云ふ。
さふな。候ふな。の意。
扱き給ふは。云々。扱き。此二つ
めだれ。の句に。目苦しきの意。

の浮沈極まりぬと。皆一同に立ち歸る。シテ詞「あゝ暫く。あわ
てゝ事を仕損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ソキ「あれ
は此方より留めて候ふ。シテ「うれは何とて御とめ候ふぞ。ソキ
「あの強力がちと人よ似たると申す者の候ふ程に。扱留めて候
ふよ。シテ「何と人が人よ似たるとは。めづらうからぬ仰せにて
候ふ。扱誰よ似て候ふぞ。ソキ「判官殿よ似たると申す者の候ふ
程に。落居の間留めて候ふ。シテ「や。言語道斷。判官殿よ似中
一たる強力めは一期の思出な。腹立や日高きは。能登の國まで
差さうずると思ひつるよ。わづかの笈負うて跡よ下ればこそ人
も怪れむれ。總じて此程。につく〜〜と思ひつるに。いで物
見せてくれんとて。金剛杖をれつ取つて散々よ打擲す通れとこ
ろ。や。笈よ目を懸け給ふは。盗人さふな。地「かた〜は何故
よ。かほど賤なき強力よ。太刀刀ぬき給ふは。めだれ顔の振舞

打刀 た刀と云ふに同じ。
扱き 餘程の意。
不思議の働き。主君と杖にて打
ちたると云ふ。

悪しくいふのわざ。あつ。
たが。悪しきの意。
生涯限りありつる處に。決死の
適合なりしにの意。
もんだはずして。固辭せずして
の意。
入。源氏の御神。
御託宣。神の御言と云ふ。

ハ。臆病の至りかど。十一人の山伏は。打刀ぬきかけて。勇み
かゝれる有様は。如何なる天魔鬼神も。恐れつべうぞ見えたる。
ソキ詞「近頃誤りて候ふ。はやく御通り候へ。
シテ詞「先の關をば早抜群よ程隔たりて候ふ間。此所に暫く御休
みあらうするよて候ふ。皆々近う御参り候へ。如何に申し上げ
候ふ。扱も唯今は餘りに難義よ候ひ〜程に。不思議の働きを仕
り候ふ事。是と申すよ君の御運盡きさせ給ふにより。今辨慶
が杖にも當らせ給ふと思へば。いよ〜あさま〜うころ候へ。
判官詞「扱は悪〜くも心得ぬと存ず。如何よ辨慶。扱も唯今の機
轉更よ凡慮より爲すわざに非ず。唯天の御加護とこそ思へ。關
の者ども我を怪れぬ。生涯限り有りつる處よ。とかくの是非を
ほもんだはずして。唯眞の下人の如く。散々よ打つて我を助く
る。是れ辨慶が謀に非ず八幡の。地「御託宣かと思へば。忝くぞ

方廣 學問と云ふに同す。

現在の果 果は結果の意。

下の十日 下句と云ふ。

弓馬の家 武門と云ふ。

馬の合戦と指す。八島燈油

かたしく 片方を下に敷きて寝

ある時は身に浮び 元暦二年

津の波に波せし事。風波と波きて同

ある時は山脊の風見の雪の

中に 山脊は山のうしろ。馬

は馬のひづり。香永三年二月

に馬のひづり。香永三年二月

したる事。餘茶の頃なれば野

海少しある 海少しへだりた

明石の門を鎖けたるは

三年の事。平家の一門と云ふ

滅亡せしは。凡そ三年の事

浦に合はせしは。光永三年の事

因取に合はせしは。光永三年の事

叶はるる事。此世に如何なる事

心は果てしなくなる事。此世に如何なる事

すこの意。弓に作る水の直きと。

段臣 義経や源頼朝あるやうに

朝に説き及ぼし人。すなはち源

氏時と主として云ふ。

遠東東南の事。東南に起つ

て西北に行けば天無不顧なる

云へり。東南は吉野藩といひ

西北は此處に在る北國藩と

云ふ。義経の所なく國藩と

云ふ。東南西北は作るなるべし。

と拾葉抄に註せり。従ふべし。

覺ゆる。

地ク「夫れ世は末世も及ぶといへども。日月はいまだ地に落ち

給はず。たどひ如何なる方便なりとも。正しき主君を打つ杖の。

天罰に當らぬ事や有るべき。判官「實もや現在の果を見て。

過去未來を知ると云ふ事。地「今も知られて身の上も。憂き年月

の二月や。下の十日の今日の難を。のがれつるこころ不思議なれ。

判官「唯さながらに十人餘。地「夢の覺めたる心地にて。互に面を

合はせつゝ。泣くばかりなる有様かな。ッセ「然るに義経。弓馬

の家に生まれ来て。命を頼朝に奉り。屍を西海の波に沈め。山

野海岸に。起き臥し明かす武士の。鎧の袖枕。かたらく隙も波

の上。ある時は舟に浮び。風波に身を任せ。ある時は山脊の馬

蹄も見えぬ雪の中に。海少しある夕波の。立ちくる音や須磨明

石の。とかく三年の程もなく。敵を亡ぼし靡く世の。其忠勤も

徒に。なりはつる此身の。うも何といへる因果ぞや。判官「實も

や思ふ事。叶はねばこそ憂き世なれど。地「知れどもさすかなほ。

思ひ返せば梓弓の。すくなる人は苦みみて。譏臣ハ彌増に世に

在りて。遠東東南の雪を起し。西北の雪霜も。責められ埋る憂き

身を。ことわり給ふべきなるに。唯世は。神も佛もまよまよ

ぬかや。恨めりの憂き世や。あら恨めりの憂き世や。

ワキ詞「如何に誰かある。狂言「御前も候ふ。ッキ「扱も山伏達も聊

爾を申して。餘りも面目もなく候ふ程も。追つ付き申し酒を一

つ参らせうするにであるぞ。汝は先へ行きて留め申し候へ。狂言

「畏つて候ふ。如何も申し候ふ。先には聊爾を申して餘りに面

目もなく候ふとて。關守の是まで酒を持たせて参られて候ふ。

シテ詞「言語道斷の事。やがて御目も懸らうするよて候ふ。狂言

「シカク。」

心なくれり 心をやるの意。

呉織をゆるす 心をやるの意。

り流るる機工女の名。前の國

び出たす。あやの同時に云ひ

けたるなり。委しくは吳服の

居居と見たる。委しくは吳服の

山伏達行の爲めに
御座候ふ。 孫侍の御に御着
佐藤の御に候ふ程にて見
知られん人に逃ふを候るなり。

佐藤の御に候ふ。 三郎と稱す。 藤經の
御座候ふ。 御内に御座候ふ。
わささ知らぬ候して云ふ。

判官殿 藤經を指す。

祖母にて候ふ。 即ち藤經の母。
巨季十郎清綱の女なり。

まづ御内へ御入り候へ
外にては他人の洩れ聞かん恐れ
あれば云ふ。
御座候へられ。 藤經上座に居

よて候ふ。

子「如何に誰かある。 トモ詞「御前に候ふ。 子「山伏達は幾人御着き
あるぞ。 トモ「十二人御着きにて候ふ。 子「まづく出で、對面
申し候ふべし。

ワキ詞「是なる幼き人は誰が御子息よて渡り候ふぞ。 子詞「是は佐

藤繼信が子よて候ふ。 ワキ「叔繼信殿は御内へ御座候ふか。 子「判

官殿の御供申し。 八島の合戦に討たれて候ふ。 ワキ「叔此攝待は如

何なる人の御企よて候ふぞ。 子「判官殿十二人の山伏となり。 奥

へ御下りの由承り候ふ程に。 祖母よて候ふ者此攝待を始めて候

ふ。 見申せば方々こそ十二人御入り候へ。 もく判官殿よては御

座おく候ふか。 ワキ「暫く候ふ。 かゝる疎忽なる事を承り候ふ物

か。 まづく御内へ御入り候へ。 さればこそ御大事よて候ふ。
恐れながら御座を替へられ。 皆々の中らうち交り御座候へか

と存じ候ふ。 判官「實は是は尤にて候ふ。

シテ「如何に鶴若。 子「何事にて候ふぞ。 シテ詞「山伏達は幾人御着

き有るぞ。 子「十二人御着き候ふ。 シテ「かゝまゝく。 一重「舊里

を出で、鶴の子の。 松よ歸らぬ淋しさよ。 ナシ「實にや憚りある

身とて。 御前に参りてさむらへば。 かづうは亡き人の名をも

くたし。 又は子供のいよへの。 耻をも顯はすにてはさむらへ

ども。 餘り御なつかしき心ばかりにて。 御前よ参りて候ふな

り。 是は故佐藤庄司が後家。 繼信忠信が母にて候ふ。 實にや親

子恩愛の別れの餘りには。 包むべき人目をも知らず。 又は憂き

身の耻をも。 顯はすよては候へども去りながら。 此攝待と申す

よ。 現世の祈の爲めにも非ず。 後生善所とも思はず。 嫡子繼信

は八島にて討たれ。 弟忠信は都にて失せけるとばかりよて。 委

しき事をも知らずして。 ひどり悲しむ身を知る雨の。 晴れぬ心

かしまし、心は他聞と尋るれば先づ孫と則
止す。 其の故を立し出でし。 繼信兄
那の昔に丁令威と云ふ人。 結
化して千載の後。 家に歸りし
云ふ古事あると用ふ。 主君の御前
に出づるは遠慮すべき老尼の身
として。 且は云ふべきと母
音を引きて稱ふ。 當時の官階な
り。 亡き人の名をもくたし。 亡夫の
名をも討すの意。 くだしは朽ち
さす。 子のいしへの。 繼信兄弟の
生前の耻辱と死後にて顯はすは
道に當るは夫の爲め。 老尼の無
故に當ると云ふなり。 信夫の
現世の祈の爲めにも非ず。 佛に
祈るにもあらざるなり。 佛に
祈る所にも思はず。 死して後
生善所とも思はず。 嫡子繼信
は八島にて討たれ。 弟忠信は都
にて失せけるとばかりよて。 委
しき事をも知らずして。 ひどり悲
しむ身を知る雨の。 晴れぬ心

身を知る雨の古今集に「か身
 ありて雨は降りそまされに依
 りて来りては人の云ひたるに
 たるに身を置きて思ふは此に
 人の我身を置きて思ふは此に
 こに知るは思ふ身より思ふは
 るのみにて古歌の詞を用ひた
 と云ふ。

空利生 利益功能など云ふに同ト。
 空しくなりし兄弟と 繼信忠信
 などや吊らひの 何さて母に對
 して子に對して。 繼信兄弟の悔み
 ほどに御悔みし御せられぬは
 故に御悔みし御せられぬは

や慰むと。此攝待を始め候ふ。札を立てより以來。一日
 五人三人。乃至一人二人。絶ゆる事はまゝさねども。十二人
 は是が始め候ふ。いづれか我君ぞ。何れか其てまゝす
 ず。夜も更けたり。人の知るべき事にもあらず。此姥が耳より
 と御教へ候は。この攝待の利生にて。地「空しくなりし兄弟を。
 再び見ると思ふべし。親子よりも主従は。深き契りの中なれば。
 さこそ我君も。哀れと思ひ召すらめ。殊更御爲めに。命を捨て
 一郎等の。ひとり母ひとりは子なり。などや吊らひの。御言
 葉をも出だされぬ。かほど數ならぬ。身には思ひのなかれか。
 あら恨めしの憂き世や。
 一「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。我等如きの山伏
 の。五人三人行き連れく通り候ふが。今夜此攝待十二人着
 きたればとて。判官殿とはかゝる疎忽なる事を承り候ふ物かな

どの山伏 何れの國より出でた
 る山伏の意。

御めのこと 乳母と云ふが本にて
 だつる役。 主君と守り立てて

是は出羽の羽黒山より出でたる
 羽黒山は山伏の修行する處なれ
 ば故に云ふ。此名は謡曲の
 文句によく出でたり。

去りながら。繼信忠信の母にてまゝさば。判官殿の御内の人
 の名字をば御存じ候ふべし。うなたより名を指して承り候ふべ
 し。一「仰せの如く我子は御内より有りし者なれば。大方は推
 量申すとも。このみはよも違ひ候はじ。兼房詞「かやうに物申す
 山伏をば。どこ山伏と御覽じて候ふぞ。一「まづ唯今物仰せら
 れつる客僧は。此御供の内にては一の老体にて御入り候ふな。
 いで此御供の内より年よりたる人は誰ぞ。や。今思ひ出だしたり。
 判官殿の御めのこと。増尾の十郎權の頭兼房山伏にてまゝすな。
 又あれなる山伏はどこ山伏にて御渡り候ふぞ。兼房詞「是は出羽の
 羽黒山より出でたる客僧にて候ふ。一「いや是は播磨の人の聲
 にて候ふ。うれを如何と申す。此姥はもと播磨の者。十三
 の年繼母を恨み都より上り。故庄司殿と契り。繼信忠信を設け。
 今かく憂き目を見候へば。唯恨めしう候へ。されば我國の

鷲尾の十郎 名は經也。

西塔山伏 比叡山三塔の一なる西塔に住みし故に云ふ。

三塔一の遊僧 安宅に安へり。

御心強くましますぞ 名乗とせぬ故に云ふ。 強情にも

あゝは給へ 實であゝし給へ

人の聲なれば、などかは知らず候ふべき。いで此御供の内一掃磨の人は誰う。是も思ひ出だして候ふ。判官殿鶴越とやらんを通り給ひし時。狩人の姿にて参りあひ。其まゝ名字賜はり。今までも御供と聞こゆ。鷲尾の十郎山伏よて御渡り候ふな。ッヤ「扱かう申す山伏をば。どこ山伏と知ろし召されて候ふぞ。シテ「此御聲こそ大事にて候へ。都の人の聲かと思へば。又近江の人の聲にも似たり。物仰せられ候ふも何とやらん物ヤ〜く見え給ひて候ふ。あつばれ是は西塔山伏とさめれ。それならば本は近江の人。三塔一の遊僧。今は又我君の。一人當千の武士よのう。地「武士も。物の哀れは知る物を。などされは餘りに。御心強くましますぞ。あかさせ給へ人々ど。よろ目も知らず泣き居たり。

子詞「かく心もなき人々に。そのみ言葉を盡し給はんより。今は早

草木を結ばぬ 無情の草木より成れる身ならぬの意。

捲は二葉より 捲はすぐれし香木なれば。始めて生ひうむる時より既に香ばしきと云ふ。引く。勇士の子は幼少ながら

御内へ御入り候へ。判官詞「暫く候ふ。誠繼信の御子ならば。判官殿とればしきを指し給ひ候へ。子「承りて候ふとて。十二人の山伏の。皆御顔を見渡して。是こそ其にてはしませ。判官「扱其よてあるべきとは何故に仰せ候ふぞ。子「いや如何に包ませ給ふとも。人にかはれる御粧ひ。疑ひもなき我君よ。地「父給へのうとて走り寄れば。岩木を結ばぬ義經なれば。泣く〜膝に懐き取る。實にや栴檀は。二葉よりこそ匂ふなれ。誠に繼信が子なりけりと。よろの見る目まで。皆涙をぞ流しける。

ッキ詞「今は何をか隠し申すべき。我君にて御座候ふ。此上は御座を直され候へ。老尼も近う御参り有つて御目よかより申され候へ。ッテ詞「あら有り難や候ふ。我君を拜み参らするにつけて。子供の事こそ思ひ出でられて候へ。ッキ「實よ〜尤よて候ふ。シテ「如何に申し上げ候ふ。繼信が八島にての最期の有りさま。

彼も主従 教經と若王。
兼經と繼信。

一人なりとも御供申し。繼信忠
信の内が今までも御供しての
意。

いかゞはうれしがるべき 如何
程うれしがるらんか。
今はかうよき 既に最期との意。

二世の願ひ 現在と未來との願
望。
三世の御願 君臣は過去現在未
來の三世とかけたる契りれば云
露塵 身の輕さを尋へて云ふ。
八句 八十の齡と云ふ。

命の恩 繼信にいはりて死せし
恩と云ふ。

月の盃 盃の形と月に譬へて云
ふ。

涙と共に 涙と涙ととなり。

座敷にも直らで 我座にも就か
ずしての意。

御内の人。シテ「彼は平家の舟の内。ワキ」此方は源氏の陸の陣。

シテ「彼も主従。ワキ」是も主従。シテ「思ひは同と思ひなれば。

ワキ」よりの歎きを思ひ合はせて。御慰みも候へどよ。シテ「うれ

は仰せまでもさむらはず。御身がはりに立ち参らする上は。今

世後世の面目なり。さりながら一人なりとも御供申し。御笈を

も肩よかけ。此御座敷にあるならば。地「十二人の山伏の。十三

人も連なりて。唯今見ると思はゞ。いかゞはうれしがるべき。

クモ「其時義經。老尼に語り給ふやう。八島にて繼信。今はかう

よと見えし時。思ふ事あらば。委しく言ひ置けど。くれぐれ尋

ね問ひしに。繼信其時に。息の下より申すやう。弓矢取る身の。

御身がはりに立つ事。二世の願ひや三世の。御恩を少し報謝す

る。命の輕き身は。露塵何か惜しからん。さりながら故郷よ。

八句に及ぶ母と。十一餘る童部。是等が事の不便さ。少し心

よかくる雲の。月よ覆ひて光も闇くなる如く。其まよくれく
ど。終に空しくなりけり。判官「かやうに郎等を討たせつと。

地「自ら手をくだき。忠勤まこと曇らすは。終に治まる世よ出で

て。繼信忠信が。子孫を尋ね出だして。命の恩を報せんと。思

ひし事も空しく。我さへかゝる姿にて。其名をだよも名乗り得

ぬ。憂き身の果ぞ悲しき。

シテ「母は思ひよ堪へかねて。更くるも知らず有明の。月の盃取

り出だし御酌よこころ参りけれ。判官「實にや心を汲みて知る。人の

情の盃を。涙と共に受けて持つ。子「鶴若酌に立ちかはり。別れ

し父の御前にて。給仕すると思ひなして。地「十二人の山伏の。

終夜の酌を取り廻り。座敷にも直らで。進み勇める有様を。父

よ見せばやとぞ思ふ。

地「さる程よ。夜もほのぐと明け行けば。暇申してとらばとて。

うつほ 弓の矢を入れて買取ふ
道具。 自らにくれよの意。
従者に云ふ詞。

弓矢の御供 軍の時の御供の意。

道具 貴の小さき頭巾篠懸と指
まことさふ。 腕にて候ふの
意。

すいされて だまされてに同
じ。

進き入れ 家の内に進き込む
行くは慰む方もあり。 家に立ち
て行くは慰む方外に氣の晴るる事
もある。 涙なるらん。 跡に留ま
る人。 心細く候しよの意。

はや此宿を立ち出づる。子「如何に誰かある馬に鞍置き。弓取ま
おらせよ。君の御供申さうするよ。シテ」うも御供とは何事ぞ。
子詞「君の御供申してこそ。親の敵も逢ふべけれ。シテ」それは弓
矢の御供なり。是は修行の山伏道に。何の敵のあるべきぞ。子
「さあらば思ひ出たたり。小さき頭巾篠懸を。とく持へて給ひ
給へ。山伏道の御供せん。ツキ詞「辨慶涙を押さへつ。如何に申
さん鶴若殿。まこと御供有りたくは。今日は道具を拵へ給へ。
明日は迎ひに参るべし。子「まことさふか。ツキ「中や。ツレ」我
も迎ひに参るべし。ツキ「我も迎ひに参らんと。地「面々聲々にす
かされて。いとけなき身の悲しさは。誠ぞと心得て。少く言葉の
弱りたる。をりを得て客僧へ。泣くく宿を出でければ。シテ
「老尼は鶴若を抱き入れ。地「行くは慰む方もあり。とまるや涙な
るらん。

雨月 うげつ

氏信作

ワキ次第「心を誘ふ雲水の。ゆくへや何處あるらん。詞「是は嵯
峨の奥に住居する西行法師にて候ふ。我宿願の子細あるより。
唯今住吉の明神に参詣仕り候ふ。道行「住み馴れし。嵯峨野の奥を
立ちいでく。西より西の秋の空。月をゆくへのあるべにて。難
波の御津の浦づたひ。入りぬる磯を過ぎ行けば。早住の江に着
きにけり。詞「急ぎ候ふ程よ。是ははや住吉に着きて候ふ。我此
所に來りこくか。こをさすらひ歩き候ふ程よ。早日の暮れて候
ふ。又あれを見れば釣殿の邊と思ひて。火の光の見えて候ふ
程よ。立ち寄り宿を借らばやと思ひ候ふ。
シテ「風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照らせば夏の夜の霜。
うれさへあるよ秋の空。餘りよ堪へぬ半の月。あられもころの

な小倉の野邊に家居せしなり。...
 西行法師 佐兵衛尉たり。二十三
 西行法師 佐兵衛尉たり。二十三
 西行法師 佐兵衛尉たり。二十三

をりからやあ。
 「ワキ詞」如何に此屋の内へ案内申へ候ふ。
 「ワキ詞」如何に此屋の内へ案内申へ候ふ。
 「ワキ詞」如何に此屋の内へ案内申へ候ふ。

夜間の情しき意。夜の透雨と雲々
 定めなき身の意。いつぞやなるか
 賤が軒端を葺きざわづらふ。月は洩れ雨
 は溜れと思ふよは。賤が軒端を葺きざわづらふ。

歌の下の句なり。此上の句を繼がせ給は。御宿は惜み申す
 まじ。ワキ詞「本來我も和歌の心。其理を思ひ出づる。月は洩れ雨
 は溜れと思ふよは。賤が軒端を葺きざわづらふ。二人「月
 は溜れ雨は溜れと思ふよは。賤が軒端を葺きざわづらふ。シテ
 「れも」ろの言の葉や。地「實」理も深き夜の。月をも思ひ雨を
 さへ。厭はぬ人ならば。こなたへ入らせ給へや。折るも秋な
 かは。三五夜中の新月の。二千里の外までも。心知らるく秋の空。
 雨ハ又瀟湘の。夜の哀れが思はるよ。
 ツレ詞「のう村雨の聞こえ候ふ。シテ詞「實に村雨の聞こゆるがや。
 遠里小野の嵐やらん。ツレ「よくく聞けば時雨ならで。更け行
 くまよ秋風の。シテ「軒端の松に。ツレ「吹き来るがや。地「雨よ
 てはなかりけり。小夜の嵐の吹き落ちて。なかく空は住吉の。
 所からなる月をも見。雨をも聞けと吹く。閨の軒端の松の風。こく

神月納受... 西行の宿願と神の受け入れ給ふ事。

此宮神木其て... 風吹く音... 神の吹く音... 西行の宿願と神の受け入れ給ふ事。

但馬守經政... 平經政... 元清作

經政 つねささ

ワキ詞「是は仁和寺御室一仕へ申す僧都行慶にて候ふ。扱も平家の一門但馬の守經政は。いまだ童形の時より君御寵愛なのめな

元清作

仁和寺御室... 平經政... 元清作

らず候ふ。然るに今度西海の合戦討たれ給ひて候ふ。又青山と申す御琵琶は經政存生の時より預け下されて候ふ。彼御琵琶を佛前にすゑ置き。管絃講にて吊らひ申せとの御事にて候ふ程。役者を集め候ふ。サシ「買にや一樹の陰に宿り。一河の流れを汲む事も。皆これ他生の縁ぞか。まゝてや多年の御値遇。惠を深くかけまくも。忝なくも官中にて。法事をなして夜もすがら。平の經政成等正覺と。吊らひ給ふ有り難さよ。地こども又。彼青山と云ふ琵琶を。亡者の爲めは手向けつ。同じく糸竹の。聲も佛事をなす添へて。日々夜々の法の門。貴賤の道も昔や。」シテサ「風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を照らせば夏の夜の。霜の起居も安からで。假に見えつる草の陰。露の身ながら消え残る。妄執の縁こそつたなけれ。光

りける青山を取り手せられ
て。此曲と君に授け奉る。三曲の
中にも上石上これなり。其後
彈く事もせさせ給ひて遊ばし
仁和尚の御室の御所へ奉らさ
給ひたりし。此後政君の置
るさかや。甲は紫藤の甲はら
の月の出でける木の間に有
たりける故にこそ。青山と名
代の名物なり。主象にも相
管絃譜 音楽にて法事とする
役者 宮庭樂舞等琵琶太鼓羯鼓
証鼓などそれの管絃者と云
實にや一樹の云々 見知らぬ人
河の流に共に遊ばさへ深き縁ある
事なるにの意。
値遇なるにの意。交はる事。
かげまも 出で逢ふ事。交はる事。
宮中 掛けて云ふ意とを察す。
夜もす 仁和寺と云ふ意。
成等正覺 迷を去りて悟に就く
同く 手向けたる琵琶と同く
糸竹 管絃の門下。日夜に法事
日々夜々の法の門下。日夜に法事
貴族の別なく平等に成佛せらるる
風枯木と吹けば云々 本文は雨
月に云へり。静なる夜のけしき

の内一人影の。有るか無きかに見え給ふは。如何なる人よてま
ます。シテ詞「我經政が幽靈なるが。御吊らひの有難さに。
是まで顯はれ來りたり。ソキ」そも經政の幽靈と。答ふる方を見
んとすれば。又消えくぐと形もなくて。シテ「聲はかすかに絶に
残つて。ソキ」正しく見につる人影の。シテ「有るかど見れば。ソキ
「又見にもせて。シテ「有るか。ソキ」無きかに。シテ「かげろふの。
地」幻の。常なき身とて經政の。もとの浮世に歸り來て。それとは
名のれども其主の。形は見ねぬ妄執の。生をこころ隔つとも。我
は人を見る物を。實にや吳竹の。寛の水はかはるとも。住み飽
かざりー宮の中。幻に参りたり。夢寺よ参りたり。
ソキ詞「不思議やな經政の幽靈かたは消に聲は残つて。なほも
言葉をかはへけるぞや。よー夢なりとも現なりとも。法事の功
力成就して。亡者に言葉をかはす事よ。あら不思議の事やな。

つげたり。世に心の残りて
かげまも 出で逢ふ事。交はる事。
宮中 掛けて云ふ意とを察す。
夜もす 仁和寺と云ふ意。
成等正覺 迷を去りて悟に就く
同く 手向けたる琵琶と同く
糸竹 管絃の門下。日夜に法事
日々夜々の法の門下。日夜に法事
貴族の別なく平等に成佛せらるる
風枯木と吹けば云々 本文は雨
月に云へり。静なる夜のけしき

シテ詞「我若年の昔より宮の中よ参り。世上よ面をさらす事も
偏に君の御恩徳なり。中よも手向け下さる。青山の御琵琶。
娑婆にての御許されを蒙り。常は手馴れー四つの緒。地「今も引
かるく心故。聞きー似たる撥音の。是ぞ正しく妙音の誓ひな
るべ。されば彼經政は。いまだ若年の昔より。外には仁義禮
智信の。五常を守りつ。内よは又花鳥風月。詩歌管絃を専と
。春秋を松陰の。草の露水のあはれ世の。心よもるく花もな
ソキ詞「亡者の爲めよは何よりも。娑婆にて手馴れー青山の琵琶。
れのく樂器を調へて。糸竹の手向をすむれば。シテ詞「亡者
も立ちより燈の影に。人には見ねぬ者ながら。手向の琵琶を調
ぶれば。ソキ「時一も頃は夜半樂。眠りを覺ますをりふーに。シテ
「不思議や晴れたる空かき曇り。俄に降りくる雨の音。ソキ「一き

御下されと云ふ。仁和寺の宮の
四つに引くものなれば云ふ。四柱にて
今引くものなれば云ふ。四柱にて
妙音の響ひに引くものなれば云ふ。
云ふ程の意。是等と友として風流
花の遊びをする云ふ。春の花の紅葉など
草の露水のあはれ。はかなき
心にも。花もなし。花は散り
も。世の無常とばまぬかれずと
なり。平調の樂。夜も半なる
夜半の樂。平調の樂。夜も半なる
時節に。平調の樂。夜も半なる
月。仁和寺の南に接したる岡の
名。仁和寺の南に接したる岡の
大紋は。白文。文。行の
切。如。急。小紋
の。三。四。五。の。用
の。一。二。三。四。五。の。用
の。一。二。三。四。五。の。用
の。一。二。三。四。五。の。用

りに草木を拂ひつく。時の調子も如何ならん。シテ「いや雨よて
はなかりけり。あれ御覽ぜよ雲の端の。地」月に雙の岡の松の。
葉風は吹き落ちて。村雨の如くにれどづれたり。れもろや折
からなりけり。大紋は嘈々として村雨の如く。扱小紋は切々と
して。私語に異ならず。クセ「第一第二の紋は。索々として秋の
風。松を拂つて疎韻れつ。第三第四の紋は。冷々として夜の鶴の。
子を思つて籠の中に鳴く。鶏も心して。夜遊の別れとめよ。
シテ「一聲の鳳管は。秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰も是にめでく。
梧竹は飛ひ下りて。翅を連ねて舞ひ遊べは。律呂の聲々よ心聲
は發す。聲あやをなす事も。昔を返す舞の袖。衣笠山も近かり
き。れもろの夜遊や。あられもろの夜遊や。
シテ詞「あら恨めーやたま〜閻浮の夜遊に歸り。心をのぶるを
りふー。又曠恚の起る恨めーや。ソキ」さきよ見えつる人影の。

本。或は吹く秋風に響へ。
心。或は吹く秋風に響へ。
見合せて。或は吹く秋風に響へ。
一。或は吹く秋風に響へ。
唐土の。或は吹く秋風に響へ。
風。或は吹く秋風に響へ。
來りて。或は吹く秋風に響へ。
ふ。或は吹く秋風に響へ。
律呂。或は吹く秋風に響へ。
心。或は吹く秋風に響へ。
行。或は吹く秋風に響へ。
中。或は吹く秋風に響へ。
合。或は吹く秋風に響へ。
呼。或は吹く秋風に響へ。
衣笠山。或は吹く秋風に響へ。
衣笠山。或は吹く秋風に響へ。
帝。或は吹く秋風に響へ。
火。或は吹く秋風に響へ。
雨。或は吹く秋風に響へ。

なほ顯はるゝは經政か。シテ「あら耻づかーや我姿。はや人々よ
見にけるぞや。あの燈を消し給へとよ。地」燈を背けては。共よあ
はれむ深夜の月をも。手取るや帝釋修羅の。戦ひは火を散ら
して。曠恚の猛火は雨となつて。身にかゝれば。拂ふ劍は他を
惱ま。我と身を切る。紅波はかへつて猛火となれば。身を焼
く苦患はづかーや。人には見はれぬ物を。あの燈を消さんとて。
其身は愚人夏の虫の。火を消さんと飛ひ入りて。嵐と共に燈を
吹き消して。暗まされより。魄は失せにけり。魄の影は失
せよけり。

紅波はかへつて 血の事を云ふ。かへつては知つての意。波の立ちかへる意とを兼り。
人に見えぬ物と 夏虫に自身を留めて云ふ。此苦樂を受くるさ知りながら軍に接はりしと云ふ。
其の虫 蟻の事。火を取りに寄る虫。
蟻の事 蟻の事。火を取りに寄る虫。

求塚

もとめづか 古名 處女塚 清次作

津の國に住む少女。二人の男に追
られてせん。たなく生田川に
之を本として大和物語にあり。
地の名物なる若菜とあけて興と
成し。後段は地獄の苦患と見えて
らべ引きて自在なる處に。作者
の手際と味ふべし。
鄙の長路 田舎道の長きと云
ふ。
生田の里 八郡部にあり。
若菜 正月初子の日に若菜と結
みて内蔵察ならびに内膳司より
奉る儀式あり。人々も春の節は
ゆめにはわりの野に出でし類み
どへり。神に手向けに人々も春の
菟原郡の人生田の浦より若菜と
採りて朝廷に奉りしより。生田
の若菜とて此地の名物と爲りた
り云ふ。
生田の小野 生田山より海邊ま
木の芽も春の雲ふれば花なき

ワキ次第「鄙の長路の旅衣。都にいさや急がん。詞「是は西國方よ
り出でたる僧よて候ふ。我未だ都を見ず候ふ程よ。只今都に上
り候ふ。道行「旅衣。八重の夕路の浦づたひ。船にても行く旅の
道。海山かけて遙々と。明か暮らして行く程よ。名よのみ聞
き津の國の。生田の里に着きよけり。
シテツレ一聲「若菜摘む生田の小野の朝風に。猶さえかへる袂か
な。ツレ「木の芽も春の淡雪よ。三人「森の小草なほ寒し。シテサシ
「深山には松の雪だに消えなくに。三人「都は野への若菜摘む。頃
にも今は爲りぬらん。思ひやるころゆかへけれ。シテ「こゝは又

里も花ぞ散りける。とあるとけ
ふ。芽のはりいづると春にか
たり。春の雲と云ふ。清けやす
き意なり。また芽と云
森の小草なほ寒し。また芽と云
深山には松の雪だに消えなくに
は野邊の若菜とて此地の名物と
天さかる意。鄙の長路の長きと
りたる意。都より空の遠さか
雲も命の。雲の枕詞なり。
あたりを意。生田の浦は神戶兵衛
身の限りにて。雲の極度と
云ふ。「うみの」音と重れ
たり。
若菜つむ里人の跡ならん。風靡あ
またに野はなりにけり。風靡あ
の歌。若菜摘む人々に踏み分け
らるなり。雪の消わたるよしとあ
道なしとて踏み分けて。古今
集に「我宿は雪ふりしきて道も
ば「とあるを用ふ。人しなけれ
雪間を待つならば。雪が消れて
七草。若菜の種と云ふ。昔は
十二種などの事もありたれ。後
世は七つに定まれば。若菜。五
鈴しる。是なり。鈴の座。鈴菜。
生田の森 生田神社の森と云
ふ。
生田川 布引瀨の下流にて社前
と通じて海に入る。菟原八郡の

もとより所も天さかる。三人「鄙人なればれのづから。憂きも命
の生田の海の。身の限りよて憂き業の。春とともなき小野に出
でく。歌「若菜摘む。いく里人の跡ならん。雪間あまた野はな
りぬ。道なるとても踏み分けて。野澤の若菜今日摘まん。雪間
を待つならば。若菜ももや老いもせん。嵐吹く森の木陰。小
野の雪も猶さにて。春ととも七草の。生田の若菜摘まうよ。
ワキ詞「如何は是なる人に尋ね申すべき事の候ふ。生田とは此あ
たりを申候ふか。ツレ「生田と知ろし召したる上は。御尋ねま
でも候ふまじ。シテ「所々の有様も。なかは御覽じ知らざら
ん。詞「先は生田の名よれふ。是よ敷ある林をば。生田の森と
は知ろし召さずや。ツレ「又今渡り給へるは。名よ流れたる生田
川。シテ詞「水の緑も春浅き。雪間の若菜摘む野邊よ。ツレ「少な
き草の原ならば。小野とはなぞや知ろし召されぬぞ。三人「三吉

三言野。近江の國。立田初瀬。大和の國。歌人の家には知るなれば。知らぬ事なればとて。生田の森とも林とも。知らぬ事をなすのたまひうよ。ソキ「實」目前の所々。森を始めて海川の霞み渡れる小野のけいき。詞「實」も生田の名よふれへる。扱求塚とは何處ぞや。ソキ詞「求塚」とは名には聞けども。誠は何處の程やらん。妾も更し知らぬなり。ソレ「のうく」旅人。よいなき事なのたまひう。妾も若菜を摘む暇。シテ「御身も急ぎの旅なるに。何しに休らひ給ふらん。三人」されば古き歌よも。地「旅人の。道さまたげに摘む物は。生田の小野の若菜なり。よいなや何を問ひ給ふ。春日野の。飛火の野守出て見よ。若菜摘まんも程あらじ。其如く旅人も。急がせ給ふ都を。今幾日有りて御覽せん。君がため。春の野に出て、若菜摘む。衣手さむい消に殘る。雪ながら摘まうよ。淡雪ながら摘まうよ。澤邊なる。ひこりは薄く

歌へよとの意。古人の若菜摘む。其如く旅人も。春日野の。飛火の野守出て見よ。飛火の野守出て見よ。若菜摘む。衣手さむい消に殘る。雪ながら摘まうよ。淡雪ながら摘まうよ。澤邊なる。ひこりは薄く残りども。水の深芹かき分けて。青綠色ながらいさや摘まうよ。ソレ「地」まだ初春の若菜には。このみ種は如何ならん。シテ「春立ちて。あゝたの原の雪見れば。また舊年の心地して。今年生は少なり。古葉の若菜摘まうよ。地」古葉なれどもさすがまた。年若草の種なれや。心せよ春の野邊。シテ「春の野に。莖摘みよと來一人の。若紫の菜や摘み。地」實もやゆかりの名を言めて。妹背の橋も中絶え。シテ「佐野の莖たち若だちて。地」緑の色も名よ染む。シテ「長安のあづな。地」からなづな。いろみ草も有明の。雪にまされて摘みかぬるまで春さむき。小野の朝風まだ。森のうづね松垂れて。いづれを春とは白波の。河風までもさわかへり。吹かるう袂も猶寒し。摘み残りて歸らん。若菜摘み残り歸らん。

残れども。水の深芹かき分けて。青綠色ながらいさや摘まうよ。ソレ「地」まだ初春の若菜には。このみ種は如何ならん。シテ「春立ちて。あゝたの原の雪見れば。また舊年の心地して。今年生は少なり。古葉の若菜摘まうよ。地」古葉なれどもさすがまた。年若草の種なれや。心せよ春の野邊。シテ「春の野に。莖摘みよと來一人の。若紫の菜や摘み。地」實もやゆかりの名を言めて。妹背の橋も中絶え。シテ「佐野の莖たち若だちて。地」緑の色も名よ染む。シテ「長安のあづな。地」からなづな。いろみ草も有明の。雪にまされて摘みかぬるまで春さむき。小野の朝風まだ。森のうづね松垂れて。いづれを春とは白波の。河風までもさわかへり。吹かるう袂も猶寒し。摘み残りて歸らん。若菜摘み残り歸らん。

若菜を摘む暇。暇しとの意。若菜を摘む。衣手さむい消に殘る。雪ながら摘まうよ。淡雪ながら摘まうよ。澤邊なる。ひこりは薄く

南無阿彌陀佛云々。四生を成佛せしめんとす。野人種なり。古くはひるはては何れも見る野に愛古なるは。極め

いつまで草の陰。苔の下は埋もれん。さらば埋もれもはてす。苦しみは身を焼く。火宅のすみか御覽せよ。

一余ひるがへせの意。迷の一念と。種々諸道に向ける。経の文句。苦界大地熱の地獄たるもの。三枝熱

「實」苦みの時來ると。いひもあへねば塚の上。火焰一群飛び覆ひて。シテ「光りは悲魄の鬼となつて。ウキ「標を振り上げ追ひ立つれば。シテ「行かんとすれば前は海。ウキ「後は火焰

源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝
源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝	源頼朝

治まる花の都どて。風も音せぬ春へかな。風光詞「是は
 源の頼光とは我事なり。さても丹州大江山の鬼神を従へしより
 以来、貞光季武綱公時。此人々と日夜朝暮参會申候ふ。殊更
 このほどは、晴間も見ぬ雨に候ふ程に。酒を勧めばやと存
 と候ふ。ナシ「有り難や四海の安危は掌のうちに照らし。百玉の
 理亂は心のうちに懸けたり。曇りなき。君の御影は久方の空
 ものどけき春雨の。音も静に都路の。七つの道も末すぐに。八
 洲の浪もれとせぬ。九重の春が久き。
 風光詞「いかに面々。さしたる興も候はねども。此春雨の昨日今
 日。晴間も見えぬつれづれ。今日も暮れぬと告げ渡る。聲も
 淋しき入相の鐘。地「つくづく。春のなほめの淋しきは。あのお

羅生門 らしやうもん 一名 綱 信光 作

一同次第 「治まる花の都どて。風も音せぬ春へかな。風光詞「是は
 源の頼光とは我事なり。さても丹州大江山の鬼神を従へしより
 以来、貞光季武綱公時。此人々と日夜朝暮参會申候ふ。殊更
 このほどは、晴間も見ぬ雨に候ふ程に。酒を勧めばやと存
 と候ふ。ナシ「有り難や四海の安危は掌のうちに照らし。百玉の
 理亂は心のうちに懸けたり。曇りなき。君の御影は久方の空
 ものどけき春雨の。音も静に都路の。七つの道も末すぐに。八
 洲の浪もれとせぬ。九重の春が久き。
 風光詞「いかに面々。さしたる興も候はねども。此春雨の昨日今
 日。晴間も見えぬつれづれ。今日も暮れぬと告げ渡る。聲も
 淋しき入相の鐘。地「つくづく。春のなほめの淋しきは。あのお

拾遺集の「山寺の入相の鐘の聲、
 毎に今日も暮れぬと告げ渡る云々
 九重の春、都の春に同じ。玉水は雨垂
 入相の鐘、都の春に同じ。玉水は雨垂
 七つの道、東海東北陸山陰山
 入相の鐘、都の春に同じ。玉水は雨垂
 九重の春、都の春に同じ。玉水は雨垂

につたふ軒の玉水れとすこく。獨なのむる夕まぐれ。伴ひかたら
 ふ諸人よ。御酒をすくめて盃を。とりとせなれや梓弓。彌猛心
 の一つなる。つはものゝ交はり。頼みある中の酒宴かな。思ふ
 心のうこひなく。唯うちとけてつれづれ。降り暮らしたる宵
 の雨。これぞ雨夜の物語。風光詞「あなな言葉の花も咲き。匂ひ
 も深き紅。面もめで人心。隔てぬ中の戯むれば。面白や諸
 共に。近く居よりて語らん。
 風光詞「あまり淋しき夜よて候ふ程よ。皆々近う寄つて御物語り
 候へ。ソキ詞「畏つて候ふ。仰せよて候ふ程に。皆々近う御参り候
 へ。風光「いかに申し候ふ。此程めづらしき事はなく候ふか。保
 昌「さん候ふ此頃不思議なる事を申し候ふ。九條の羅生門に鬼神
 の住んで。暮るれば人の通らぬ由を申し候ふ。ソキ「いかに保昌
 筋なき事なの給ひ。さすがに羅生門は。都の南門あらずや。土

羅生門 百二十一

木も我大君の國なればいつくか鬼の宿と定めんと聞く時は、たどひ鬼神の住めばとて住ますべきにもあらず。かゝる處忽ちる事を仰せ候ふ。保昌「扱は某詐を申すと思へし候ふか。此事世上に隠れなければ申すなり。まこと不審に思へし候ふ。今夜にてもあれ彼門に御出であつて。誠か偽か御覽候へ。ソキ」さては某參るまじき者と思へし候ふか。其義にて候はら。今夜かの門に行き。誠か偽かを見候ふべし。一る一を賜はり候へ。ソキ「満座のともがら一同。是は無益とさくへたり。ソキ」いや保昌「對し野心はなれども。一つは君の御爲めなれば。一る一を給へと申しけり。願光詞「げよく綱が申すごとく。一つは君の御爲めなれば。一る一を立てて歸るべしと。札を取り出で給ひければ。ソキ歌「綱は一る一を賜はりて。網は一る一を賜はりて。御前を立つて出でけるが。立ち歸り方々は。人の心を陸

野心 異心と云ふ程の意。

人の心を我と陸病なりと方々見

安達が原に云々 拾遺集に「みちのくは安達が原の黒塚に鬼の住みしは安達原の註と見るべし。引きはへますと 跡へ引つてへふ。弓は並と放せばははれもどるものなればなり。

物の具 鏡の事。同ト毛の兜の緒。毛とは鏡の緒。糸と云ふ。鏡は同ト糸にて結ぶる。糸の緒。緒は鏡の下にて結ぶる。重代の太刀。先置より相傳の太刀。たけ高き馬の意。舎人をもつれず。舎人は兵器と帯びて供する者。二條大宮。京都の町の名。二條大宮。南の方に馬の頭を向けての意。東寺。大宮の西八條の南にあつて出で。馬に鞭打つて出づる事。物冷ましく。寒き事。氣味のわるき事。乗り捨てに同下。下馬する事。

鬼のうしろに附きたるもの。

も木も我大君の國なれば。いつくか鬼の宿と定めんと聞く時は、たどひ鬼神の住めばとて住ますべきにもあらず。かゝる處忽ちる事を仰せ候ふ。保昌「扱は某詐を申すと思へし候ふか。此事世上に隠れなければ申すなり。まこと不審に思へし候ふ。今夜にてもあれ彼門に御出であつて。誠か偽か御覽候へ。ソキ」さては某參るまじき者と思へし候ふか。其義にて候はら。今夜かの門に行き。誠か偽かを見候ふべし。一る一を賜はり候へ。ソキ「満座のともがら一同。是は無益とさくへたり。ソキ」いや保昌「對し野心はなれども。一つは君の御爲めなれば。一る一を給へと申しけり。願光詞「げよく綱が申すごとく。一つは君の御爲めなれば。一る一を立てて歸るべしと。札を取り出で給ひければ。ソキ歌「綱は一る一を賜はりて。網は一る一を賜はりて。御前を立つて出でけるが。立ち歸り方々は。人の心を陸

奥の。安達が原にあらねども。こもれる鬼を従がへずは。二度又人に。面を向くる事あらじ。是までなりや梓弓。引きはかへさど武士の。やたけごころぞ恐ろしき。後ソキ一聲「扱も渡邊の綱は。唯かりうめの口論より。鬼神の姿を見ん爲めよ。物の具取つて肩に掛け。同じ毛の兜の緒を一め。重代の太刀をはき。地「たけなる馬に打ち乗つて。舎人をもつれず唯一騎。宿所を出で。二條大宮を。南がら一歩ませけり。地「春雨の。音も頻りよ更くる夜の。鐘も聞こゆる曉に。東寺の前を打ち過ぎて。九條れもて打つて出で。羅生門を見わたせば。物冷ましく雨落ちて。俄に吹きくる風の音に。駒も進まず高くなよき。身ぶるひいてこそ立つたりけれ。地「其時馬を乗り放し。羅生門の石壇にあり。一る一の札を取り出だ。壇上に立てれき歸らんとするに。後より兜の。鉦をつかんで引き留め

すはや鬼神と
れこの鬼。

御門 冠木門に同下。

太刀さしかさし
り上ぐる事。 太刀と頭に振

鐵杖 鬼の手に持つもの。

わきつち 盛の門の樓と云ふに
や。信州邊にては天井の事と云
シと云ふと云へり。この院に
係あるに似たり。この院に
時節を待ちて又取るべしと
綱の詞
かすかに聞こゆる。 綱の詞の
こゆると云ふ。 鬼神の名の聞

ければ。すはや鬼神と太刀抜き持つて。切らんとするに。取り
たる兜の緒を引きちぎつて。れぼえず壇より飛びたり。か
くて鬼神は怒りをなして。持ちたる兜をかつばと投げ捨て。其
長衡門の軒よりひとく。兩眼月日の如くにて。綱をよらんで立
つたりけり。

ワキ「綱はさわがず太刀さしかさし。地」綱はさわがず太刀さしか
さし。汝知らずや王地を侵す。其天罰はのがるまじとてかより
ければ。鐵杖を振りあげいやと打つを。飛び違ひちやうと切
る。切られて組みつくを。拂ふ劍に腕打ち落とされ。ひるむと
見えしがわきつちのほり。虚空をさして上りけるを。慕ひゆ
けども黒雲れほひ。時節を待ちて又取るべしと。呼ばる聲も
かすかに聞こゆる。鬼神よりも恐ろしかりし。綱は名をこら揚
げにけれ。

氷室

ひむろ

官増作

氷室の古事と氷の物の御説き
述べたり。氷の多少に寄せて
年の豊凶と知る事云ふ事あれ
ば。元日の節會にまじりて氷のた
めしとて。諸國水と云ふ事。氷の
氷の多少厚薄などを突問する儀
式あり。
八洲も同下。日本國中同様に雪
風と云ふの意。
九世の戸。興部郡天橋立にある
社。委しくは九世戸と見るべ
し。
津田の入江。若狭の名所なれど
詳ならず。萬葉集に津田の江
と云ふは。津田の江にあり。江
青葉山。同國大縣郡にあり。根
河木郎百首に「真色の青葉の
山も秋來ればなごあり。しづくに下紅
葉はり」などあり。
後瀬山。同國遠敷郡にあり。
夫木抄に「又も來人春とぞさき
若狭路や後瀬の山の藤の下さ
げ」などあり。
白玉椿八千代。後拾遺集に
「若狭の白玉椿八千代と云ふ何
に敷へん限なれば」などあると
用ふ。白玉椿は椿の名。
みどり。今朝より空なれば。夫木
抄に「今朝より空なれば。夫木
さつれて林に。へる春の初空」
春の發聲。春過ぎて後の意に云

ワキ次第「八洲も同じ大君の。御影の春が長閑けき。もうもく
是は龜山の院に仕へ奉る臣下なり。我此度丹後の國九世の戸
参り。既に下向道なれば。是より若狭路よかり。津田の入江
青羽後瀬の山々をも一見し。それより都へ歸らばやと存じ候ふ。
道行「花の名の。白玉椿八千世経て。緑にかへる空なれや。春の
後瀬の山續く。青葉の木陰分け過ぎて。雲路の末の程もなく。
都に近き丹波路や。氷室山にも着きよけり。詞「急ぎ候ふ程に。
丹波の國氷室山に着きて候ふ。此所の人を待ち。氷室の謂をも
委しく尋ねばやと存じ候ふ。
シテツレ一聲「氷室守。春も末なる山陰や。花の雪をも集むらん。
ツレ「深山よ立てる松陰や。二人「冬の氣色を残すらん。シテヤシ

君の威光も無きに似たり。唯よの常の雪氷を。一夜の間も年越ゆれば。春立つ風は消ゆる物を。されば歌にも。賈之が。袖ひちて。結び水の氷れるを。春立つ今日の。風や解くらんどもみれば。夜の間に來る春にだ。氷は消ゆる習ひなり。まいてや春過さ夏たけて。早水無月なるまでも。消はぬ雪の薄氷。供御の力あらずでは。如何でか残る雪ならん。

積ひたて結びし水の氷れるを。春立つ今日の。風や解くらんどもみれば。夜の間に來る春にだ。氷は消ゆる習ひなり。まいてや春過さ夏たけて。早水無月なるまでも。消はぬ雪の薄氷。供御の力あらずでは。如何でか残る雪ならん。

三才 天地人の三つと呼ぶ名。

皇國長く堅く云々。朝廷の長久なるを願したる。但し今の木に皇國と書らぬやうなり。帝道と書いたるは。佛法の光と日に譬ふ。佛日。佛法の光と日に譬ふ。法輪。佛法のめぐりくまると譬ふ。大輪のめぐりくまると譬ふ。夏の日になるまで。積ひたて結びし水の氷れるを。春立つ今日の。風や解くらんどもみれば。夜の間に來る春にだ。氷は消ゆる習ひなり。まいてや春過さ夏たけて。早水無月なるまでも。消はぬ雪の薄氷。供御の力あらずでは。如何でか残る雪ならん。

シテ詞「いや所によりて氷の消えぬと承るは。君の威光も無きに似たり。唯よの常の雪氷を。一夜の間も年越ゆれば。春立つ風は消ゆる物を。されば歌にも。賈之が。袖ひちて。結び水の氷れるを。春立つ今日の。風や解くらんどもみれば。夜の間に來る春にだ。氷は消ゆる習ひなり。まいてや春過さ夏たけて。早水無月なるまでも。消はぬ雪の薄氷。供御の力あらずでは。如何でか残る雪ならん。地「夫れ天地人の三才にも。君を以て主とす。山海萬物の出生。即ち王地の恩徳なり。皇國長く堅く。帝道遙に盛なり。地「佛日光りますく。法輪常に轉せり。陽徳をりを遠へずして。雨露霜雪の時を得たり。夏の日に。なるまで消えぬ冬氷。春立つ風やよきて吹くらん。賈之妙なれや。萬物時に有りながら。君の惠の色添へて。都の外の北

萬物時に有りながら云々。既に天の時を得て萬物の榮ゆる上に。葉山の木も大君の御影にいかで洩るべき。賈に我ながら。玉体と拜するも。氷の物の御調と拜して天願と拜すると云ふ。

初春の初子の今日の玉簪。手に取るからゆらぐ玉の。翁さびたる山陰の。去年のまよいて降り續く。雪のうづりをかき集めて。木の下木をかき入れて。氷を重ね雪を積みて。待ち居れば春過さて。はや夏山となりぬれば。いと氷室の構へて。立ち去る事も夏陰の。水にも住める氷室守。夏衣なれども。袖さゆる氣色なりけり。

初春の初子の今日の玉簪。手に取るからゆらぐ玉の。翁さびたる山陰の。去年のまよいて降り續く。雪のうづりをかき集めて。木の下木をかき入れて。氷を重ね雪を積みて。待ち居れば春過さて。はや夏山となりぬれば。いと氷室の構へて。立ち去る事も夏陰の。水にも住める氷室守。夏衣なれども。袖さゆる氣色なりけり。

山よ。つぐや葉山の枝茂み。此面彼面の下水よ。集むる雪の氷室山。土も木も大君の御影にいかで洩るべき。賈に我ながら。身の業の。浮世の數有りながら。御調にも取り別きて。猶天照らす氷の物や。他も異なる捧物。歎感以て甚き。玉体を拜するも。深雪を運ぶ故とかや。然れば年立つ初春の。地「初子の今日の玉簪。手に取るからゆらぐ玉の。翁さびたる山陰の。去年のまよいて降り續く。雪のうづりをかき集めて。木の下木をかき入れて。氷を重ね雪を積みて。待ち居れば春過さて。はや夏山となりぬれば。いと氷室の構へて。立ち去る事も夏陰の。水にも住める氷室守。夏衣なれども。袖さゆる氣色なりけり。

ロンギ地「賈に妙なりや氷の物の。御調の道も直もある。都よいさや歸らん。暫く待たせ給ふべ。とて山路の御ついで

云ひもあへれば 云ひもあへぬ
山にのぼる。山のくちくなる事。

るりたん 環着して作れる環の
意。透きとほる様に美しき形
と用ふ。但し意は取れるに非ず。

古鳥蘇 高麗樂の名。
ゆるぐ 動くに同じ。

雪とめぐらす 雪の曲と云ふ
舞の名より来る。氷室の縁にて
用ひたり。

氷室の御調 三位聖德太子の歌
に「雪の代は千雪の底のまわれ
石の縁の縁の縁とあらはるま
肝とつめて」とあるより来る。
紅蓮大紅蓮の氷を載く畜室の神体。さえ耀きてぞ顯はれた

て苦しむ事ある故に云ふ。たゞ
文字を借りて形容せるのみ。

萬境をうつす鏡 圓鏡の縁にあ
る鏡は。生前のすべりの有様を
うつす云ふ事ある故に用ふ。
これも明かなる形容のみ。

まわれ石 小石と云ふ。氷りた
る爲めに岩も水も小さく少な
しと云ひ。石も作れる深井
の意にて。次の詞と呼び起すな
るべし。
閉ちつけらるる事 舞の氷
の中に住むまよと云ふ。
波と静むるも氷 天下の風波と
年と待ちたるの意。年々の時節と
采女の舞 采女は天皇の御陪
に仕ふる役なれば。供へ給へや
の詞と受けて。其舞とまよ事
小忌衣 朝廷の御神事に着る
秋に添へて 舞の秋に舞るなり
寒水とうき 氷を著ふるには
清風と吹く 運送する道の
北山のすけや 宿禰の御調と云
山は北國の意と云ふ。北山は京都の北

新編通解 第三卷 氷室 百三十一

1. 今宵の氷の御調。供ふる祭御覽ぜよ。地「うもや氷調の祭とは。如何なる事もあるやらん。人ことう知らね此山の山神木神の。氷室を守護し奉り。毎夜に神事有るなりと。地「云ひもあへねば山くれて。寒風松聲し聲立て。時ならぬ雪は降り落ち。山河草木れくなべて。氷を敷きて瑠璃壇。なると思へば氷室守の。薄氷を踏むと見えて。室の内に入りけり。氷室の内に入りけり。

地「樂し引かれて古鳥蘇の。舞の袖こゆるぐなれ。天女「かはらぬや。氷室の山の深緑。地「雪を廻らす舞の袖かな。後シテ「曇りなき。御世の光りも天照らす。氷室の御調供ふなり。

地「供へよやく。さも深き水底の砂。シテ「長じては又巖の陰より。地「山河も震動し天地も動きて。寒風しきりし肝をつめ。紅蓮大紅蓮の氷を載く畜室の神体。さえ耀きてぞ顯はれた

シテ「谷風水邊さえ氷りて。地「谷風水邊さえ氷りて。シテ「月も耀く氷の面。地「萬境をうつす鏡の如く。シテ「清風梢を吹き拂つて。地「陰も木深き谷の戸。シテ「雪はふき。地「霞は横ざりて。岩もる水もさざれ石の。深井の氷に閉ち付けらるるを。引き放しひき放し。浮ひ出でたる氷室の神風。あら寒や冷やかや。シテ「賢き君の御調なれや。地「賢き君の御調なれや。波をささむるも氷。水を静むるも氷の日に添へ月行き。年を待ちたる氷の物の供へ。供へ給へや供へ給へと采女の舞の。雪を廻らす小忌衣の。袂し添へて薄氷を。碎くな碎くな。解かすな解かすなと氷室の神は。氷を守護し日影を隔て。寒水をうき清風を吹かして。花の都へ雪を分け。雲を凌ぎて北山の。すはや都も見えたり見えたり。急げや急げ氷の物を。供ふる所も愛宕の郡。

要宗の邸。内裏の土地を指す。ば念きて後れしとの意。

同(立案) 土佐功正、士佐正、士佐光、士佐三

同(立案) 江田三、井田三

同(立案) 武蔵坊辨慶

同(立案) 倉殿

同(立案) 西下

同(立案) 列官殿

同(立案) 去春

同(立案) 依りて

同(立案) 幸たる

捧ぐる供御も日の本の君に。御調物こころめでたけれ。

正尊 しやうくわん 長俊作

「是は西塔の武藏坊辨慶よて候ふ。扱も我君判官殿は。鎌倉殿より大名十人付け申されて候へども。内々御中不和になり給ふよより。心を合はせて一人づゝ皆下りはて候ふ。扱も去年の正月木曾義仲を討せよより以來。度々平家を攻め落し。此春亡ぼして候ふ。一天を静め四海を澄ます御實行なはるべき處に。渡邊よて梶原が逆櫓の意見を承引給はざりて遺恨よより。我君を讒奏申し。御兄弟の御中不和よなり給ひて候ふ。又鎌倉より土佐正尊と申す者。昨日都へ上つて候ふが。是は我君をねらひ申さん爲めと聞こゝ召され。急ぎ召連れて参れとの御説にて候ふ程に。唯今土佐が旅宿へと急ぎ候ふ。如何に案

土より候ふ。判官殿より御使に武藏が参じて候ふ。正尊は此屋の内へ御入り候ふか。武藏殿かやあら珍らや。まづ此方へ御入り候へ。承り候ふ。先以て御上りめでたう候ふ。是は君よりの御使にて候ふ。上洛のよゝ聞こゝ召し及ばれ。何とて御伺候は候はぬぞ。鎌倉殿の御意も聞こゝ召されたく候ふ間。急いで御参りあれとの御事にて候ふ。さん候ふ宿願の子細候ひて。熊野参詣の爲めにふと罷り上りて候ふ。昨日京着仕り候へども。路次より違例仕り散々の事よて候ふ程よ。今まで遅なはり申して候ふ。委細承り候ふ。仰せはさるとなれども。唯今御供申せとの御事よて候ふ。畏つては候へども。今少し養生を加へ。必ず伺候申へ候ふべし。いや片時も早く國の御事をば聞こゝ召されたく思召せば。唯々御供申さんと。是非をいはせぬ武藏殿よ。剛なる

熊野参詣 九州の熊野に参詣せん爲めに先づ京都と通ぐる事。不候の事。

内申候ふ。判官殿より御使に武藏が参じて候ふ。正尊は此屋の内へ御入り候ふか。武藏殿かやあら珍らや。まづ此方へ御入り候へ。承り候ふ。先以て御上りめでたう候ふ。是は君よりの御使にて候ふ。上洛のよゝ聞こゝ召し及ばれ。何とて御伺候は候はぬぞ。鎌倉殿の御意も聞こゝ召されたく候ふ間。急いで御参りあれとの御事にて候ふ。さん候ふ宿願の子細候ひて。熊野参詣の爲めにふと罷り上りて候ふ。昨日京着仕り候へども。路次より違例仕り散々の事よて候ふ程よ。今まで遅なはり申して候ふ。委細承り候ふ。仰せはさるとなれども。唯今御供申せとの御事よて候ふ。畏つては候へども。今少し養生を加へ。必ず伺候申へ候ふべし。いや片時も早く國の御事をば聞こゝ召されたく思召せば。唯々御供申さんと。是非をいはせぬ武藏殿よ。剛なる

敬つて申す 是より起請文の文
梵天 佛法にて云ふ梵天の主
帝釋 佛法にて云ふ帝釋天の
主神
四天王 多聞天・持國天・増
長天・廣目天と云ふ。そのく
佛法に守護する神。
閻魔王 地獄の神。
五道 天上・人間・畜生・餓鬼・地獄の五道。
伊豆 伊豆の國。國守の太子にて人
下界の神。
伊豆 三島明神と云ふ。三島に
祭れる神。
富士山 駿河の富士山に祭れ
る神。
熊野三所 熊野なる本宮新宮那
智と三所を總稱して云ふ。地所にあり。
金剛山 金剛山に祭れる神。大
王城の國守。京都近衛の神々を
祭れる神。
加賀 加賀の國守に祭れる神。上下二
社に分れる。
八幡三所 同様に祭れる神。
三所 同様に祭れる神。
松の尾 高野郡尾山の南に祭れ
る神。
不野 高野郡不野村に祭れる神。

シテ「敬つて申す起請文の事。上は梵天帝釋四天王。閻魔法王
五道の冥官泰山府君。下界の地には。伊勢天照大神を始め奉り。
伊豆箱根富士淺間。熊野三所金峯山。王城の鎮守。稻荷祇園加
茂貴船。八幡三所松の尾平野。總じて日本國の大小の神祇冥道。
請と驚かす奉る。殊には氏の神。全く正尊討手罷り上る事な
し。此事偽り是あらば。此誓言の御罰を中り。來世は阿鼻に。
墮罪せられんものなり。仍つて起請文此くの如し。文治元年九
月日正尊と讀み上げたるは。身の毛もよだちて書いたりけり。
地「本來虚言とは思へども。文を振うて書いたる。器用を感じ思
し召る。御盃を下さるし。折節御前に磯の禪師が娘に。靜と云
へる白柏子。今様を誦ひつく。御酌よ立ちて花葛。斯かる姿が
類なき。舞の袖。靜「君が代は。千代よ一度ぬる塵の。地「白
雲かゝる山となるまで。山となるまで。變はらぬ契りを頼む

神 天神地祇の意にて上の伊
其 雲の間に住む神の事
府 府守のたぐひを指す。
阿鼻 阿鼻の地獄の名。
身の毛もよだちて 阿鼻の地獄の
白拍子 水干立烏帽子に太刀佩
今様 當時白拍子の誦ひし歌の
名。君と始め見る時は。千代
なり。君と始め見る時は。千代
花葛 舞の袖に花と挿す事
君が代は千代に一度ぬる塵の
白拍子の歌。たまに集まる。月
の山と高まるまでの久しき年
變はらぬ契り。見舞の申進
隔てぬ心は神ぞ知るらん。人
は知らずとも神こそ御存じなら
めとの意。
よく申せ。神の御存じなら
事よく頼朝に申し上げよと
中門の廊。表門と裏門との間に
あると中門と云ふ。其處に附き
たる廊下と云ふ。
白波とよらにや聞かん。白波は
笠原の異名。笠原の入りたる

中の。地「變はらぬ契りを頼む中の。隔てぬ心は神ぞ知るらん。
よくく申せと靜に諫められ。土佐坊御前を罷り歸れば。君も
御寢所に入らせ給へば。各退出申しけり。
ワキ「如何に申し上げ候ふ。唯今土佐が宿所を見せに遣はし候
ふ處よ。幕の内には矢を負ひ弓を張り。兵ども皆武具を。唯
今打つ立つ氣色見えて。更に物詣の氣色は見えぬよ。申し候ふ。
判官「本來覺悟の前なれば。何程の事のあるべきぞ。ワキ「其
まよやがて御座を立ち。靜「靜は着背參らす。地「義經之を召
されつ。御佩刀を取つて靜々と。中門の廊より出て給ひ。門を
開かせ諸共。寄せ來る勢を待ち給ふ。
立衆一應「白波とよらにや聞かんわつみの。深き心はある物を。
シテ「其時正尊駒づくと打ち寄せて。大音上げて名乗るや
う。そもく是は鎌倉殿の御使。土佐坊正尊とは我事なり。九

人は思ふべけれど。深き子細ありての夜討ぞなり。白波の波にて深きを呼ひぬたさん高めに九郎大夫。大夫は五位の奥。御殿めされよ。御初めあれと

とめき叫んで。御初め呼ぶに御合殿する時の聲と云ふ。

虚起請。 爲にて書きたる御殿文

打物。 刀の事。

物其物にあらねども。 費に立つしのならねどの事。

是をば懸せん。 懸るは立合は相手に爲らんとの意。 其意に

郎大夫判官殿の。 討手の大將たまはつたり。 どうく御腹めされよと。 大音上げて呼ばりける。 地味方の勢は之を見て。 あの土佐坊を討ち取らんと。 我もくと進む中に。 江田の源三熊井太郎。 辨慶を先として。 門外一切つて出づれば。 寄手の兵渡り合ひ。 をめき叫んで戦うたり。

「其時辨慶表進み。 如何し土佐坊たかへ聞け。 扱も書きつる虚起請の。 罰を忽ち與ふべし。 いさ一太刀と呼ばれば。 光景詞。 大將討たせて叶はじと。 好む打物ひとつさげて。 辨慶を目懸けてかよりければ。 「天晴器量の仁体かな。 扱汝は誰うと尋ねれば。 「物其物にあらねども。 正尊が内の名を得たる。 陸奥の國の住人よ。 姉和の平次光景なりと。 大音上げて名乗りける。 「買よゆーくも名乗る物かな。 扱は汝は土佐が郎等。 我は不足の者なれども。 志をば報せんと。 「長刀やが

て取り直し。 無慙や汝手に懸けんと。 込む長刀を打ち拂ひ。 受け流せば又取り直し。 ちやうと打てばはつたと合はせ。 重ねて打つに打ち込まれて。 何かはたまらん唐竹破。 二つ一爲つてが失せよける。 正尊これを見るよりも。 むねどの郎等數輩討たせて。 今は叶はじと馬より下り立ち。 亂れ入るを。 義經打物取り直さ給ひ。 隙間を有らせず戦ひ給へば。 靜も諸共に切り拂ひ切り拂ふ。 正尊叶はじと引き立ちけるを。 辨慶追つ詰り戦ひけるが。 押しならべむずと組み。 えいやと投げ伏せ。 大勢取り込め繩うち懸けて。 喜ひ勇み囚人を引かせ。 御門の内に入りに給ふ。

富士太鼓

ふじだいて

元清作

「是は萩原の院に仕へ奉る臣下なり。 扱も内裏し七日の管

込む長刀を 打ち拂ひ。 辨慶がなり。 受け流せば 辨慶が辨和の太刀 又取り直し。 辨和が自分の太刀 につたと合はせ。 辨慶が長刀と 何れか打つに。 辨和が辨和と。 唐竹破。 辨和の名。 眞二つに割 むねどの郎等。 主たる衆衆の

引き立ちけるを 逃げよると

押しならべむずと組み。 えいやと投げ伏せ。 大勢取り込め繩うち懸けて。 喜ひ勇み囚人を引かせ。 御門の内に入りに給ふ。

富士太鼓 元清作 是は萩原の院に仕へ奉る臣下なり。 扱も内裏し七日の管

保三年十一月大嘗會の日。正三位中將藤原時房が御座候。是もならひなき太鼓の上手にて候ふを召し上せられ。太鼓の役を仕り候ふ所。又住吉より富士と申す樂人。是も劣らぬ太鼓の上手にて候ふが。管絃の役を望み罷り上りて候ふ。此由きこめされ。富士淺間何れも面白き名なり。去りながら古き歌に。信濃なる淺間の嶽も燃ゆるといへば。富士の煙のかひや無からんと聞く時は。名ことう上なき富士なりとも。あつばれ淺間はまさうする物をと勅説有りにより。重ねて富士と申す者もあく候ふ。去る程淺間此由を聞き。びくき富士が振舞かなとて。彼宿所にれよせ。あへなく富士を討つて候ふ。まことに不便の次第にて候ふ。定めて富士が縁の無きことは候ふまじ。も尋ね來りて候は。形見を遣はさばやと存じ候ふ。

の國住吉の樂人。富士と申す人の妻や子にて候ふ。扱も内裏七日の管絃のましますにより。天王寺より樂人めされ參る由を聞き。妾が夫も太鼓の役。二人「世に隠れ無ければ。望み申さん其爲め。都へのほり一夜の間の夢。心にかゝる月の雨。身を知る袖の涙かど。明かいかねたる夜もすがら。寐られぬまよ思ひ立つ。雲井やそなた故郷は。跡なれや住吉の。松のひまより詠むれば。月落ちかゝる山城も。はや近づけば笠をぬき。八幡祈り掛帯の。結ぶ契りの夢ならで。うつく逢ふや男山。都よはやく着きよけり。

保三年十一月大嘗會の日。正三位中將藤原時房が御座候。是もならひなき太鼓の上手にて候ふを召し上せられ。太鼓の役を仕り候ふ所。又住吉より富士と申す樂人。是も劣らぬ太鼓の上手にて候ふが。管絃の役を望み罷り上りて候ふ。此由きこめされ。富士淺間何れも面白き名なり。去りながら古き歌に。信濃なる淺間の嶽も燃ゆるといへば。富士の煙のかひや無からんと聞く時は。名ことう上なき富士なりとも。あつばれ淺間はまさうする物をと勅説有りにより。重ねて富士と申す者もあく候ふ。去る程淺間此由を聞き。びくき富士が振舞かなとて。彼宿所にれよせ。あへなく富士を討つて候ふ。まことに不便の次第にて候ふ。定めて富士が縁の無きことは候ふまじ。も尋ね來りて候は。形見を遣はさばやと存じ候ふ。

急ぎ候ふ程に。都に着きて候ふ。此所よて富士の御行方を尋ねばやと存じ候ふ。いか案内申し候ふ。住言「シカク」。是れ富士がゆかりの者にて候ふ。富士に引き合はせられて賜はり候へ。住言「シカク」。住言「シカク」。富士がゆかりと申すは何く

の意にかけたり。

覆れて問は中々に。問ひ返すも却りてあさましの意にかけた。煙とはなりぬらん。死したる事なき勝に。前の歌の詞を用ひたり。なまの意を替ぬ。ひの無きと七人入

行方も知らぬ。すやうも知らぬと云ふ程の意。其人のものさしたし。島甲。樂人の願に書るもの。月日。替はらぬ。出立の月日に持衣。樂人の装束。樂人の装束。無しの意。無しの意。

にあるぞ。シテ「これに候ふ。ソキ」扱是は富士が爲り何よて有るぞ。女「恥づかゝながら妻や子にて候ふ。ソキ」のう富士は討たれて候ふよ。シテ「何と富士は討たれたると候ふや。ソキ」中々の事富士は浅間討たれて候ふ。シテ「さればこゝろ思ひ合はせし夢の占。重ねて問は中々に。浅間討たれ情なく。地「さゝも名高き富士はなど。煙とは爲りぬらん。今は歎くに其かひも。なき跡は残る思ひ子を。見るからよいと猶。すくむ涙はせきあへず。ソキ詞「今は歎きてもかひなき事にて有るぞ。是こゝろ富士が舞の装束候ふよ。夫れ人の嘆きよは。形見は過ぎたる事あらじ。是を見て心を慰め候へ。シテ「今までは行方も知らぬ都人の。妾を田舎の者と思ひ召して。偽り給ふと思ひよ。誠よるき鳥甲。月日も替はらぬ狩衣の。疑ふ所も有らばこゝろ。痛はしや彼人出で給ひし時。みづから申すやう。天王寺の樂人は召して上り

當社地給の。住宮にて挨拶せらる。代率仕せる意。また地久にて永知らぬ顔にて。聞き入れぬと云ふ。

しうこうが手を出だし。水の実を取らんとして苦しむに。へたに涙に。古往にあり。斑の身なりとも。たやすく。さの意。斑は毛のまだらなるを云ふ。

あら恨めしや。是より狂無せし。いざ討たう。敵を討つて太鼓で打つと候たり。筋なき事。條理も分らぬ事の。うたての人の。かたし人の。云ふ程の意。かたし人の。

たり。御身は勸説なきよ。押して参れば下として。上をはかるよ似たるべし。其うへ御身は當社地給の樂人にて。明神に仕へ申すうへは。何の望みの有るべきぞと申しを。知らぬ顔にて出で給ひし。地「其面影は身に添へど。まことの主はなきあとの。忘れがたみぞよなき。かねてより。かく有るべきと思ひなば。しうこうが手を出だし。はんらうが涙にても。止むべき物を今更に。神ならぬ身を恨みかこち。歎くぞあはれなる。歎くぞあはれなりける。

シテ詞「あら恨めしや如何に姫。あれに夫の敵の候ふぞやいざ討たう。姫「あれは太鼓にてこそ候へ。思ひのあまりに御心亂れ。筋なき事を仰せ候ふぞや。あらあさましや候ふ。シテ「うたての人の云ひごとや。あかて別れし我夫の。失せし事も太鼓故。たゞ恨めしきは太鼓なり。夫の敵よいざ打たう。姫「げし理な

男の姿符衣に... 形見の鳥甲持衣... 鼓の甲冑は鳥甲持衣なり... 鼓の甲冑は鳥甲持衣なり... 鼓の甲冑は鳥甲持衣なり...

り父御前に。別れし事も太鼓故。さあらば親の敵ぞか。打ちて恨みを晴らすべし。妾が爲めは夫のかたき。いさやねらはん諸共。男の姿符衣に。ものゝぐなれや鳥甲。恨みの敵討ちをさめ。鼓を答ふ。埋まんとして。寄するや開の撃立て。秋の風より冷ま。討てやくと攻めつ。地「あらさてこりの泣く音やな。地「なほも思へば腹たちや。けいたる姿に引きかへて。心言葉も及ばれぬ。富士が幽霊きたると見えて。よしの恨みや。もどかーと太鼓うちたるや。持たれたる撥をば剣と定め。地「持たれたる撥をば剣と定め。噴毒の焰は太鼓の烽火の。天にあがれば雲の上人。誠の富士れろー絶えずもまれて裾野の櫻。四方へばつと散るかど見えて。花衣さす手も引く手も。伶人の舞なれば太鼓の役は本より聞てゆる。名の下空じからず。たぐひなやな

名の上人... 富士すてに... 名の上人... 富士すてに... 名の上人... 富士すてに... 名の上人... 富士すてに...

つかーや。ロンギ地「げにや女人の悪心は。煩惱の雲晴れて。五常樂を打ち給へ。修羅の太鼓は打ちやみぬ。此君の御いのち。千秋樂と打たうよ。地「さてまた千代や萬代と。民も榮けて安穩に。テ「太平樂を打たうよ。地「日も既傾きぬ。山の端をながめやりて。招きかへす舞の手の。うれーや今こうは。思ふ敵は討ちたれ。打たれて音をや出だすらん。我よは晴る胸の煙。富士が恨みを晴らせば。涙ころ上なかりけれ。地「是までありや人々よ。暇申してさらばと。伶人の姿鳥甲。皆ぬぎすて我心。みだれ笠みだれ髪。斯かる思ひは忘れじと。また立ちかへり太鼓ころ。憂き人の形見なりけれと。見置きてが歸りける。跡見置きてが歸りける。

早く歩みと 川瀬の早きと云ひ
 札 下加茂の社の土地と云ふ。
 みぞろいけ 上加茂の社の東に
 あり。美言呂池。呂池。美言呂池
 など種々に書けり。
 市原野 愛宕郡二瀬村にあり。
 鞍馬 鞍馬寺。鞍馬寺の前の河原
 川。

立つや 髪のだ立つと雲の立つ
 とを嫁の

思ふ中をばさげられし 古今集
 に「天の原ふみささるるかしらるる
 思ふ中をばさげられし」とあるもの
 あり。前記の夫と指す。
 下京 四條通りより下と云ふ。

晴明 一條天皇の時の人。
 陰陽道に通じ鬼神を役使する術
 に達せし人。

候ふぞ。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せにて候ふ。妾が事よては
 有るまじく候ふ。定めて人違よて候ふべし。狂言「いや〜〜か
 どあらたなる御夢想よて候ふ程よ。御身の上よて候ふぞ。かや
 うに申す内よ何とやらん恐ろしく見え給ひて候ふ。急ぎ御歸り
 候へ。シテ「是は不思議の御告か。先々我屋に歸りつく。夢想
 の如く爲るべしと。地「いふより早く色變はり。氣色變じて今ま
 では。美女の形と見えつる。緑の髪は空さまに。立つや黒雲の。
 雨降り風と鳴る神も。思ふ中をば避けられし。恨みの鬼と爲つ
 て。人に思ひ知らせん。憂き人に思ひ知らせん。
 男詞「かやうに候ふ者は。下京邊に住居する者よて候ふ。我此間
 うち續き夢見惡しく候ふ程よ。晴明の許へ立ち越え。夢の様を
 も占はせ申さばやと存じ候ふ。如何に案内申し候ふ。ソキ詞「誰
 よて渡り候ふぞ。男「さん候ふ下京邊の者にて候ふが。此程う

彼者 前妻と指す。

調法 前妻の嫉妬心で毒に調す
 やうに斬る事。

供物 祈る爲めに神に供ふるも
 の。御酒洗米の類と云ふ。

茅の人形 茅の葉にて人間の形と
 作る事。當人の形と被ふ代りに
 人尺 當人の寸尺と云ふ。
 内に籠め 人形の中にうれく

ち續き夢見惡しく候ふ程よ。尋ね申さん爲めに参りて候ふ。
 キ「あら不思議や。考へ申すに及ばず。是は女の恨みを深く蒙り
 たる人よて候ふ。殊よ今夜の内に。御命も危く見え給ひて候ふ。
 若し左様の事にて候ふか。男「さん候ふ何をか隠し申すべき。我
 本妻を離別し。新しき妻を語らひて候ふが。若し左様の事よて
 もや候ふらん。ソキ「實に左様よ見えて候ふ。彼者佛神よ祈敷積
 つて。御命も今夜よ究つて候ふ程に。某が調法よは叶ひがたく
 候ふ。男「是まで参り御目よ懸り候ふ事ころ幸よて候へ。平に
 然るべき様よ御祈念有つて賜はり候へ。ソキ「此上は何ともして
 御命を轉じかへて参らせうするにて候ふ。急いで供物を御調へ
 候へ。

ソキ「いで〜轉じかへんとて。茅の人形を人尺よ作り。夫婦の
 名字を内よ籠め。三重の高棚五色の幣。れの〜供物を調へて。

三名の首をきつて入るなり。五色の帯を置く爲めに。本づく都合五本の帯と作るなり。天の磐座より祈りの詞。みよのまぐはひ。夫婦結ぶる。陰陽の道。男女の道と云ふ。同。山川草木などの精と醜。非業の命を取らん。天然の毒と云う。明王部。降三世明王以下の五大。天童部。四天王大黒天舞財天の。九曜。日月水火土金水の七曜星。二十八宿。北斗の七星と云ふ。七曜。東西南北に合はせて二十八宿と云ふ。合はせて二十八宿と云ふ。風に動かす音。先師の云々。期縁集に斜脚。因縁。昔因には因果と云ふ。因果。水に寄る。水に寄る。

肝膽を碎き祈りけり。謹上再拜。夫れ天開け地固まつより。伊茨諾伊茨册尊。天の磐座より。みよのまぐはひあり。より。男女夫婦のかたらしひをな。陰陽の道ながく傳へる。これ何ぞ魍魎鬼神妨げをな。非業の命を取らんとや。大小の神祇。諸佛菩薩。明王部天童部。九曜七星二十八宿を驚か奉り。祈れば不思議や雨降り風落ち。神鳴り稲妻頻り満ち。御幣もさくめき鳴動して。身の毛よだちて恐ろや。後シテ「夫れ花は斜脚の暖風を開けて。同じく暮春の風に散り。月は東山より出で早く西嶺隠れぬ。世上の無常かくの如し。因果は車輪の廻るが如く。我憂かり人々に。忽ち報いを見すべきなり。戀の身の浮ぶ事なき加茂川に。地「沈みは水の青き鬼。シテ「我は貴船の河瀬の螢火。地「頭蔵く鐵輪の足の。シテ「焰の赤き鬼と爲つて。地「臥したる男の枕に寄り添ひ。如何

色なれば云ひく。三國傳記。ももの。信州に昔阿彌と云ふ。天上へあがりて失せにけり。我は貴船の河瀬の螢火。後遺。船に参り。みたらし川に螢の。和泉式部の歌に「物思へば玉の影を見よとあると云ふ。三本足に火を燭し。之と云ふ。玉椿の八千代。莊子に。古有二。大椿の八千歳。春八千歳。秋。二葉の松。生ひ初めたる小松。詞花集にある和泉式部の歌。人。わろく思ひてせぬ事でも。かき受ける習なるに。まして。理ならしむの意。嘆きと木の文。字に云ひく。故に木を生ふ。しもを振り上げ。または罪人を責め打つ杖。うはなり。後妻と云ふ。宇津の山。打つに重ねて。伊勢物語の「すなる宇津の山邊のうつにも夢にも人に達。はのなりけり」より来る。

殿御よ珍らや。シテ「恨めや御身と契り其時は。玉椿の八千代二葉の松の末かけて。變はらじとこ思ひ。など捨ては果て給らん。あら恨めや捨てられて。地「捨てられて。思ふ思ひの涙と沈み。人を恨み。シテ「夫をかこち。地「ある時は戀く。シテ「又は恨めく。地「起きても寐ても忘れぬ思ひの因果は今と白雪の。消えなん命は今宵。痛は。地「惡いかれど。思はぬ山の峰に。人の歎きは生ふなる。いんや年月。思ひに沈む恨みの數積つて。執心の鬼となるも理や。シテ「いでく命を取らん。地「いでく命を取らんと。もどを振り上げうはなりの。髪を手にからまいて。打つや宇津の山の。夢現ども分かざる憂き世。因果は廻り合ひたり。今更さこつ悔やかるらめ。扱懲りや思ひ知れ。シテ「殊更恨め。地「殊更恨め。あだ男を取つて行かんと。臥したる枕

百五十一

因果は廻り合ひたり。我夫と取
りたる悪因によりて我に打擲せ
られたる悪果に受くるの意。
あだし男。前にある「あだ人」
みて同し。供物を云ふ事もある
三十番神。御幣の事。一月三十日と一日づ
つ持ち分けて守護する神と云
ふ。注。守護の三十三番神の三十番
て色々の種別あれど。この神は
唯神々より来れる事なり。本
あまの御言のうへへの意。本
と送りぬ上に神罰を受くる事
神。神に通じて自在力を得る
事。このには現身ならで夫と後
妻との枕に立ち寄ると云ふ。
足弱車の輪の立ち寄ると云ふ。
目に出たす。受けて廻り合ふと
目に見ぬ鬼。古今集の序に「目に見ぬ鬼神ともあはれと思はせ」とあるを用ふ。こゝには形の消えたるを云ふなり。

立ち寄り見れば。恐ろしや幣帛に。三十番神まゝくして。廻
廻鬼神は穢らはしや。出でよくと責め給ふぞや。腹立や思ふ
夫をば。取らであまさへ神々の。責めを蒙る悪鬼の神通。通力
自在の勢絶えて。力もたよくと足弱車の。廻り合ふべき時節
を待つべしや。先此度は歸るべしと。いふ聲ばかりはさだか
聞こえて。姿は目に見ぬ鬼とぞなりける。目に見えぬ鬼と
なりにけり。

唐船

たうせん

古名

祖慶官人

吉廣作

ワキ詞「かやうは候ふ者は。九州箱崎の何某に候ふ。扱も一年
唐土と日本の船のあらうひあつて。日本の船をば唐土にとどめ
唐土の船をば日本にとどめ置きて候ふ。某も船を一艘とどめ置

唐土の祖慶官人云ふもの。久し
く日本に住み箱崎に居る。日本
たりしに故郷の子どもも尋ね居
て生れし子どもも共々日本に
て生れし子どもも共々日本に
を許して子どもも同行は父の
んとす。親子の情つひに箱崎
目に見ぬ鬼。古今集の序に「目に見ぬ鬼神ともあはれと思はせ」とあるを用ふ。こゝには形の消えたるを云ふなり。

唐土の祖慶官人云ふもの。久し
く日本に住み箱崎に居る。日本
たりしに故郷の子どもも尋ね居
て生れし子どもも共々日本に
て生れし子どもも共々日本に
を許して子どもも同行は父の
んとす。親子の情つひに箱崎
目に見ぬ鬼。古今集の序に「目に見ぬ鬼神ともあはれと思はせ」とあるを用ふ。こゝには形の消えたるを云ふなり。

唐土の祖慶官人云ふもの。久し
く日本に住み箱崎に居る。日本
たりしに故郷の子どもも尋ね居
て生れし子どもも共々日本に
て生れし子どもも共々日本に
を許して子どもも同行は父の
んとす。親子の情つひに箱崎
目に見ぬ鬼。古今集の序に「目に見ぬ鬼神ともあはれと思はせ」とあるを用ふ。こゝには形の消えたるを云ふなり。

きて候ふ。其船に祖慶官人と申す者をとどめ置きて候ふが。は
や十三回一爲り候ふ。某は牛馬をあまた持ちて候ふ程。彼祖
慶官人申しつけ野飼をさせ候ふ。今日も申しつけはやと存じ
候ふ。
唐土二人一唐土船の楫枕。夢路ほどなき名残かな。ソシヤン「是
は唐土明州の津。うんういうと申す兄弟の者なり。二人扱
も我父官人は。一年日本の賊船にとらはれ。昨日今日とハ思
ども。十三回に早なりぬ。餘りに父の戀さ。いまだ此世
ましまさば。今一度對面申さんと。思ひ立つ日を吉日と。船
の纜解き始め。明州河を押し渡り。海漫々と漕ぎ行けば。はや
日の本もほの見えて。心づくの果てもある。忍び妻を松浦
瀉。波路はるか行く程に。名のみ聞き筑紫路や。箱崎に
早く着きけり。

物語 外田せしこ云ふほどの

かゝる業こそ物うけれ。牧畜なごの業を歌ひて云ふ。歌ふ子どもし我のみ天の原。歌ふ子どにも慰めて云ふ。イヤ我身のみには非ず天上にも例ありな

ソキ詞「唐土の人のわたり候ふか。ソソシ詞「是は候ふ。祖慶官人いまだ存生よて。箱崎殿に召し使はれ候ふ由承り候ふ程よ。數の寶は換へつれて歸國仕るべき爲めに。唯今此所に渡りて候ふ。ソキ「さん候ふ祖慶官人は未だ存生よて候ふ。唯今物語とて御出で候ふ。暫くうれに御待ち候へ。御歸り候はと引き逢はせ申し候ふべし。ソソシ「さらば是に待ち申さうするよて候ふ。

シテサ「如何よあれなる童部ども。野飼の牛を集めつく。早々家路に急ぐべし。日本子二人「かゝる業こそ物うけれ。ソテ「よく我のみか天の原。一「七夕の。たどへにも似ぬ身のわきの。三人「牛牽く星の名ぞしるき。子二人「秋咲く花の野飼こそ。三人「老の心のなぐさめなれ。シテ「是は唐土明州の津に。祖慶官人と申す者なり。我はからざるよ日本よ渡り。牛馬をあつかひ草刈笛の。高麗唐土を名にのみ聞きて過ぎし身の。あら古郷戀いや。

箱に高麗唐と云ふあれば。高麗さつたけたり。彼等が事と。又これ日本の子と指す。箱崎の。箱には雲のあるものな老木の枝ひ。老人のたごへ。あれを見よ。牛にも親子の情愛あると見て感ずる詞。我身ながら思なり。二所に隔て物思ふは。我が子とら思ぬの所置よと云ふ意。

華山には云々。書經に華三馬子。華山之陽。故三牛于桃林之野。牛馬の事と名所の事とを語るまでなり。尉が 老人がと云ふに關し。九牛が一毛の。唐土は九牛にて日本は一毛の。わが生國を忘れざる事の一言にも知られておはれなり。そなたたちと云ふ意。

詞「かくて年月を送る程よ二人の子を持つ。又唐土にも二人の子あり。彼等が事を思ふ時は。それも戀しく。又これもいとほしく。一方ならぬ箱崎の。二人の子供なかりせば。老木の枝は雲折れて。此身の果は如何ならん。地「あれを見よ。野飼の牛の聲。子故に物や思ふらん。況んや人倫よ於てをや。我身ながらも思なり。いさや家路よ歸らん。

ソソシ「如何よ父御よ聞こしめせ。扱住み給ふ唐土に。牛馬をば飼ふやらん御物語り候へ。シテ「中々なれや唐土の。華山には馬を放し。桃林よ牛をつなぐ。是れ花の名所なり。子二人「さて唐土と日の本は。いづれまさりの國やらん。委しく語り給へや。シテ「愚なりとよ唐土に。日の本をたどふれば。唯今尉が率いて行く。九牛が一毛よ。子二人「さほど樂む國ならば。痛はじやとこゝ實に。戀しく思ひ召すらめ。シテ「いやとよ方々を。

歸國の事も思はずと。忘れがた
心。生國にも替へて子を受けする
嵐の音の少なきは。話に買ひ入
りて長き松原の響くるとも忘れ
たるさま見る如し。松原の橋立と
共に本朝三松原とて有名なり。
「波あらしき砂干の松のまつら
た島よりつゞく」の中途「な
ごの古歌あり。

今めかしき。今更りきたるの
意。あらたまりたる意。

設けて後は唐衣。歸國の事も思はずと。地「語りなぐさみ行く程
1. 嵐の音の少なきは。松原や末よなりぬらん。箱崎に早く着
きにけり。
ワキ詞「いかに祖慶官人。何とて遅く歸りてゐるぞ。シテ詞「さん
候ふ餘りに多き牛馬にて御座候ふ程に。さて遅く罷り歸りて候
ふ。ワキ「尤にて候ふ。又尋ねべき事の候ふ隠さず申すべきか。
シテ「是は今めかき事を承り候ふ物かな。何事にてもあれ
申し上げうするよて候ふ。ワキ「扱御事は唐土よ二人の子を持ち
てあるか。シテ「さん候ふ子を二人もちて候ふ。ワキ「其名をうん
いそいうと申すか。シテ「あら不思議や。何とて知ろしめされて
候ふぞ左様申し候ふ。ワキ「其うんいう。汝未だ存生の由
を聞き。數の寶に易へつれて歸國すべき爲めに。只今此所よ渡
りて候ふ。シテ「是は思ひもよらぬ事よて候ふ物かな。扱其船は

引き繕ひて 衣服などを直す

わらははな 突に翻れし頃の幼名
と云ふ。

所は箱崎 箱は蓋を明くるもの
なれば夜の明くるに。つけて云
ふ。春宵一尅云々 蘇東坡の詩に。
春宵一尅値千金とあるを引く。

箱崎の神 八幡宮なり。
納受する。孝子の心を受け入れて守
護すると云ふ。

いづくに御座候ふぞ。ワキ「此方へ來り候へ。あれよかよりたる
船ころ。彼兩人の船よて候へ。シテ「實にこれは某が船よて候ふ。
ワキ「さらば對面候へ。シテ「餘りよ見苦しく候ふ程よ。引き繕
ひて賜はり候へ。ワキ「心得申し候ふ。
シテ詞「やあいかよあれなるは唐土にとどめ置きたる二人の者
か。唐土二人「さん候ふ童名うんいうなり。シテ「是は夢かや
夢ならば。唐土二人「所は箱崎。シテ「明けやせん。地「春宵一尅其
價 千金も何ならず。子ほどの寶よもあらじ。唐土は心なき。
はびすの國と聞きつるに。かほどの孝子ありけるよと。日本人
も隨喜せり。尊とや箱崎の。神も納受し給ふか。
シテ詞「如何に申し候ふ。追風がれりて候ふ急ぎ御船よ召され
候へ。シテ詞「いかよ箱崎殿へ申し候ふ。追風がれりて候ふ程に
船に乗れと申し候ふ。御暇申し候ふべし。ワキ「めでたうやがて

由船のならひ 出船の時を急ぐものなれば云ふ。

大和撫子 秋疾く野生の撫子と云ふ。日本子の御。同下種とて 同ト女の子なれば唐紅の色の花はもと外國より渡りしものなれば唐紅と云ふ。撫子の色の花とすなり。うすくもくも唐撫子は花の色に相違なしとの意。同ト女の子ならすやの意。同ト女の子ならすやの意。同ト女の子ならすやの意。同ト女の子ならすやの意。

御歸國候へ。 日本子詞「あら悲しや我等をもつれて御出で候へ。出船のならひとてはた忘れてある方へ来り候へ。」 暫く。 祖慶官人の事は力なき事。 此をさなき者どもは。 此所にて生まれ相續の者にて候ふ程よ。 いつまでも其召し使はうするにてあるが。 此方へ来り候へ。 日本子「あら情なの御事や。 大和撫子の花だよ。 同種とて唐土の。 唐紅よ咲く物を。 うすくもくも花は花。 情なく候へ」と。 唐子「時刻うつりて叶ふまじ。 急ぎ御船よ召されよと。 はや籠を疾く」と。 唐子「呼ぶ子もあれば。 日本子」とりともむる。 唐子「中にとまらる。 唐子」父ひとり。 地「たばきも知らず泣き居たり。 身もがな二つ箱崎の。 恨めしの心づくや。 たと一は親の子を思ふ事。 人倫に限らず。 焼野の雉夜の鶴。 梁の燕も。 皆子故こつ物思へ。」 況んや我らさなきだに。 明日をも知らぬ老の身の。 子故に

何中々に 却りて子のあめならはば懐しくなきの意。

消えん命は。 何中々に惜しからじと。 唐子「今は思へばどにかくに。 船よも乗るまじとまらまじと。 巖よあがりて十念。」 既にうき身を投げんとす。 唐土や日の本の。 子供は左右に取りつきて。 これを如何にと悲おめば。 さすが心もよわくと。 爲り行く事ぞ悲しき。

さすが心よわくと 死なんぞ強りつめたる心願の事。

唯木石は異ならず。 殊更出船の障なれば。 はやく暇とらするが。 とくく歸國を急ぐべし。 唐子「餘りの事の不思議さに。 更に誠と思はれず。 唐子「こはそも何の疑ひぢや。 當社八幡も御知見あれ。 偽り更にあるべからず。 とくく船に乗り給へ。」 唐子「これは誠か。 唐子」中々よ。 地「ありがたの御事や。 誠に諸天納受て。 此子を我等よあたへ給ふかありがたや。 斯くて餘りのうれさよ。 時刻をうつさず暇申して唐人は。 船よとり乗り押し出

唐天 在天の神佛と云ふ程の意。

唐子「呼ぶ子もあれば。 日本子」とりともむる。 唐子「中にとまらる。 唐子」父ひとり。 地「たばきも知らず泣き居たり。 身もがな二つ箱崎の。 恨めしの心づくや。 たと一は親の子を思ふ事。 人倫に限らず。 焼野の雉夜の鶴。 梁の燕も。 皆子故こつ物思へ。」 況んや我らさなきだに。 明日をも知らぬ老の身の。 子故に

波の鼓の音まで舞樂に拍子合はするの意。陸には招くの意。陸には舞樂に乗じつ引くも追風と生ずる舟に吹き行くの意。袖の羽風は舟の羽と擬ふ引きたれは舟の事にも用ふ。是より起りたれは舟の事にも用ふ。舟子と舟人とは舟人の子と

三皇五帝 神皇。黃帝の三時。五帝と云ふ。少昊。顓頊。帝。舜。禹の五代と云ふ。共に天下を平に治るの御心は海の如くなり。法華經の御心に其心安し海とある。西王母と云ふ。仙女大上より降り来るとは。三千歳の桃實と君に捧ぐ。事を作り。其所は漢武内傳に。王母降七宮。大如三皇。玉童。二。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。百。

北辰の共す。論語に如下辰居其所而衆星共之とある。用ふは如く。群臣萬民の衆主に向ひて仕ふるの意。千戸萬戸。無敵の人家と云ふ。旗と表す。無敵の人家と云ふ。銜を横たへ。武器を横にして用ひさる。四方の門邊に。總を羅ひて朝廷に。金銀珠玉。百献のたむき。日夜の勝負。日の差別に同喜見城。いと光の盛なれば云ふ。桃李物いはず。史記李廣傳とある。桃李不言。下自成蹊。陰とば人々慕ひよりに。其木と作りたるの意。こゝには道をたり。替へて群衆するに用ひ。真如の花の色香。靈山の花なり。下の文に於注の三字を隠して。三つを指す。すなはち妙法華の三心。花やかなる心の意。花心へらぎ。天子と云ふ。徳のひまなく及ぶ意。起す。この語の出所は靈野に云。靈山會場。釋迦如來の説法せし

だす。悦びの餘りよや。樂を奏し舟子ども。棹のさす手も舞の袖をりから波の鼓の。舞樂よつれて面白や。陸は舞樂に乗じつ。名残れして海面遠く。ぬりゆくまよ。招くも追風。船には舞の。袖の羽風も追風とやららん。帆を引きつれて舟子どもは。悦び勇みて。唐土さして急ぎける。

西王母

せいわうぼ

元清作

「有りがたや三皇五帝の昔より。今此御代に至るまで。かゝる聖主のためにはな。地其御威光は日の如く。其御心は海の如く。地豊に廣き御恵。天に輝き地に満ちて。北辰の共する數々の。萬天に廻る星の如く。百官卿相雲客や。千戸萬戸の旗を靡かし銜を横たへ。四方の門邊にむらがりて市をな。金銀珠玉光りを交じへ。光明赫奕として。日夜の

勝負見せりけり。かゝるためは喜見城。其樂のみも如何ならん。シテツレ一聲「桃李物いはず。下れのづから市をな。貴賤交はりひまもなし。シテサシ「れもろや四季折々の時を得て。草木國土れのづから。二人皆是れ真如の花の色香。妙なる法の三つの心。潤ふ時や至りけん。三千年に咲く花心の。をり知る春のかざりとかや。歌「いさや君は捧げん。いさゝく君は捧げん。すべらぎの。其御心は普くて。隙行く駒の法の道。千里の外まで上もなき。道に至りて明らかき。靈山會場の法の場。廣き教の真ある。君々たれば誰とても。いさみある世の心かな。

シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候ふ。奏聞とは如何なる者ぞ。シテ「是は三千年の花咲き實なる桃花なるが。今此御代に至り花咲く事。たゞ此君の御威徳なれば。仰ぎて捧げ参らせ候

地云ふ。廣き故の武ある。西王母の一名。君々たれば。君は君徳を備へた。うれさも今は物いはず。桃李不三年に於て。桃の今年より花さく春にあひける。拾遺集の歌。

心な置きそ。疑心を置くなまふ。ふと露の文字に於て云ふ。うつろふものは云々。古今集に「色見にて移るふものは世の中のあるを用ふ。」

分身 天上の身と分けて人間界に現下來ると云ふ。

ふ。ウキ「うも三千年は花咲くとは。如何さま是は聞き及びし。其西王母が園の桃か。シテ「中々よそれとも今は物いはず。ウキ「さればこうそれぞ殊更名よれふ花の。シテ「桃李物いはず。ウキ「春いくばくの年月を。シテ「送り迎へて。ウキ「此春は。地「三千年。なるてふ桃の今年より。花咲く春よあふ事も。唯是れ君の四方の恵。あつき國土の千々の種。桃花の色ぞ妙なる。ロンギ地「扱は不思議や久堅の。天つ少女の目のあたり。姿を見るぞ不思議なる。シテ「疑ひの。心な置き露の間。宿るか袖の月の影。雲の上まで其恵。昔き色にうつりきぬ。地「うつろふ物は世の中の。人の心の花ならぬ。シテ「身は天上の。地「樂しみ。明けぬ暮れぬと送り迎ふ。年は経れど限りもなき。身の程も隔なく。誠は我こそ西王母の。分身よまづ歸りて。花の實をもあらはさんと。天にぞ上りける。天にぞ上り給ひける。

糸竹呂律 音楽の事。くはしくは経路を見るべし。天つ風云々。古今集に「天つ風雲の吹よむ吹きさちよ少女の姿しよめんさあると用ふ。本歌は五節の舞姫と見てよめる歌なり。理王 仙人の名。孔雀 鳳凰の類。天の衣 鳥の翼と見立てて云ふ。

眞纒 或は長纏にや。纏は冠の玉。玉は玉盤に下りたるもの。取らば玉盤に作るさかづき。花の盃 花を浮べて飲む盃。夫木抄家の歌に「めぐりくる三月も久し三千年に於てふ桃の花の盃。なごあり。取るや直に酔ふの意。手まづさへぎる。手と出して盃と遮り取る事。委しくは安宅の山水の宴。三月上巳の日に行はるる内裏の御遊。公卿文人ども水の岸に並み居て。水上より盃

ワキ歌「糸竹呂律の聲や。いらべをなして音楽の。聲すみ渡る天つ風。雲の通ひ路心せよ。地「れもいろや。かゝる天仙理王の。來臨なれば數々の。孔雀鳳凰。飛ひ廻り聲や。立ち舞ふや袖の羽風。天つ空の衣ならん。天の衣なるらん。シテ「いろくの捧げもの。地「いろいろの捧げ物の。中に妙に見はたるは。西王母の其姿。ひかり庭宇をかゝやか。黄錦の御衣を着し。シテ「劍を腰に提げ。地「劍を腰に提げ。眞纒の冠を着。玉觴に盛れる桃を。侍女が手より取りかはし。シテ「君に捧ぐる桃實の。地「花の盃取りあへず。花も酔へるや盃の。手まづさへぎる曲水の宴かや。みかはの水。戯むれ戯むる。手弱女の。袖も裳裾もたなひきたなひく。雲の花鳥春風。和つく。雲路に移れば王母も伴なひよち上る。王母も伴なひ上るや天路の。ゆくへも知らずなりける。

みと流して。我前と過ぎざる先に時と作りて。その蓋と取りて飲みけるなり。さ公事根原に見ゆ。
たつめ 美人の事。 雲に花鳥の撲と織りたる衣云ふ。それと前の孔雀以下の鳥に云ひかけて。雲路にうつるを覆けたり。

巴 ともる

信光作

巴の國を述べて。義仲討死のま
まを語りせたる作なり。
行けば深山も。行きて見れば深
あさも深きものなりとの意。
り。とつして木曾の枕詞に用ひた

木曾 信濃の國筑摩郡。

美濃尾張 身の終に、けて云
定めぬ宿 旅宿の事と云ふ。
延の書 延延の異名。

粟津 湖水の東岸にあり。すな
神と祝ふや政事 神と祭る。政
の聖代なれば神威も頼もしきと

ワキ次第 「行けば深山もあさもよい。木曾路の旅に出でうよ。 詞
「是は木曾の山家より出でたる僧にて候ふ。我いまだ都を見ず
候ふ程よ。此度思ひ立ち都より上り候ふ。 道行 「族衣。木曾の御坂
を遙々と。思ひ立つ日も美濃尾張。定めぬ宿の暮ごと。夜を
重ねつゝ日を添へて。行けば程なく近江路や。鳩の海とは是か
とよ。 詞 「急ぎ候ふ程に。江州粟津の原とやらんに着きて候ふ。
此所に暫く休らはばやと思ひ候ふ。
シテサシ 「れもいろや鳩の浦波一づかなる。 粟津の原の松陰よ。
神を祝ふや政事。 實は神威も頼も一や。 ワキ詞 「不思議やな是な

なり。

行教和尚 京都大安寺の僧。清
和天皇の時の人なり。清
宇佐八幡 豊前國宇佐郡にあ

御影とつし 神の御影とつ
男山 山城の國國守郡。
入ひて示し給ひ 人民を守護せ
都に近き住居とて 近江はます
古事と心得たるよと感して云

御身の住み給ふ 木曾の文字に
かけて云ふ。

る女性の神に参り。涙を流し給ふ事。返すぐも不審にこう候
へ。シテ「御僧は自らが事を仰せ候ふか。ワキ「さん候ふ神に参り
涙を流し給ふ事を不審申して候ふ。シテ「れろかと不審し給ふ
や。傳へ聞く行教和尚は。守佐八幡よ詣で給ひ一首の歌よ曰く。
何事のれはしますとは知らねども。 詞 「忝なさに涙こぼるよと。
かやうよ詠じ給ひ一かば。神もあはれと思ひめされけん。御
衣の袂に御影をうつし。それより都男山よ誓ひを示し給ひ。國
土安全を守り給ふ。れろかと不審し給ふぞや。ワキ「やさーやな
女性なれども此里の。都に近き住居とて。名にこれひたるやと
一とよ。シテ詞「扱々御僧の住み給ふ。在所は何處の國やらん。
ワキ「是は信濃の國木曾の山家の者よ候ふ。シテ「木曾の山家の
人ならば。粟津の原の神の御名を。問はずは如何で知り給ふべ
き。是こころ御身の住み給ふ。木曾義仲の御在所。同じく神と祝

同く神と合記の神と共の
意。この社は粟津の神と云ふに
や。又は義仲の義仲と云ふに
にや。

名は今も。今も理りて有りとの
意に云ひ。今も理りて有りとの

五衰。義仲の住に委しく云へ
り。今も理りて有りとの意に云ひ。
意に云ひ。今も理りて有りとの
意に云ひ。今も理りて有りとの
意に云ひ。今も理りて有りとの

はつひ。ほのかに同す。草の葉
たり。頃は義仲の墓を指すなら
ん。

いたして。序曲に置く事。

はれ給ふ。拜み給へや旅人よ。ッキ「不思議や扱は義仲の。神と
あらはれ此所よ。いま給ふは有り難さよと。神前に向ひ手を
合はせ。地「古への。是こ君よ名は今も。有明月の義仲の。佛
と現じ神となり。世を守り給へる。誓ひ有難かりける。旅
人も一樹の陰。他生の縁とればしめし。此松が根に旅居し。夜
もすがら経を讀誦して。五衰をふくさめ給ふべし。有り難き値
遇かな。實は有り難き値遇かな。さる程暮れて行く日も山の
端に。入相の鐘の音の。浦わの波に響きつ。いづれも物すこ
さざりふ。我も亡者の来りたり。其名をいづれとも。知ら
ずは此里人よ。問はせ給へと夕暮の。草のはつかに入りよけ
り。
ワキ歌「露をかたしく草枕。日も暮れ夜にもなりかば。粟津が原
のあはれ世の。亡き影いさや吊らはん。

落花空しきを知る。落花と見て
流水心なうしてのづから。澄める
心はたらちねの。地「罪も報いも因果の苦しみ。今は浮かまん御
法の功力よ。草木国土も成佛なれば。況んや生ある直道の吊ら
ひ。彼是いづれも頼もや。あら有り難や。
ッキ「不思議や粟津が原の草枕を。見れば有りつる女性なる
が。甲冑を帯する不思議さよ。シテ詞「なかくよ巴と云ひ女
武者。女とて御最期よ。召しぐせざりし其恨み。ッキ「執心のこ
つて今までも。シテ「君邊に仕へ申せども。ッキ「恨みはなほも。
シテ「荒磯海の。地「粟津の汀にて。波の討死するまでも。御供申
すべかりしを。女とて御最期よ。捨てられ参らせし恨めしや。
身は恩のため。命は義よる理。誰か白真弓取の身の。最期に
臨んで。功名を惜しめぬ者やある。
ッキ「扱も義仲の。信濃を出てさせ給ひしは。五萬餘騎の御勢。

召しぐせざりし。召しつれば
君邊に仕へ申せども。異論にて
の事と云ふ。

身は恩のため命は義による
命は恩のため命は義による
命は恩のため命は義による
命は恩のため命は義による
命は恩のため命は義による

後シテ「落花空しきを知る。流水心なうしてれのづから。澄める
心はたらちねの。地「罪も報いも因果の苦しみ。今は浮かまん御
法の功力よ。草木国土も成佛なれば。況んや生ある直道の吊ら
ひ。彼是いづれも頼もや。あら有り難や。
ッキ「不思議や粟津が原の草枕を。見れば有りつる女性なる
が。甲冑を帯する不思議さよ。シテ詞「なかくよ巴と云ひ女
武者。女とて御最期よ。召しぐせざりし其恨み。ッキ「執心のこ
つて今までも。シテ「君邊に仕へ申せども。ッキ「恨みはなほも。
シテ「荒磯海の。地「粟津の汀にて。波の討死するまでも。御供申
すべかりしを。女とて御最期よ。捨てられ参らせし恨めしや。
身は恩のため。命は義よる理。誰か白真弓取の身の。最期に
臨んで。功名を惜しめぬ者やある。
ッキ「扱も義仲の。信濃を出てさせ給ひしは。五萬餘騎の御勢。

四年に始めて兵を擧げたる時
 本。つげみ 馬の轡の事。
 磯波山 加賀越前の堺にあり。
 養和二年 維盛通盛等と戦ひしこ
 俱利伽羅 磯波山の南の谷。平
 家の軍勢と隔れてみなとろしに
 志保の合戦 志保の山合戦と云
 の堺にあり。惟盛等の陣取りし
 る。先と越され 振舞の無きと亡
 なき世の事と云ふ。
 「名」とし思ふ 名を惜しく思ふ
 の意と云ふ。
 「名」とし思ふ 名を惜しく思ふ
 の意と云ふ。
 「名」とし思ふ 名を惜しく思ふ
 の意と云ふ。

鏑をならべ攻め上る。磯波山や俱利伽羅。志保の合戦に於ても。
 分捕高名の其数。誰に面を越され。誰にれとる振舞の。なき世
 がたりに名ををい思ふ心かな。シテ「されども時刻の到来。地」運
 槻弓の引く方も。渚に寄する粟津野の。草の露霜と消え給ふ。
 所はこゝろ御僧達。同所の人なれば。順縁に吊はせ給へや。
 ロンギ地「さて此原の合戦にて。討たれ給ひ一義仲の。最期を語
 りればいませ。テ「頃は正月の空なれば。地」雪はむら消えい残
 るを。たゞ通ひ路と打をさして。駒をさるべに落ち給ふが。薄
 氷の深田に駈け込み。弓手も馬手も鏝は沈んで。たりたよん
 便りもなく。手綱はすがつて鞭をうてども。引く方もなごご
 の瀆あり。前後を忘れてひかへ給へり。こは如何にあさましや。
 かより一處に。自ら駈けよせて見奉れば。重手はれひ給ひぬ。
 乗替よ召させ参らせ。此松原に御供い。はや御自害候へ。巴も

自ら 駈けよせて 巴がけ
 乗替に召させ参らせ 彼の馬に
 此松原 現に備に招いて候ふ。
 巴も共々 妾も共に自害せん
 是なる守り小袖を 南守り小
 袖と云ふ。 過去現在未來の縁と
 三本の契 過去現在未來の縁と
 云ふ。 巴はさしおくれも。さかく答ふる
 言葉なしとの意。

引きうばめ 長刀を備によせて
 退くまゝと示す事。
 木の葉返して 長刀の手の名。
 嵐も落つるや云々。 わざの早き
 枕をたいて 枕を並べて敵の
 跡を遙に 切り立てられて敵の
 跡も遙に見えざりけり。

共と申せば。其時義仲の仰せよは。汝は女なり。忍ぶ便りも有
 るべ。是なる守り小袖を。木曾に届けよ此旨を。背かは主従。
 三世の契り絶へはて。永く不興とのたまへば。巴はともかくも。
 涙にむせぶばかりなり。
 地「かくて御前を立ち上り。見れば敵の大勢。あれは巴か女武
 者。あますなもらすなど。敵手いげくかよれば。今は引くとも
 遁るまじ。いで一軍うれやと。巴少しもさわがず。わざと敵
 を近くなさんと。長刀引きそばめ。少い恐るよけいなれば。
 敵は得たりと切つて懸ければ。長刀柄ながくれつ取りのべて。
 四方を拂ふ八方拂ひ。一所に當るを木の葉返る。嵐も落つるや
 花の瀧波。枕をたいて戦ひければ。皆一方よ切り立てられて。
 跡も遙に見えざりけり。
 シテ「今は是までなりと。地「立ち歸り我君を。見奉れば痛はいや。

あらぬの 遇例なみの杜若を
して見居たる故に云ふ。

伊勢物語 作者詳ならず。業平
の自記なりと云ふ。
蜘蛛の手 蜘蛛の手は八本ある故
にして流の八つに分れたるを見な
句の上に於きて 蜘蛛は五つ
の頭より成り立ちたる。其毎句
の頭字に置くと云ふ。すなはち
からなるも(一)の句(キ)つ(な)れ
に(二)の句(ツ)ま(し)あ(れ)ば(三)
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五)の句(ハ)ら
ん(六)の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(二十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(三十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(四十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(五十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(六十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(七十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(八十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十一)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十二)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十三)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十四)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十五)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十六)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十七)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十八)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(九十九)の句
の句(ハ)ら(ん)き(め)る(百)の句

旅人やな。 「誠は三河の國八橋の杜若は。 古歌よもよまれ
けるとなり。 何れの歌人の言の葉やらん承りたくこう候へ。

「伊勢物語よいはく。 こゝを八橋といひけるは。 水行く河の
蜘蛛手なれば。 橋を八つ渡せるなり。 其澤は杜若のいと面白く
咲き亂れたるを。 ある人かきつばたと云ふ五文字を句の上置
きて。 旅の心をよめと云ひければ。 からゑろも着つゝなれに
妻いあれば。 はるく來ぬる旅さへ思ふ。 これ在原の業平の。
此杜若をよみ歌なり。 「あら面白や扱は此。 東のはての國
國までも。 業平は下り給ひけるか。 「こと新いき間事かな。
此八橋のここのみか。 猶も心の奥ふかき。 名所々の道すが
ら。 「國々ところは多けれども。 取りわき心の末かけて。
「思ひわたりの八橋の。 「三河の澤の杜若。 「はるく
きぬる旅さへぞ。 「思ひの色を世に残して。 「主は昔業

今こゝに 著る云ひ。

くしてにものぞ 讀古今集に
「河はよきなれる三河の八つは
な」さあると云ふ。 千々に云
ふほどに。 直に就しくな
りて云ふ。 右の歌の「きつゝ
願にしの」の詞にかけて云ふ。

冠の。 冠と着る時頭にかぶるも
唐衣。 女の上着の上に着る體

透額。 十六歳未滿の人は額に六
七分の穴明けたる冠を着る。之
高子の后。 清和天皇の皇后。二
條の后と稱す。貞觀元年十八歳
にて五節の舞姫と定めたる事
あり。
豐の明。 豐明節會にて。 毎年十
一月中の辰の日に内裏にて行は
る。儀式。 裳を官に賜はる事
なり。
五節。 豐明の夜に舞姫の舞をま
先々定めたり。之と云ふ。
先々たきぬ。 其話はしばらく中止し

平なれども。 「かたみの花は。 今こゝよ。 地在原の。 あ
どな隔てそ杜若。 澤邊の水の淺からず。 契り一人も八橋の。 く
もては物ぞ思はる。 今とても旅人よ。 昔を語る今日の暮。 や
がて馴れぬる心かな。

「見ぐるく候へども。 わらはが庵にて一夜を御明か候へ。 「
「あらうれややがて参り候ふべ。 「のうく此冠唐衣
御覽候へ。 「不思議や賤き賤の臥處より。 色もかやく
衣を着。 透額の冠を着。 これ見よと承る。 こはろも如何なる
事よて候ふぞ。 「是ここの此歌よよまれたる唐衣。 高子の后の
御衣よて候へ。 又此冠は業平の。 豐の明の五節の舞の冠なれば。
かたみの冠唐衣。 身に添へ持ちて候ふなり。 「冠からきぬは
先々置きぬ。 扱々御身は如何なる人ぞ。 「誠は我は杜若の精

植ゑたき昔の宿の杜若と。よみも女の杜若に。なり
 一謂の言葉なり。又業平は極樂の。歌舞の菩薩の化現あれば。
 よみれく和歌の言の葉までも。皆法身説法の妙文なれば。草木
 までも露の惠の。佛果の縁を吊らふなり。ウキ「是は末世の奇特
 かな。正しき非情の草木よ。言葉をかはす法の聲。シテ「佛事を
 なすや業平の。昔男の舞の姿。ウキ「是が即ち歌舞の菩薩の。
 テ「かりに衆生と業平の。ウキ「本地寂光の都を出でよ。シテ「昔
 く濟度。ウキ「利生の。シテ「道よ。地「はるくきぬる唐ころも。
 着つゝや舞を奏づらん。シテ「別れて一跡の恨みの唐衣。地「袖を
 都に歸さばや。

シテ「抑此物語は。如何なる人の何事によつて。思ひの露の忍ぶ
 山。忍びて通ふ道芝の。始めもなく終りもなし。シテ「昔男
 初冠して奈良の京。春日の里よあるよゝゑて狩よいけり。地

ての意。植ゑたき昔の宿の杜若と。よみも女の杜若に。なり
 一謂の言葉なり。又業平は極樂の。歌舞の菩薩の化現あれば。
 よみれく和歌の言の葉までも。皆法身説法の妙文なれば。草木
 までも露の惠の。佛果の縁を吊らふなり。ウキ「是は末世の奇特
 かな。正しき非情の草木よ。言葉をかはす法の聲。シテ「佛事を
 なすや業平の。昔男の舞の姿。ウキ「是が即ち歌舞の菩薩の。
 テ「かりに衆生と業平の。ウキ「本地寂光の都を出でよ。シテ「昔
 く濟度。ウキ「利生の。シテ「道よ。地「はるくきぬる唐ころも。
 着つゝや舞を奏づらん。シテ「別れて一跡の恨みの唐衣。地「袖を
 都に歸さばや。

「仁明天皇の御宇かどよ。いともかゝりてき勅をうけて。大内山の
 春がすみ。立つや彌生の初めつかた。春日の祭の勅使として。
 透額の冠を許さる。シテ「君の惠の深き故。地「殿上にての元服の
 事。當時其例稀なる故よ。初冠とは申すとかや。ウキ「然れども
 世の中の。一度は榮え。一度は衰ふる理の。誠なりける身の
 ゆくへ。住所求むとて。東の方に行く雲の。伊勢や尾張の海面
 に立つ波を見て。いとくく過ぎに一方の戀きき。羨ましく
 ものへる浪かななど。うち詠めゆけば信濃なる。淺間の嶽あれや。
 くゆる烟の夕気色。シテ「扱こそ信濃なる。淺間の嶽よ立つ烟。
 地「遠近人の。見やはとがめぬと口ずさび。猶はるくの旅衣。
 三河の國に着きかば。こゝろ名よある八橋の。澤邊よ匂ふ杜
 若。花紫のゆかりなれば。妻もあるやと。思ひが出づる都人。
 然るよ此物語。其品れほき事ながら。とりわき此八橋や。三河

仕するところを云ふ。ことに昇
 殿と許されたりと云ふ。粟平
 十六歳和十四年三月十一日仁
 明天皇の内裏にて元服す。さ伊
 勢古語にあり。初めて内裏にて元服
 せし例のやうに云ひなしたるな
 り。
 一度は榮え。粟平の寵を得し時
 代を云ふ。
 一度は榮ふる。粟平も世をわび
 て立立せし時節と云ふ。伊勢物語
 に「むい、男ありけり。ちの男
 とえうなきものと思ひなして、
 京には居らね東の方に住むべき
 さころ求めにきて行きけり。」と
 あり。
 伊勢や尾張の云々。同書に「伊
 勢のいさ白く立つて見ると、
 雲を以て「いとましく」の歌と出
 だせり。
 いさしく云々。波のいへるさ
 云ふと我身は都に歸る事にか
 けて、
 信濃なる國の歌に云々。詞書
 は「信濃の國の歌に、
 つ「見」て」とあり。唯、
 「道方人の」とあり。唯、
 「道方人の」とあり。唯、
 不審に思ふは、何ぞと、
 云ふに依りて、粟とゆかりの色と
 此物語を指す。
 其品はほき。全百二十五段に

の水の底ひなく。契り人々のかずくに。名をか一品をかへて。
 人待つ女物やみ玉すだれの。光りも亂れて飛ぶ螢の。雲の上ま
 でいぬべくは。秋風吹くと假しあらはれ。衆生濟度の我ずとは。
 知るや否や世の人の。暗き一行かぬ有明の。地「光り普き
 月やあらぬ。春やむかしの春ならぬ。我身ひとつはもとの身
 にして。本覺真如の身を分け。陰陽の神と云はれしも。唯業平
 の事ぞか。かやうに申す物がたり。疑はせ給ふな旅人。遙々
 來ぬる唐衣。着つくや舞をかなづらん。
 シテ「花前に蝶まふ紛々たる雪。地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金。
 「植ゑ置き。昔の宿のかきつばた。地「色ばかりこそ昔なり
 けれ。色ばかりこそ。むかひ男の名をとめて。花たちはな
 の匂ひうつる。菖蒲のかづらの。地「色はいづれ。似たりや似た
 り杜若花菖蒲。梢は鳴くは。地「蟬の唐衣の。地「袖白妙の卵の

分けて一物々々の物語なれば云
 云ひなく。粟平の寵を得し時
 代を云ふ。
 一度は榮ふる。粟平も世をわび
 て立立せし時節と云ふ。伊勢物語
 に「むい、男ありけり。ちの男
 とえうなきものと思ひなして、
 京には居らね東の方に住むべき
 さころ求めにきて行きけり。」と
 あり。
 伊勢や尾張の云々。同書に「伊
 勢のいさ白く立つて見ると、
 雲を以て「いとましく」の歌と出
 だせり。
 いさしく云々。波のいへるさ
 云ふと我身は都に歸る事にか
 けて、
 信濃なる國の歌に云々。詞書
 は「信濃の國の歌に、
 つ「見」て」とあり。唯、
 「道方人の」とあり。唯、
 「道方人の」とあり。唯、
 不審に思ふは、何ぞと、
 云ふに依りて、粟とゆかりの色と
 此物語を指す。
 其品はほき。全百二十五段に

花の雪の。夜もあらくと明くる東雲の。浅紫の杜若の。花も
 悟りの心開けて。すはや今こそ草木國土。悉皆成佛の。御法を
 得てこそ失せにけれ。

花の雪の。夜もあらくと明くる東雲の。浅紫の杜若の。花も
 悟りの心開けて。すはや今こそ草木國土。悉皆成佛の。御法を
 得てこそ失せにけれ。

花の色の名を... 大層正解の歌に... 夜も明けたれば花の... 失せにけれ

藤戸 佐々木盛綱
佐々木盛綱
佐々木盛綱

佐々木盛綱... 藤戸の渡りなるらん... 是は佐々木... 三郎盛綱にて候ふ... 扱も今度藤戸の先陣を仕り御恩賞よ... 兒島を賜はつて候ふ... 今日日もよく候ふ程よ... 唯今入部仕り候ふ... 道行「秋津洲の... 波静なる島廻り... 松吹く風も長閑にて... 買よ春めける朝ほらけ... 船も道ある浦づたひ... 藤戸に早く着きよけり... 詞「如何よ誰かある... トモ「御前に候ふ... ヲキ「皆々訴訟あらんずる者は罷り出でよと申し候へ... トモ「畏つて候ふ... 如何よ皆々たうかに聞き候へ... 此浦の御主佐々木殿の御入部よて有るが... 何事も訴訟あらん者は罷り出でく申し候へ... シテ一「老の波... 越えて藤戸の明暮よ... 昔の春の歸れか... ヲキ

藤戸

ふちと

元清作

「不思議やな是なる女の... 訴訟ありげに某を見てさめくと泣くは何事にてあるぞ... ヲキ「海士の刈る藻に住む虫の我からと... 音をこら泣かめ世をば買よ... 何か恨みん本来も... 因果の廻る小車の... 彌猛の人の罪科は... 皆報いざといひながら... 我子ながらも餘り買よ... 科も例も波の底よ... 沈め給ひ御情なさ... 申すよつけて便なけれども... 御前よ参りて候ふなり... ヲキ「何と我子を波に沈め給ひ事候ふ... ヲキ「あく音高し何とく... シテ「のう猶も人は知らじどのう... 中々に其有様を顯はして... 跡をも吊らひ又は世よ... 生き残りたる母が身をも... 訪ひ慰めて給ひ給は... 少しは恨みも晴るべきよ... 地「いつまでとてか忍ぶ山... 忍ぶかひなき世の人の... あつかひ草も茂き物を... 何と隠し給ふらん... 住み果てぬ... 此世は假の宿なるを... 親子とて何やらん... 幻に生まれ来て...

藤戸の渡りなるらん... 是は佐々木... 三郎盛綱にて候ふ... 扱も今度藤戸の先陣を仕り御恩賞よ... 兒島を賜はつて候ふ... 今日日もよく候ふ程よ... 唯今入部仕り候ふ... 道行「秋津洲の... 波静なる島廻り... 松吹く風も長閑にて... 買よ春めける朝ほらけ... 船も道ある浦づたひ... 藤戸に早く着きよけり... 詞「如何よ誰かある... トモ「御前に候ふ... ヲキ「皆々訴訟あらんずる者は罷り出でよと申し候へ... トモ「畏つて候ふ... 如何よ皆々たうかに聞き候へ... 此浦の御主佐々木殿の御入部よて有るが... 何事も訴訟あらん者は罷り出でく申し候へ... シテ一「老の波... 越えて藤戸の明暮よ... 昔の春の歸れか... ヲキ

「不思議やな是なる女の... 訴訟ありげに某を見てさめくと泣くは何事にてあるぞ... ヲキ「海士の刈る藻に住む虫の我からと... 音をこら泣かめ世をば買よ... 何か恨みん本来も... 因果の廻る小車の... 彌猛の人の罪科は... 皆報いざといひながら... 我子ながらも餘り買よ... 科も例も波の底よ... 沈め給ひ御情なさ... 申すよつけて便なけれども... 御前よ参りて候ふなり... ヲキ「何と我子を波に沈め給ひ事候ふ... ヲキ「あく音高し何とく... シテ「のう猶も人は知らじどのう... 中々に其有様を顯はして... 跡をも吊らひ又は世よ... 生き残りたる母が身をも... 訪ひ慰めて給ひ給は... 少しは恨みも晴るべきよ... 地「いつまでとてか忍ぶ山... 忍ぶかひなき世の人の... あつかひ草も茂き物を... 何と隠し給ふらん... 住み果てぬ... 此世は假の宿なるを... 親子とて何やらん... 幻に生まれ来て...

あつたれば誠に驚き止りめす
いつまでかいつまで人に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に
忍び山を登りていふ山に

別るれば悲しみの。思ひは世々を引く。きづなと爲つて苦しみ
の。海は沈め給ひしを。せめては訪はせ給へや。跡吊らはせ給
へや。
「言語道断。かゝる不便なる事ころ候はね。今は何をか包
むべき。其時の有様語つて聞かせ候ふべし。近う寄つて聞き候
へ。扱も去年三月廿五日の夜に入りて。浦の男を一人近づけ。
此海を馬にて渡すべき所やあると尋ねし。彼者申すやう。さ
ん候ふ河瀬の様なる所の候ふ。月頭には東よりあり。月の末には
西にあると申す。即ち八幡大菩薩の御告と思ひ。家の子若黨に
も深く隠し。彼者と唯二人夜にまさき忍び出で。此海の浅みを
見置きて歸りしが。盛綱心に思ふやう。いやしく下郎は筋なき
者にて。又もや人に語らんと思ひ。不便には存じよかども。取
つて引き寄せ二刀さし。其まゝ海に沈めて歸りしが。扱は汝が

心はひ海に沈め給ひしを。せめては訪はせ給へや。跡吊らはせ給
へや。
「言語道断。かゝる不便なる事ころ候はね。今は何をか包
むべき。其時の有様語つて聞かせ候ふべし。近う寄つて聞き候
へ。扱も去年三月廿五日の夜に入りて。浦の男を一人近づけ。
此海を馬にて渡すべき所やあると尋ねし。彼者申すやう。さ
ん候ふ河瀬の様なる所の候ふ。月頭には東よりあり。月の末には
西にあると申す。即ち八幡大菩薩の御告と思ひ。家の子若黨に
も深く隠し。彼者と唯二人夜にまさき忍び出で。此海の浅みを
見置きて歸りしが。盛綱心に思ふやう。いやしく下郎は筋なき
者にて。又もや人に語らんと思ひ。不便には存じよかども。取
つて引き寄せ二刀さし。其まゝ海に沈めて歸りしが。扱は汝が

子にてありけるよな。よーく何事も前世の事と思ひ。今は恨
みを晴れ候へ。扱のう我子を沈め給ひし。在所は取り別
き何處の程にて候ふぞ。あれ！見えたる浮洲の岩の。少し
此方の水の深みよ。死骸を深く隠しよなり。扱は人の申
しも。少しも違はさりけり。あの邊ぞと夕波の。夜の事よ
て有り程に。人は知らじと思ひ。やがて隠れはなき
跡を。深く隠すと思へども。好事門を出でず。悪事
千里を行けども。子をば忘れぬ親なるに。失はれ参らせし。子
はうも何の報いぞ。
「買よや人の親の。心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふ
とは。今こそ思ひ知られたれ。本来も定めなき。世の理はまの
あたり。老少不定の境なれば。若きを先立てく。つれなく残る
老鶴の。眠りの内なれや。夢ぞが思ふ親と子の。二十餘りの年

此歌の次第 曲舞の始めの文句
 年頃色には出ださせ給ふ 色に
 出だすとは人の前にあらははして
 年頃色には出ださせ給ふ 色に
 出だすとは人の前にあらははして

此歌の次第 曲舞の始めの文句
 年頃色には出ださせ給ふ 色に
 出だすとは人の前にあらははして

にも着きよけり。
ワキ詞「御急ぎ候ふほどに。是ははや越後越中の境川一御着きに
 て候ふ。暫く是は御座候ひて。猶や道の様体をも御尋ねあらう
 ずるよて候ふ。ツレ詞「げよや常に承る。西方の淨土は十萬億土
 とかや。是は又彌陀來迎の直路なれば。あげろの山とやらんに
 参り候ふべー。とても修行の旅なれば。乗物をば是よとせ置
 き。歩徒はだーよて参り候ふべー。道一るべーて給ひ候へ。ッ
 」。あら不思議や。暮るまじき日よて候ふが俄に暮れて候ふよ。
 扱何と仕り候ふべき。
ツテ「のうく旅人御宿参らせうのう。是はあげろの山とて人里
 遠き所なり。日の暮れて候へば。わらはが庵にて一夜を明かさ
 せ給ひ候へ。ツキ「あらうれーや候ふ。俄に日の暮れ前後を忘じ
 て候ふ。やがて参らうするにて候ふ。ツテ「今宵の御宿参らする

年頃色には出ださせ給ふ

此歌の次第 曲舞の始めの文句

年頃色には出ださせ給ふ 色に 出だすとは人の前にあらははして

事。とりわき思ふ子細あり。ツテ「山姥の歌の一節うたひて聞か
 させ給へ。年月の望なり。鄙の思出と思ふべー。其爲めよこ
 日を暮らう。御宿をも参らせて候へ。いかさまよも誑はせ給ひ
 候へ。ツキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。扱誰と見申
 されて。山姥の歌の一節とは御所望候ふぞ。ツテ「いや何をか包
 み給ふらん。あれにまゝます御事は。百魔山姥とてかくれなき
 遊女よてはまゝまさずや。まづ此歌の次第とやらんに。よー足
 引の山姥が。山めぐりすると作られたり。あら面白や候ふ。詞
 「是は曲舞よ依りての異名とて誠の山姥をば。如何なる物とか
 知ろーめされて候ふぞ。ツキ「山姥とは山に住む鬼女とて曲舞
 にも見えて候へ。ツテ「鬼女とは女の鬼とや。よー鬼なりとも人
 なりとも。山に住む女ならば。妾が身の上よてとぞむらはすや。
 年頃色にはいださせ給ふ。言の葉草の露ほども。御心よはかけ

我生前の骨なり。我前生の行法
 れたなり。故に來ていふ天人と生
 り。と云ふ事。阿育王傳に生
 生の見ゆ。之を引けるなり。我
 積みたるの意。を棄れて善根を
 いや善根を二。前の靈鬼と天
 人の善根を二。佛法の一理に歸す
 る事なり。佛法の一理に歸す
 萬箇日前の境界。すべて目前の
 事物に依りて悟る事云ふ。あ
 げろ山の氣色の事に依りて云
 照河神々。瀾のひろく落つる
 巖と云ふ。岩石の高く變えたる
 山復山。何工削り成青巖之形。水
 復水。維家山。出雲澤之色。期
 形。築なる江澄明の文なり。山
 は。如何なる工匠のしわざなら
 ん。また水の色毎に緑深きは隨
 家の染敷より染め出だせざる事
 なり。碧潭はみどりの淵と云ふ。
 糖に出で初めし。鬼女の名とあ
 らば玉の。闇の枕詞。
 たりたる如き白髪と云ふ。のた
 さにのり。丹にて赤く塗りたる
 鬼軒の瓦の云々。鬼瓦の事。
 伊勢の語に「夜

ッレ「恐ろーや月も木深き山陰より。其さまけーたる顔ばせは。
 其山姥よてまーますか。シテ」とてもはや穗に出でうめー言の葉
 の。氣色よも知ろーめさるべー。我にな恐れ給ひそとよ。ッレ
 「此上は恐ろーながらうば玉の。開まされよりあらはれ出づる。
 姿詞は人なれども。シテ」髪にはれどろの雪を戴き。ッレ「眼の光
 りは星の如し。シテ」扱面の色は。ッレ」さぬりの。シテ」軒の瓦
 の鬼の形を。ッレ」今宵始めて見る事を。シテ」何にたどへん。ッ
 レ」古への。地「鬼一口の雨の夜。雷なりさわぞ恐ろーき。其
 夜を思ひ白玉か。何ぞと問ひー人までも。我身の上に爲りぬべ
 き。浮世がたりも恥づかーや。
 シテ詞「春の夜の一時を千金に換へじとは。花よ清香月に陰。是は
 願ひのたまさか。行き逢ふ人の一曲の。其ほどもあたら夜に。
 はやー諸ひ給ふべー。ッレ」げに此上はともかくも。いふよ及

も更けにければ。鬼ある所とも
 知らず。神さへいさみす。つ
 り雨もいたう降りければ。云々。
 はや夜に明けなんさ思ひつゝ居
 たりけるに。鬼はや女と一
 口に食ひてけり。あなやさいひけ
 ざりけり。神の鳴るさわざいひけ
 ざりけり。さあると引く。聞か
 白玉。何ぞと問ひし。右の文の
 前後に「芥川さいふ河をいきけ
 れば。草の上になんたりける。露
 ける。と云々。(こゝに鬼はや一
 口の文句あり)やうく鬼はや一
 なし。足すりとして泣けども。明
 ひし時。露と答へて。なましも
 の。と云々。と引く。
 我身の上。人生は猶我するも
 のなれば。或は露の事問ひし女
 らす。の意を含む。
 春の夜の云々。蘇東坡の時に春
 竹一刻値千金。花有清香一月有
 其ほどもあたら夜に。一寸の時
 鼓は瀧波。瀧の音を鼓に代用す
 る事。
 袖は白妙。瀧波の色を舞の袖に
 代用する事。瀧波と云ふ舞曲の
 名とあけて。瀧と梅花との形容
 水の云ふ。瀧波と云はん爲めな
 何れの事か法ならぬ。何事も佛
 法の外ならずとの意。引歌あり

ほぬ山中。シテ「一聲の山鳥羽をたよく。ッレ」鼓は瀧波。シテ
 「袖は白妙。ッレ」雪をめぐらす木の花の。シテ」何はのこどか。
 ッレ」法ならぬ。地「よー足引の山姥が。山廻りするが苦ーき。
 シテッリ「夫れ山といつば。塵泥より起つて。天雲かゝる千丈の
 峯。地「海は苔の露よりたたりて。波濤を疊む萬水たり。シテ
 「一洞空き谷の聲。梢に響く山彦の。地「無聲音を聞きたより
 となり。聲にひさかぬ谷もがなど。望みーもげにかくやらん。
 シテ「こどに我住む山家の氣色。山高うーて海近く。谷深うーて
 水遠し。地「前には海水濺々として。月真如の光りをかかげ。後
 には嶺松巍々として。風常樂の夢を破る。シテ「刑鞭蒲朽ちて螢
 むな一く去る。地「諫鼓苔深うーて鳥驚かずともいひつべー。
 「遠近の。たづきも知らぬ山中に。れぼつかなくも呼子鳥の。
 聲すでき折々。伐木丁々として。山さらに幽なり。法性峯う

一洞波の注と見るべし。谷の淵なし
て空虚なる處に反響の響ちわた
る云ふ。無明谷深きよらほひは。下化
衆生を表して。金輪際及びべり。うもく山姥は。生所も知ら
ず宿もなし。たゞ雲水を便りにて。至らぬ山の奥もなし。
「然れば人間あらずとて。地隔つる雲の身をかへ。假に自性
を變化して。一念化生の鬼女となつて。目前來れども。邪正
一如と見る時は。色即是空のまこと。佛法あれば世法あり。
煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあ
り。柳は緑花は紅の色々。扱人間に遊ぶ事。ある時ハ山姥の。
樵路一通ふ花の陰。やすむ重荷に肩を借し。月もろとも山を
出で。里まで送るをりもあり。又ある時は織姫の。五百機立つ
る窓に入つて。枝の鶯糸くり。紡績の宿に身を置き。人を助く
るわざをのみ。賤の目見えぬ。鬼とや人のいふらん。世
を空蟬の唐衣。地拂はぬ袖置く箱は。夜寒の月埋もれ。打

ひえては。上求菩提をあらはし。無明谷深きよらほひは。下化
衆生を表して。金輪際及びべり。うもく山姥は。生所も知ら
ず宿もなし。たゞ雲水を便りにて。至らぬ山の奥もなし。
「然れば人間あらずとて。地隔つる雲の身をかへ。假に自性
を變化して。一念化生の鬼女となつて。目前來れども。邪正
一如と見る時は。色即是空のまこと。佛法あれば世法あり。
煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあ
り。柳は緑花は紅の色々。扱人間に遊ぶ事。ある時ハ山姥の。
樵路一通ふ花の陰。やすむ重荷に肩を借し。月もろとも山を
出で。里まで送るをりもあり。又ある時は織姫の。五百機立つ
る窓に入つて。枝の鶯糸くり。紡績の宿に身を置き。人を助く
るわざをのみ。賤の目見えぬ。鬼とや人のいふらん。世
を空蟬の唐衣。地拂はぬ袖置く箱は。夜寒の月埋もれ。打

つ遠近のたづねも知らぬ山中に
集の歌いづき見ても便りな
すく心細き奥山にて我を呼ぶ聲の
あらはれし我を呼ぶ聲の
伐木丁々。杜子美の詩に春山無
事。伐木丁々。伐木丁々。伐木丁々。
法性鮮明。伐木丁々。伐木丁々。伐木丁々。
山中。伐木丁々。伐木丁々。伐木丁々。
無明谷深きよらほひは。下化衆生を表して。金輪際及びべり。うもく山姥は。生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便りにて。至らぬ山の奥もなし。
「然れば人間あらずとて。地隔つる雲の身をかへ。假に自性を變化して。一念化生の鬼女となつて。目前來れども。邪正一如と見る時は。色即是空のまこと。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。柳は緑花は紅の色々。扱人間に遊ぶ事。ある時ハ山姥の。樵路一通ふ花の陰。やすむ重荷に肩を借し。月もろとも山を出で。里まで送るをりもあり。又ある時は織姫の。五百機立つる窓に入つて。枝の鶯糸くり。紡績の宿に身を置き。人を助くるわざをのみ。賤の目見えぬ。鬼とや人のいふらん。世を空蟬の唐衣。地拂はぬ袖置く箱は。夜寒の月埋もれ。打

ちすさむ人の絶間も。千聲萬聲の。枯に聲のいでうつは。た
だ山姥がわさなれや。都歸りて世語にせさせ給へど。思ふは
猶も妄執か。唯うち捨てよ何事も。よ一足引の山姥が。山廻り
するが苦き。
シテ「あーびきの。地山めぐり。シテ「一樹の陰一河の流れ。皆
これ他生の縁がかり。まいてや我名を夕月の。浮世をめぐる一
節も。狂言綺語の道すぐ。讚佛乗の因がかり。あら御名残を
いや。いとま申して歸る山の。地春は梢に咲くかと待ちし。
シテ「花を尋ねて山めぐり。地秋はさやけき影を尋ねて。シテ「月
見る方よと山めぐり。地冬はさえ行く時雨の雲の。シテ「雪を
さうひて山めぐり。地めぐりく。輪廻を離れぬ妄執の雲
の。塵つもつて山姥となれる。鬼女が有様みるやくと。峯よ
かけり谷よ響きて。今までこゝよあるよと見えしが。山また山

1山めぐりて。行方も知らずなりけり。

色即是空 般若心經に色不異空... 世法に生活する法を云ふ。例の和尚の歌に「佛法と世法は人の身と心一つ欠けては立たぬものなり」とあり。...

嵐山

あらしやま

元安作

吉野の花の種どり。嵐の山は急がん。詞「抑是は當今」

肉と骨と。君が代を祝する。吉野の山の種どり。嵐の山は急がん。...

仕へ奉る臣下なり。扱も和州吉野の千本の櫻は。聞こゝめー及ばれたる名花なれども。圓滿十里の外なれば。...